原町市埋蔵文化財調査報告書第21集

県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

下北高平舘跡・正福寺跡・広畑遺跡

2000年３月

福島県相双農林事務所
原町市教育委員会

原町市埋蔵文化財調査報告書第21集

県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

下北高平舘跡・正福寺跡・広畑遺跡

2000年３月

福島県相双農林事務所
原 町 市 教 育 委 員 会

序

文化財は、わが国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることのできなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では開発によって失われてしまう埋蔵文化財について、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、高平地区ほ場整備事業に伴い失われてしまう下北高平館跡、正福寺跡、広畑遺跡について、実施した発掘調査の成果報告書です。

調査の結果、下北高平館跡では中世金沢氏の館跡の周囲を巡る溝跡、正福寺跡では近世正福寺の墓地、広畑遺跡では掘立柱建物跡と溝跡などの遺構と、多量の墨書土器などが出土しました。

おわりに、調査にあたってご協力いただきました、福島県相双農林事務所の皆様、高平ほ場整備施行委員会、地権者の皆様に深く感謝するとともに、調査および報告書刊行にあたってご指導、ご協力いただきました各位に衷心より謝意を表します。

平成12年３月

原町市教育委員会

教育長　鈴　木　清　身

例　　言

1　本報告書は平成７年度から平成10年度にかけて県営高平地区農業基盤整備事業に伴って実施した発掘調査の報告書である。

2　発掘調査にかかる経費は福島県相双農林事務所、原町市が負担した。

3　出土した木製品の保存処理については㈱釜石文化財保存処理センターに委託した。

4　出土した墨書土器の判読については　国立歴史民俗博物館教授平川南氏、宮城県東北歴史博物館、福島県立博物館荒木隆氏にご教示、ご協力をいただいた。

5　出土した骨の鑑定については、東北大学理学部解剖学第1講座に委託した。

　教授百々幸男・奈良貴史・埴原恒彦・佐宗亜依子

6　出土した古銭の鑑定については、岩手県立博物館赤沼英男氏に委託した。

7　本報告書の執筆及び編集は、原町市教育委員会生涯学習部文化課　堀　耕平、鈴木　文雄、荒　淑人が行った。

8　本報告書に掲載した遺構写真は鈴木文雄、荒　淑人、安達訓仁が撮影し、出土遺物の写真は鈴木文雄、荒　淑人が撮影した。

9　本報告書に掲載した遺物の実測は狭川麻子、岩谷こずえ、久松舞子が行い、遺構、遺物のトレースは、狭川麻子、岩谷こずえ、佐藤祐太、久松舞子、古谷洋子、寺内美智子、遠藤和子、太田正子、山本恵子、遠藤実恵子が行った。

10　調査の期間中及び報告書作成にあたって次の方々及び機関よりご教示・ご協力いただいた。（敬称略）

福島県教育庁文化課・福島県立博物館・東北歴史博物館・東北学院大学考古学研究部

荒木　隆・阿部博志・飯村　均・小野田義和・木幡照雄・木幡一征・佐藤春巳・佐藤琢磨

鈴木　啓・高野芳弘・玉川一郎・辻　秀人・西　徹雄・平川　南・藤原妃敏・森　幸彦

安田　稔・柳沢和明

11　出土遺物及び発掘調査に関する一切の資料は、原町市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　図中の方位は、真北方向を示している。

2　水糸レベルは、海抜高度を示している。

3　遺物の断面黒ベタは須恵器、それ以外は白抜きで図示した。なお墨書は黒ベタで表示している。

4　掲載した遺構遺物の縮尺率は図版の右下に記載し、挿図下方にスケールを付している。

5　遺構平面図のスクリーントーンは柱穴を示しており、土層断面図のスクリーントーンは地山を示している。

6　遺物で使用したスクリーントーンは、土師器においては黒色処理及び黒斑、転用硯については硯の使用面を示している。

7　断面図の土層は、基本層位をＬ１・Ｌ２…大文字で、遺構堆積土をℓ１・ℓ２の小文字で表示した。

8　本文ならびに図作成に際しては以下の記号・略号を使用した。
　Ｔ：トレンチ、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＤ：溝跡、ＳＸ：墓跡

目　　次

序
例言
凡例
目次
第1編　原町市を取り巻く環境
第1章　地理的環境 …… 3
第2章　歴史的環境 …… 5
第2編　調査に至る経過
第1章　調査に至るまで …… 13
第3編　下北高平館跡
第1章　調査に至る経過 …… 19
第2章　遺跡の概要 …… 20
第3章　調査の方法 …… 21
第4章　調査結果 …… 22
第1節　遺構 …… 22
第2節　遺物 …… 27
第3節　伝世資料 …… 28
第4節　まとめ …… 31
第4編　正福寺跡
第1章　調査に至る経過 …… 35
第1節　調査結果 …… 35
第2節　調査要項 …… 35
第2章　遺跡の概要 …… 36
第3章　調査の方法 …… 37
第4章　調査成果 …… 40
まとめ …… 58
付章1　福島県原町市正福寺跡出土人骨について（東北大学医学部解剖学第1講座） …… 65
付章2　正福寺跡出土銭貨の金属考古学的調査結果（岩手県立博物館） …… 77

第５編　広畑遺跡

第１章　調査に至る経過 ……85
第２章　調査要項 ……85
第３章　調査方法 ……86
第１節　試掘調査 ……86
第２節　発掘調査 ……89
第４章　調査成果 ……93
第１節　遺構について ……93
1　掘立柱建物跡 ……93
2　溝跡 ……96
第２節　遺物について ……96
1　土師器 ……96
2　須恵器 ……106
3　灰釉陶器 ……110
4　その他の遺物 ……111
第３節　まとめ ……112

写真図版 ……119

報告書抄録 ……162

第１編　原町市を取り巻く環境

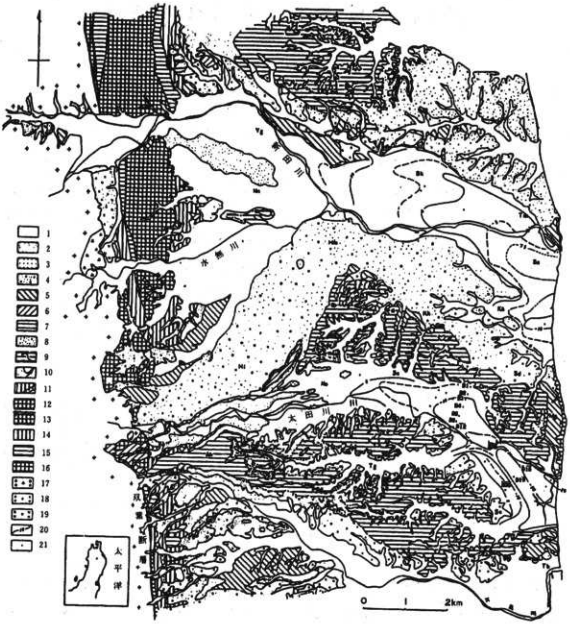
第１編　原町市を取り巻く環境

第１章　地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯舘村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約49,800人、面積は約199.66㎢で、当地方の産業および政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するＪＲ常磐線と国道６号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、および丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部にいくにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯と双葉丘陵地域（岩沼－久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層および中生層に貫入した古期および新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～600m前後になっている。高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30mを測る。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成および河成の段丘が構成され、高位より順に第１段丘、第２段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む７段丘の存在が知られており、特に第１段丘である畦原段丘と第４段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20m以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期（かいしんき）には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木（だいき）２ａ式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、海水面を標高６ｍ前後に求めている。現在ではほ場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。



1："沖積層"，2：第6段丘構成層，3：第5段丘構成層，4：第4段丘構成層，5：第3段丘構成層，6：第2段丘構成層，7：第1段丘構成層，8～11：竜の口層，8：同c層（砂岩），9：同c層（シルト岩・京塚沢凝灰岩），10：同b層，11：同a層，12～19：基盤岩類，12：塩手層，13：小山田層，14：富沢層，15：中の沢層，16：柳窟層，17：古生層，18：花崗岩類，19：脈岩，20：竜の口層上面標高(m)，21：ボーリング地点と孔番，Ah：畦原，Bb：馬場，Hi：雲雀ケ原，Hm：原町市街，Ht：東高松，Ka：菅浜，Kh：北原，Kk：片倉，Mg：関形沢，Mm：米々沢，Nn：長野，No：中太田，Om：大甕，Sd：雫，Se：下江井，Sk：下北高平，So：下太田，Ss：下浜佐，Tb：塚原，Tg：鶴谷，Tm：館前，Yg：横上

図1　原町市地質図（原図　1979　中川他）

第２章　歴史的環境

最近の原町市では、火力発電所建設や県営は場整備事業などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代の遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでにも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用に努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、尚一層の保存・活用の努力が求められているところである。

また、平成７年（1995）には国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の繰り広げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」が建設された。平成10年度には「野馬追の里原町市立博物館」と名称変更され、当地方の歴史・民俗における生涯・社会教育の場として活動している。

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、遺跡の出土する散布地が９ヶ所知られている。立地条件を概観すると畦原Ａ遺跡（１）、熊下遺跡（２）、袖原Ａ遺跡（３）などは太田川流域の第１段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎Ａ遺跡（４）、南町遺跡（５）、橋本町Ａ遺跡（６）、桜井遺跡（７）などは第４段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は、早期末から前期初頭の住居跡の調査が行われた片倉の八重米坂Ａ遺跡（８）、隣接する羽山Ｂ遺跡（９）などが阿武隈高地裾部に所在している(註１)。太田川を北に臨む第１段丘面に所在する片倉の畦原Ｆ遺跡(10)の調査(註２)では早期末から前期前葉の土坑３基が調査されている。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地上に所在する遺跡も知られている。前期初頭大木２ａ式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡(11)(註３)や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬這遺跡(12)は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、当該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木９～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡(13)が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡(14)周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木８ａ～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約１㎞、同段丘面上に立地する植松Ａ遺跡(15)では、昭和52年(1977)の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡１棟が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞Ｃ１～Ａ式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡(16)などの遺跡が市内各地に所在している。平成８年(1996)の宅地造成に伴う高見町Ａ遺跡(17)の発掘調査では晩期中葉の埋設土器を伴う石囲炉の竪穴住居跡１軒が調査されている(註４)。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標識土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡(7)(註5)が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石庖丁が出土する例が報告されている。また、平成5年(1993)に調査された高見町A遺跡(17)からは弥生時代の後期に位置付けられる十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2棟発見されている(註6)。平成8年(1996)に高平地区ほ場整備事業に伴う法幢寺跡(18)からは桜井式期の土器棺が1基調査されている。

古墳は、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳(19)新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋佐支群(20)を構成している。桜井古墳は昭和58年(1983)に範囲確認調査(註7)が行われており、主軸長72mの墳丘部に、幅約11～20mの周溝が巡っていたことが確認されている。平成8年(1996)の高平地区ほ場整備事業に伴う相馬胤平居館跡(21)の調査では方形周溝墓2基が発見されている。

他に昭和42年(1967)に、中太田所在の墳丘部軸上約40mの前方後円墳と推定される与太郎内1号墳(22)、高見町1丁目所在の墳丘部直径約12mの円墳である高見町1号墳(23)の発掘調査が行なわれ、高見町1号墳からは粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認されている(註8)。

平成5年(1993)の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は未発見であったが、外郭直径約15m、幅約2mの円形の周溝1基が発見され、高見町2号墳と命名されている。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡2棟が市内では初めて発見(註6)されており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを示している。高見町A遺跡は同時に桜井古墳群高見町支群(17)としても重要な地域で、平成7年には市道予定区域とその西側の部分について発掘・試掘調査が実施され、古墳8基、周溝を伴わない刳抜石棺3基、箱式石棺1基の他、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21棟が確認されており、同古墳群の密度の高さをあらためて示している。

また、平成8年(1996)には荷渡古墳群(24)の3基の山頂墳が調査され、いずれの埋葬施設も割竹形木棺の直葬であった(註4)。この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地蔵堂古墳群(25)、江井の西谷地古墳群(26)、鵜谷の五治郎内古墳群(27)などが所在している。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況をみると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平には北沢横穴群(28)、京塚沢横穴群(29)、新山前横穴群(30)、北泉に大磯横穴群(31)、地蔵堂横穴群(32)、太田川北部の上太田には道内迫横穴群(33)、大甕には西迫東迫横穴群(34)、雫には坂下横穴群(35)、太田川南部の高には、昭和40年(1965)に調査された高林横穴群(36)(註9)などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群(37)、羽山横穴群(38)、上大田の新橋横穴群(39)は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴(40)は、玄室奥壁に壁画が描かれて

おり(註10)、調査後に保存施設を建設して年間4回の一般公開を通して社会教育に役立てている。

奈良・平安の遺跡は、律令体制のもとに行方郡衙に擬定される泉廃寺跡(41)や軍団跡に擬定される植松廃寺跡(42)が新田川北側の丘陵裾部に所在している。両遺跡についてはこれまで発掘調査による成果はなかったが、泉廃寺跡については、平成6年度(1994)、県史跡内の従来焼け米が出土する地点から西側で、宅地新築に伴う試掘調査により、8～9世紀の掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出されると共に、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が確認された。平成7年度には県史跡の南東外側で、官衙的な色彩の強い一本柱柱列跡が2列発見され、平成8年度の第3次調査では掘立柱建物跡3棟、一本柱列2列などが調査され、第4次調査では掘込地業を伴う礎石建物跡とこれを囲む溝跡が検出され、なんらかの院を構成するものと推定され(註4)。今後の調査が期待される。また、両遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉廃寺跡には雫の京塚沢瓦窯跡(43)が、植松廃寺跡には昭和59年(1984)に国士館大学により発掘調査が行われた入道迫瓦窯跡(44)(註11)が考えられている。この他、馬場の滝ノ原窯跡(45)では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢丘陵の一帯には大規模な製鉄遺跡(46)が所在している。平成元年度(1989)から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉跡123基・木炭窯跡140基・竪穴住居跡121棟・鍛冶炉跡16基・掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている(註12)。

東北電力原町火力発電所では、発電所敷地内に木炭炉と製鉄炉の保存館を建設し、年4回の一般公開を行っている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。大甕地区ほ場整備事業に関連して平成2年(1990)に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡(47)では、奈良～平安時代の竪穴住居跡3棟が確認(註13)されており、平成4年(1992)には上北高平の高松B遺跡(48)でも奈良～平安時代と推定される竪穴住居跡2棟が試掘調査により発見されている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡(49)は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡(50)、大甕七館の一つである明神館跡(51)、奥州下向の際、最

初に相馬氏の拠点となった別所の館跡(現、太田神社)(52)などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡(53)はその可能性が高い。平成2年に範囲確認調査が実施(註13)され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、近世にかけての遺跡と推定される。遺跡は奈良～平安時代の集落竹花A遺跡に隣接し、大田川北岸の自然堤防上に立地している。

中世末の館跡である泉平館跡(54)は、相馬一族の長、岡田氏の居城とされ、短期間に使用された館であるが、高平地区ほ場整備事業に伴い、平成7年度に主郭から南側の発掘調査が実施された。小規模な畝堀を伴う堀跡と出入口が見つかった。

近世の遺跡として、初頭期の慶長2年(1597)から同8年(1603)に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初頭の寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手(55)及び出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町の菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在ではほとんど消滅してしまっており、その保護が急がれるが、昭和62年(1987)の桜井野馬土手の範囲確認調査(註14)及び、平成5年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡(56)一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山があり、周辺の小規模なたたらとしては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡(57)、片倉の羽山B遺跡(9)が阿武隈高地の山間部に遺されている(註1)。

また、近年、泉の正福寺跡(58)では火葬墓が調査され、泉の法幢寺跡(18)、北泉の地蔵堂B遺跡(59) ではいわゆる鍋被りを含む土坑墓が調査され、近世の葬制・墓制に関する資料も蓄積されつつある。

「参考文献・引用文献」

註　1　1990　寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅰ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

註　2　1994　武田耕平『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書畦原F遺跡』原町市教育委員会

註　3　1983　長島雄一『赤沼遺跡試掘調査報告』原町市教育委員会

註　4　1997　鈴木文雄他『原町市内遺跡発掘調査報告書２』原町市教育委員会

註　5　1992　竹島國基『桜井』

註　6　1996　辻　秀人他『桜井高見町Ａ遺跡発掘調査報告書』東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会

註　7　1985　玉川一郎他『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』原町市教育委員会

註　8　1969　竹島國基他『原町市高見町１号墳・与太郎内１号墳調査報告書』原町市教育委員会

註　9　1965　竹島國基他　『原町市高林古墳群調査報告書』原町市教育委員会

註　10　1974　渡邊一雄他　『羽山装飾横穴発掘調査概報』原町市教育委員会

註　11　1984　戸田有二　『考古学研究室発掘調査報告書福島県原町市・入道迫瓦窯跡』国士館大学文学部考古学研究室

註　12　1991　寺島文隆他　『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅱ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

1992　寺島文隆他　『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅲ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

註　13　1991　玉川一郎他　『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』原町市教育委員会

註　14　1988　玉川一郎　『野馬土手跡範囲確認調査報告書』原町市教育委員会

図２　原町市主要遺跡位置図

第2編　調査に至る経過

第2編　調査に至る経過

第1章　調査に至るまで

原町市高平地区は、原町市の中心部から東へ約3㎞に位置し、国道6号線の東側、二級河川新田川の北側に開けた水田地帯である。

高平地区は昭和28年から30年に耕地整理で10ａの区画整理済であるが、地区内の用排水施設が未整備の上、用排水兼用であるため排水条件が悪く、一部地下水位の高い湿田があった。また、農道についても直線ではあるが幅員狭小で通行に支障をきたしていた。

そこで、福島県相双農林事務所と高平地区は場整備施行委員会は、耕地を大型は場に整備するとともに道路・用排水路を系統的に配置し、耕地の集団化を図り、大型機械導入による営農労力の節減と、畑作振興により農業経営の安定と食糧の安定供給に寄与するため、低コスト化水田農業大区画は場整備による担い手育成基盤整備事業に取り組むこととなった。事業面積は240haであった。

平成5年、この事業計画について原町市土地改良区は、地区内に所在する文化財の有無について、原町市教育委員会に照会し、同委員会ではその時点で、福島県史跡泉廃寺跡を含む6遺跡の所在を回答した。

工事の面整備は平成6年度から着工し、文化財の調査と調整を図りながらすすめることとなった。本地区では文化財の占める面積が大きいことから、工事に合わせて発掘調査を行い、整理業務及び調査報告書作成はその後に行うこととなった。

発掘調査経費は原則として、試掘調査は文化財保護側負担、本調査は市及び県の負担、そして農家負担金については市が負担することとした。

その後、工事と文化財調査が進むにつれ、地元の伝承や遺物の散布から新たに4遺跡が確認された。

表1　高平地区ほ場整備事業関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	面積(㎡)	備考
1	荷渡遺跡	下北高平字荷渡	散布地	弥生	12,000	石斧、石鏃
2	下北高平館跡	下北高平字古館	城館跡	中世	8,000	金沢氏
3	法幢寺跡	泉字寺前	社寺跡	近世	25,000	
4	泉廃寺跡	泉字宮前、寺家前	官衙跡	奈良・平安	120,000	行方郡衙
5	相馬胤平居館跡	下高平字牛渡前	散布地	奈良・平安、中世	21,000	
6	泉平館跡	泉字町畑、館腰	城館跡	近世	12,000	岡田氏
7	正福寺跡	泉字前向	社寺跡	近世	660	
8	町遺跡	泉字町	散布地	奈良・平安	14,000	
9	広畑遺跡	泉字館腰、塚越	散布地	奈良・平安	52,800	土師器、瓦
10	牛渡前遺跡	下北高平字赤宇津木、下高平字荒井前	散布地	弥生	15,500	石庖丁
合計					280,960	

発掘調査は平成６年度から10年度まで、 10遺跡について合せて試掘調査24,495㎡、発掘調査78,892㎡を実施した。試掘調査成果については、国庫補助事業により刊行した調査報告書に記載し、本発掘調査成果については、本事業の一環として、平成11年度から13年度までの期間で継続的な整理業務と発掘調査報告書を刊行することとなった。

発掘調査報告書は平成11年度は下北高平館跡・正福寺跡・広畑遺跡、平成12年度は法幢寺跡・泉平館跡、平成13年度は泉廃寺跡・相馬嵐平居館跡について記述することとした。

表２　発掘調査実施一覧表（単位は㎡）

番　号	遺　跡　名	６年度	７年度	８年度	９年度	10年度	計
1	荷　渡　遺　跡		400				400
2	下北高平館跡		640	1,900			2,540
3	法　幢　寺　跡			3,551			3,551
4	泉　廃　寺　跡	4,640	1,000 (4,000)	5,100 (1,600)	6,000 (2,558)	7,000 (11,200)	23,740 (19,358)
5	相馬嵐平居館跡		(3,600)	19,297			19,297 (3,600)
6	泉　平　館　跡	912	9,350	4,200			14,462
7	正　福　寺　跡		660				660
8	町　　遺　　跡				11,000	900	11,900
9	広　畑　遺　跡				(2,137)	2,200	2,200 (2,137)
10	牛　渡　前　遺　跡		(1,000)				
計		5,552	12,050 (8,600)	34,048 (1,600)	17,000 (4,695)	10,100 (11,200)	78,892 (25,095)

（　）は国庫補助事業による試掘・確認調査

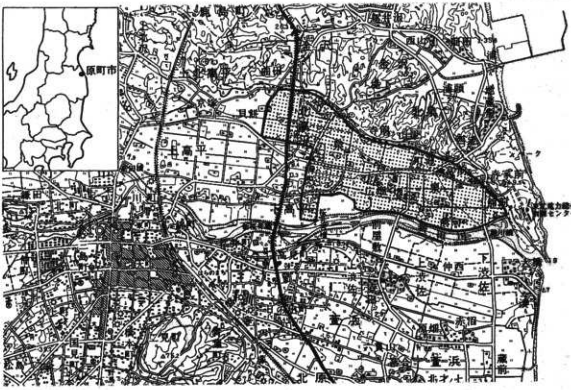


図３　高平地区ほ場整備事業範囲図

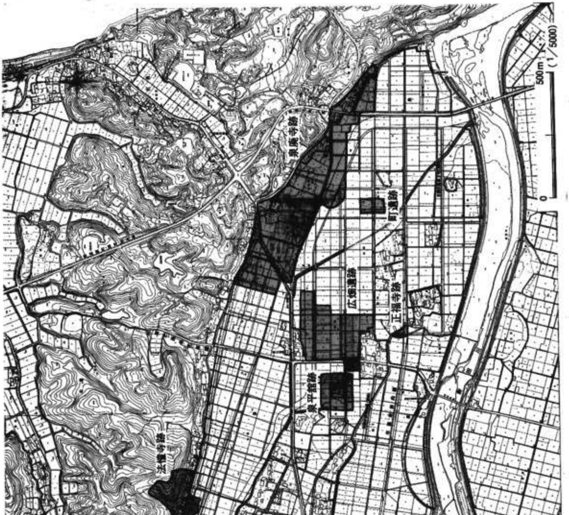


図4　遺跡位置図

第3編　下北高平舘跡

第３編　下北高平館跡（遺跡番号　20600033）

第１章　調査に至る経過(図１)

第１節　調査経過

下北高平館跡は、現在は宅地と前面の畑及び周囲の屋敷林であるため、ほ場整備の地区除外地域であった。しかし、館跡の西側から北側を囲む土塁のすぐ下を掘削して水路を作る計画があり、土塁の外に堀の存在が予想されることから、堀の有無を確認するとともに、館跡の範囲を確認するためトレンチ調査をおこなった（１次調査）。

館跡の北側及び西側は、土塁が残っているため館跡の範囲は現地形からも確認できたが、東側及び西側には土塁が残っていないため、トレンチ調査・聞き取り調査・古地図によって範囲を確認した。

その後、館跡の南側を流れる水路も整備して法面を削る計画が示された。しかし、前段の調査からこの水路は館の堀と考えられるため、水路の断面と削平する平坦面の一部を調査することになった。また、水路脇の道路拡幅に伴い土塁の南端を削平するため、その部分を調査した（２次調査）。

第２節　調査要項

１　遺　跡　名　下北高平館跡

２　所　在　地　福島県原町市下北高平字古館

３　遺跡の性格　中世の館跡（平館）

４　調 査 期 間　（１次調査）平成７年10月23日～10月31日
　　（２次調査）平成７年11月24日～12月15日

５　調 査 面 積　約500㎡

６　調 査 体 制

調 査 主 体　原町市教育委員会

調 査 担 当　文化課文化財保護係　主任文化財主事　鈴木文雄（２次調査）
　　文 化 財 主 事　堀　耕平（１次調査）

事務局体制　教　育　長　渡部秀夫
　　教 育 次 長　横山英夫
　　参事兼文化課長　佐藤一男
　　文化振興係長　高田　毅
　　副　主　査　木幡雅巳

(兼)文化財保護係長　佐藤一男
主任文化財主事　鈴木文雄
文化財主事　堀　耕平

7　発掘作業員　今野昭義・小元智・佐藤敏雄・斎藤禎子・佐久間三雄・寺島日出雄
青田翠・遠藤明・遠藤キミ子・大石房子・木幡春江・杉浦桂子・玉木清
玉木セツ子・新妻順子・八木米子・高井孝子・佐藤フクイ・白石正男

第2章　遺跡の概要

『奥相志』より（註1）

『奥相志』中郷　下北高平村の項には金沢氏館跡と同氏の菩提寺であった普門山龍禅寺についての記述がある。少々長くなるが、以下に紹介する。

「地名　…古館　人家十四戸（古十三、新一）…」。

「古館跡　古館にあり。平地東西四十間余、南北六十間、第のまわりに堤形あり高四尺余。古昔金沢氏の居趾たり金沢氏は当邑を食むといふ。寛文以来木幡氏なる者世々居りたり今開衛門といふ。妙見の小祠右の旧第にあり、これ金沢氏の鎮守なり。」

「金沢氏は旧来金沢邑を食む、よりて氏とす。又標業郡立野邑に住みたりといふ。遠祖金沢石見守平光之大治中の人の後胤金沢某元亨中（1321～1323）より重胤公に属し累世軍忠をつくし、高平館に居り、高胤公のときに当りて金沢石見胤良号す。その子相模胤之、前の盛胤公の世に当り戦死せり先祖よりこゝに至る五世戦死すといふ。その子右馬助胤重、その子主水大学、大永五年（1525）顕胤公岩城重胤と戦ふ。この時父子三人岩城金剛に闘死せり。公之あはれみ胤重の弟僧存入をして環俗して金沢家をつぎ岩見胤清と号せしむ。天文中（1532～1554）胤清古小高帯刀俊胤のために討たる。時に嫡子備中胤昌尚幼なりし故に江井氏をして之を育し祖の家事を摂せしむ。金沢美濃と号す。天正九年（1581）小斎城加番長となり兵士三十余騎を率いて入城す。時に城主佐藤宮内為信謀反を企て悉く加番の士を討つ。美濃為信と戦ひ遂に彼の郎党のために討たる。金沢家君のために死する者こゝに至りて凡そ十人、朝野その忠義を称ふ。備中胤昌成長して天正中（1573～1591）しばしば従軍して勲功亦祖父に減ぜず。采地八十三貫七百五十文。慶長七年（1617）以来食邑を減じ中村にうつる。三子あり、嫡平三郎重之早世、次子彦太夫黒玄之、三子忠兵昌之、昌之巴陵公逝去の時殉死して忠義の名をのこす。両家綿々相続して今に至る。」

「神祠　妙見社宮方一尺七寸　古館にあり。古杉十株あり四株は周一丈二尺余、七株は九尺より五尺に至る。古昔金沢氏の鎮守なり。祠官泉邑佐藤和泉正。」

「僧院　普門山龍禅寺址　古館にあり。曹洞宗小高山同慶寺末寺。無禄。開山同慶六世祖堂和尚。この寺は往古天台宗なりといふ。本尊観世音菩薩古仏霊作。因りて普門山と号すといふ。

往古金沢氏の香火院なり。境内大杉の下に備中胤昌の石塔あり梵字あり、碑の名滅して見えず。其子の石碑もあり。…」

「磐城国行方郡下北高平村第三番字古舘　明治廿年十一月廿日　地籍図」より（写真１）

館跡は北側と南側は小川に挟まれ、西側は田で湿地であったことが伺える。館跡と思われる範囲は東西に長い長方形である。敷地の西側と北側の縁辺は林で、その中に宅地と畑があることが確認できる。

現況（図２）

館跡に２軒の民家がある。そのうちの１軒、木幡フク氏によれば、近年の状況は以下の通りであった。1960年代まで屋敷の周囲に土塁が巡っていて、東側の木幡照雄氏宅南の入口部分だけ土塁が切れていて出入り口になっており、間口は約２間（約3.6mあった。しかし、南側・東側の土塁は1960年代に削平された。東側の土塁は現在は水路に、堀は歩道の下になっているという。北側は武須川が流れていたが、ほ場整備で流路が北に移った。氏神の祠の東側に溝があるが、60年以上前からあった。南側の堀は1960年代のほ場整備以前からあった（この堀については既に明治20年11月20日の地籍図に示されている）。氏神様はトラの神様と呼んでいた。この神様は黒いものが嫌いなので、祠には黒いものを置かないという。

現況は、この地籍図とほとんど変わっていないが、西側の市道に面して入口を作るため、北東隅の土塁が一部削平されている。

第３章　調査の方法（図２～４）

１次調査

館跡と想定される範囲（東西約170m、南北約230m）の範囲に、幅２m、長さ20～30mの14本のトレンチを放射状に設定し、土塁外側の堀の検出につとめた。東側及び南側では溝または低湿地は確認できなかったが、北側では旧河川跡（旧武須川）が確認でき、東側では低湿地が確認できた。このことから、館跡の南限と東限は現在の水路と判断された。

２次調査

ほ場整備に伴う水路の工事は土塁の外側を囲むように計画されていた。そこで、堀の有無を確認するため、水路工事区域に直交するように、つまり土塁と直交するようにセクションベルトを設定し、館跡の南西隅から北東隅まで時計回りにセクションA－A′～D－D′とした。掘り下げる深さは、堀底と予想される水田下の水没面まで掘り下げることとした。

館跡南側の水路を拡幅しまっすぐにする計画があった。この水路は館跡の堀として利用されていたと考えられるため、水路の横断面を調査した。また、この工事に伴い土塁の南端が一部削平されることになたため、土塁の断面を調査することとした。

第4章　調　査　成　果

第1節　遺構

立地(図1)

遺跡は新田川下流北岸の平地に位置する平館である。現在はすぐ北を新田川の支流である武須川が東流している。

郭(図2)

今回の調査では、郭と土塁は調査範囲外であったこと、東側の土塁と堀は破壊されて水路と道路になっているが、現在の道路の西縁が土塁の外側とすると、土塁の外側から外側まで東西約104m(約32間) 南北90m(約30間)の規模を持つほぼ長方形の館跡で（奥相志の記載では東西40間、南北60間)、周囲は川と湿地に囲まれていたことを確認した。郭の内部は不明であるが、平坦な敷地に数棟の建物が配されていたことが想定される。

土塁（図2～3）

1960年代のほ場整備までは四周を土塁が巡り、南側の土塁が幅2間(約3.6m)の間口で開いていたという話から、ここが虎口であったと考えられる。土塁の断面形は台形である。西側の土塁の高さは、外側で1.3～1.8m、内側で0.3～1m。北側の土塁は外側で1.8m、内側で1m。幅は底面で4.5～6m、上面で1～2mであった。

堀(図2～4)

今回の調査の中心は堀の確認であった。以下、館跡の周囲の堀について説明する。

(北側堀)

明治20年の地図や地元居住者の記憶から、少なくとも明治20年(1887)から1960年代のほ場整備までは館跡の北側に東流する小川（武須川）が流れていたことが確認できた。今回の調査でも北側土塁の外約5～7mの所が水際であったことが確認できた。水際には木杭に細長い棒を使い、ちょうど織物の経糸と緯糸のように絡ませて護岸用の土留めとしたシガラミや流木が随所で出土している。このシガラミの時期を決める良好な資料はなかったが、1960年代のほ場整備よりもそう古くない前のものと考えられる。

(南側堀)

北側堀同様に明治時代以前からあった、東流する掘割である。断面形は緩やかなU字形で、人為的な掘削と考えられる。幅は上面で約6m、底で2～2.3m、深さ1.6mを測り、灰色の砂礫層の岩盤まで掘りこんでいる。現在も水が流れているため、堀の底を詳細に調査することはできなかったが、堀底から遺物は出土しなかった。

(西側湿地)

現状は海抜8m弱の水田で、明治時代の地図でも水田である。地山が一段下がったかつての

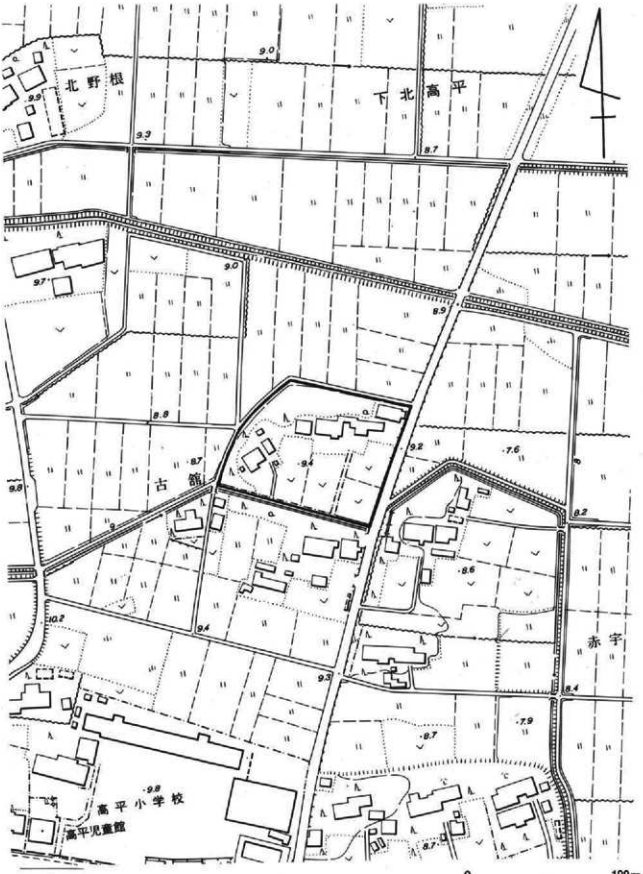


図1　下北高平館跡位置図

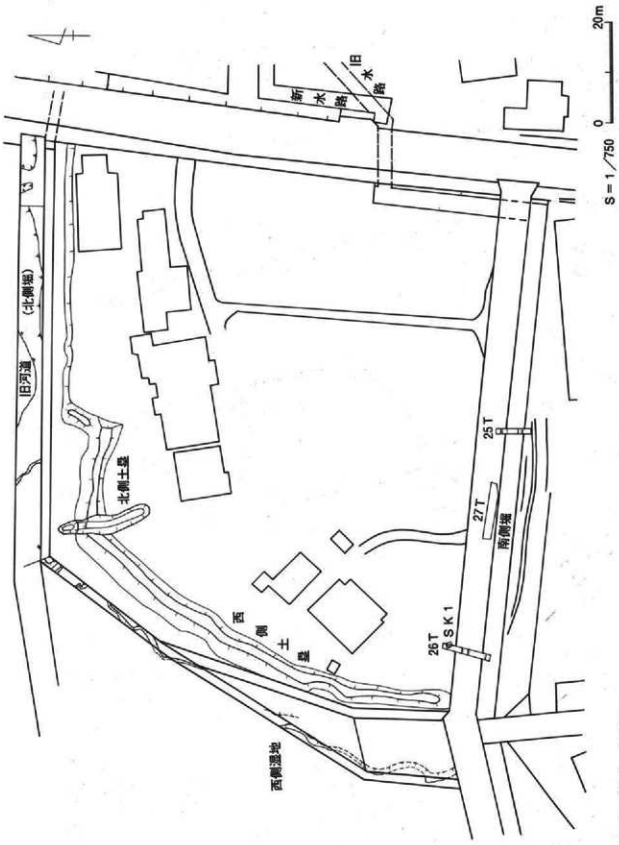


図2　下北高平館跡　全測図

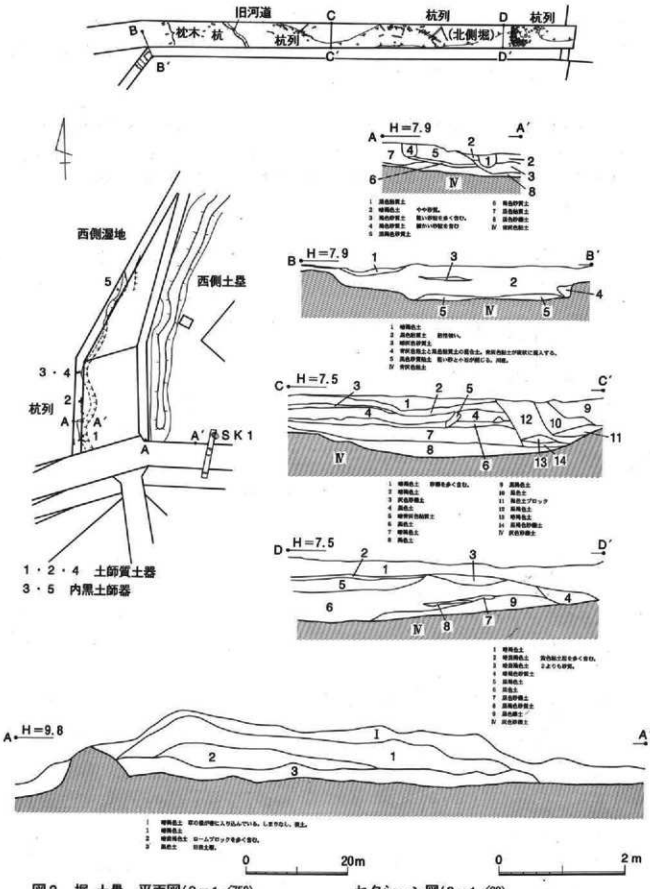


図3 堀、土塁 平面図(S=1/750) セクション図(S=1/60)

水際と思われる箇所で杭列が出土したが、1960年代のほ場整備よりもそう古くない前のものと考えられる。この付近の水田はいつ頃開発されたかは不明だが、新田開発以前は武須川の氾濫原で葦の茂る湿地であったと推定される。

（東側）

現在は東側の土塁を壊し、その東側は道路工事で削平されている。道路の下に南側水路が屈曲して館跡の東を流れている。明治時代の地図ではこの部分が記されていないが、現在の水路の位置は以前とは大きく変わっておらず、南側水路が館跡の東を巡り、北側の武須川に合流していたと考えられる。

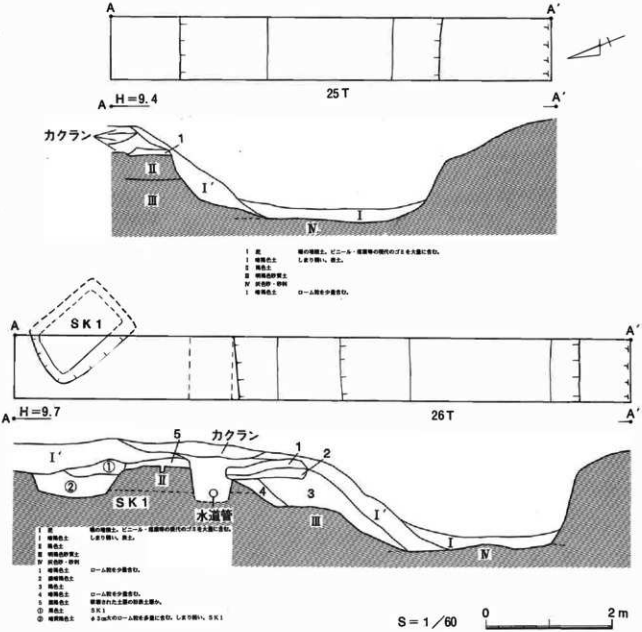


図４　南側堀(26Ｔ・27Ｔ)平面図・セクション図

第2節　遺物

中世・近世の遺物：なし。

平安時代の遺物：土師器少量。（図5、写真21～25）

いずれも西側湿地（西側土塁から約14m外側の一段下がった、南北10mの範囲内）から出土している。出土レベルは現水田面より約1.4m下の標高7～7.25mである。

1．土師質土器

法　　量：口径12.4cm。底径5.2cm。器高3.7cm。

成形技法：ロクロ。底部切り離し、回転糸切。

調整技法：内面　ロクロナデ。

　　外面　ロクロナデ。

胎　　土：密。

色　　調：明褐色。

時　　期：10世紀と思われる。

2．土師質土器

法　　量：口径14.4cm。底径5.8cm。器高3.5cm。

成形技法：ロクロ。底部切り離し、回転糸切。

調整技法：内面　ロクロナデ。

　　外面　ロクロナデ。

胎　　土：密。

色　　調：明褐色、やや赤みを帯びる。

時　　期：10世紀と思われる。

3．土師質土器

法　　量：口径13.4cm。底径6.8cm。器高3.5cm。

成形技法：ロクロ。底部切り離し、回転糸切。

調整技法：内面　ロクロナデ。

　　外面　ロクロナデ。

胎　　土：密。直径約1mmの石英・長石粒を多く含む。

色　　調：明灰褐色。

時　　期：10世紀と思われる。

4．土師器

法　　量：口径14.0cm。底径6.2cm。器高4.4cm。

成形技法：ロクロ。底部切り離し、回転糸切。

調整技法：内面　ロクロナデ。

　　外面　ロクロナデ。

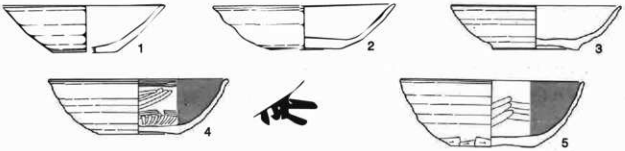


図５　土師質土器・土師器　　S＝１／３　0　10cm

胎　　土：密。
色　　調：内面　明褐色、外面　黒色。
時　　期：９世紀後葉と思われる。
備　　考：体部に不明墨書１文字あり。

５．土師器

法　　量：口径14.4cm。底径6.6cm。器高5.3cm。
成形技法：ロクロ。底部切り離し、回転糸切。
調整技法：内面　ロクロナデ。
　　外面　ロクロナデ。下端、手持ちヘラケズリ。
胎　　土：密。直径約1.5mmの長石粒をやや多く含む
色　　調：内面　明褐色、外面　黒色。
時　　期：９世紀中葉と思われる。

第３節　伝世資料

館跡に住む木幡照雄氏の先祖は金沢備中守であるといわれ、『奥相志』には寛文年間（1661～1672）以来木幡氏が居住していると記載されている。現在、同家では妙見と熊野を氏神として信仰しているが、これも『奥相志』にその件がある。また、同家には代々家宝として伝えられてきた鰐口がある。法量は面径左右最大10.2cm、上下最大9.6cm、厚さ3.1cm、肩幅1.8cmを測る、銅製、鋳造の鰐口である。銘は表面中央に「奉」右に「城明見(ママ)大明神」左に「高平村半谷次衛門」、裏面右に「元禄十五壬午年八月十五日」左に「大工泉田志賀光重」とタガネ状の細い工具で刻まれている。明見大明神は相馬氏が篤く信仰していた妙見神のことで、相馬氏の祖である千葉氏の一族・相馬氏の城（館）に祀られることが多く、ここでも館があった当時から祀られていたと考えられる。「高平村半谷次衛門」と見えるが、『奥相志』の上高平村・下高平村・上北高平村いずれの村の給人郷士名には記載されていない。また、寛永年間の給人郷士の一覧にも登場しないことから、この人物の詳細は不明である。元禄15年（1702）銘の鰐口は、市内江井の正長元年（1428）・元禄９年（1696）銘鰐口に次いで３番目に古い鰐口

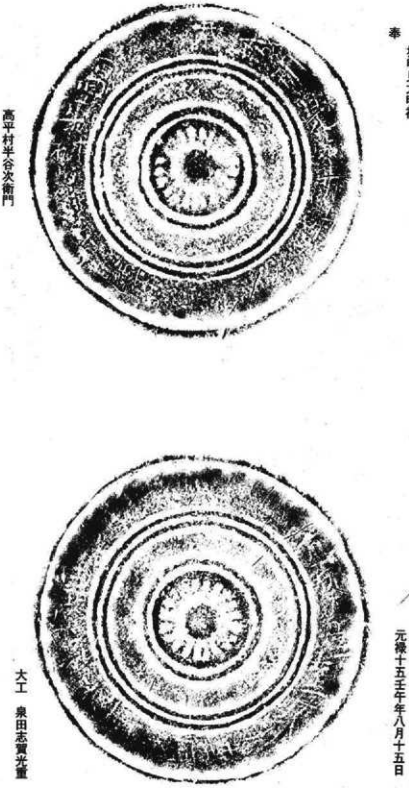


図6 銅口拓本（S＝1／1）

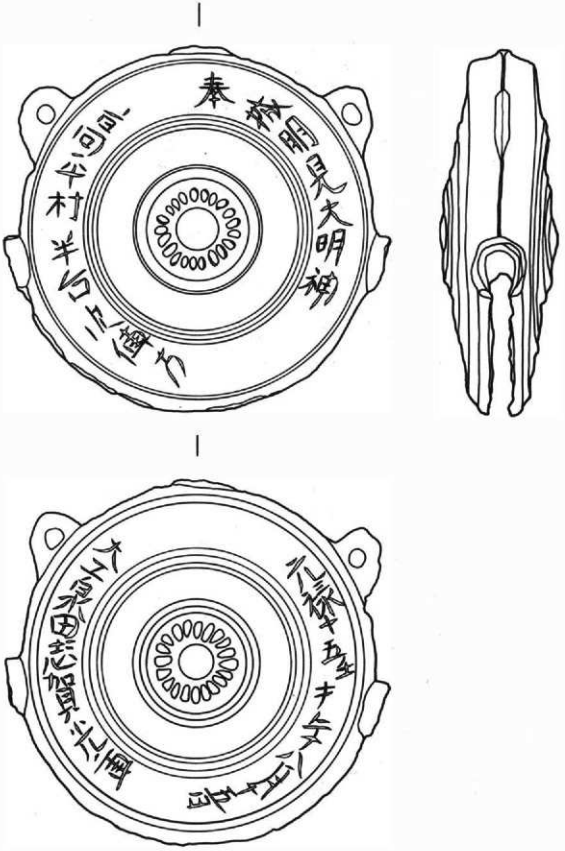


図７　鍔口実測図（Ｓ＝１／１）

である。大工は屋大工ではなく鋳物師の棟梁の意味であろう。泉田の地名は相馬中村藩領内では北標葉郷泉田村（現双葉郡浪江町幾世橋）のみである。（註３）泉田村は宝永年間（1704～1710）には幾世橋村に改称しているが、鐸口の年号の元禄15年（1702）には泉田村であったことから、北標葉郷泉田村に比定できよう。志賀光重という鋳物師については不明である。

第４節　まとめ

今回の調査範囲は館跡の本体ではなく、土塁の外側の堀と湿地が主であったため、遺構の調査としては土塁の地形測量と土塁端部の土層調査、南側堀の一部の土層調査にとどまった感がある。また、期待された中世の木製品なども出土しなかった。しかし、平安時代の土師器がまとまって出土していることから、この付近に平安時代の集落跡があったことが考えられる。また、『奥相志』には東西40間余（72.7m）、南北60間（109m）と記されているが、調査の結果、東西約34間（約104m）、南北30間（約90m）の規模と範囲を確認できたことは大きな成果であった。また、中世から現代、特に1960年代のほ場整備以前までは周辺の地形と環境が非常に良く保たれていた事がわかった。郭内部も大きな改変はないと見受けられるので、今後も文化財に対する理解と、文化財保存への協力を求めていきたい。

註１　『奥相志』斎藤完高　安政４年（1857）～明治４年（1871）
　　「相馬市史」４　資料編１（奥相志）　昭和44年（1969）所収
註２　『原町市史』原町市史編纂委員会　昭和43年（1968）
註３　註１に同じ

参考文献

『日本城郭大系』第３巻　新人物往来社　昭和56年（1981）

第4編　正　　福　　寺　　跡

第４編　正福寺跡（遺跡番号　20600275）

第１章　調査に至る経過

第１節　調査経過

高平地区は場整備事業にともない、現地に農道を通す計画があがった。このため、現地踏査をおこなったところ、墓石３基と墓と思われる低い塚が数カ所確認された。現在、現地の地目は墓地ではなく山林であったため、墓地として整備されなかったが、墓石や塚が地表から確認できることから、近世の墓地跡と推測できた。また、近世末から明治初頭に記された相馬中村藩領内の地誌『奥相志』（註１）中郷　泉村の項には江戸時代の泉村の状況や寺院について記載されており、「泉林山正福寺院号無し…」という記載から、この遺跡を正福寺跡と判断した。この現地踏査結果に基づき、当時の相双農地事務所（現相双農林事務所）と協議した結果、発掘調査をおこない記録保存した後、工事することとなった。

第２節　調査要項

1　遺　跡　名　正福寺跡

2　所　在　地　福島県原町市泉字町畑

3　遺跡の性格　近世、寺院跡（墓地）

4　調査期間　発掘調査　平成８年１月８日～平成８年３月１日

5　調査面積　660㎡／対象面積　660㎡

6　調査体制

調査主体　原町市教育委員会

調査担当　文化課文化財保護係　主任文化財主事　鈴木文雄

事務局体制　教　育　長　渡部秀夫

教　育　次　長　横山英夫

参事兼文化課長　佐藤一男

文化振興係長　高田　毅

副　主　査　木幡雅巳

(兼)文化財保護係長　佐藤一男

主任文化財主事　鈴木文雄

文化財主事　堀　耕平

7　発掘作業員　佐藤敏雄・佐藤フクイ・武山民男・阿部定雄・佐藤時雄・大野利雄・白石正男・山田春雄・西幸吉・西敏子・真壁ヨシ子・小元智・

高橋キイ子・高井孝子・杉浦桂子・玉木清・玉木セツ子・新妻順子・
八木米子・佐藤昭子・北山富子・青田翠・遠藤明・木幡春江・
今野あや子・遠藤キミ子・相良英樹・国分孝徳

第2章　遺跡の概要

『奥相志』より

泉村の戸数及び石高は「宝永六巳丑の年（1709）の戸数百四十一」であったのが、「天明三癸卯の年（1783）八十四戸、三百九十口。同六丙午の年（1786）の戸数簿冊に曰く、四十二戸　八個給人の類、三十四戸民家、百九十一口　四十三人給人の類、百四十八人民家、癸卯の数より此に至る四十二戸、百九十九口を減ず」とあるように、天明の飢饉で人口が大きく減少していた。また、農地も「片付地」「除地」などと称した天明凶年の荒田に関する記述が多くみられる。このようなことから天明飢饉には泉村はかなり疲弊した状況であったことが伺える。

「正福寺　東光院に合す」と記されているが、東光院は泉村にあった真言宗の寺院で、現在泉十一面観音堂のある場所である。

「別当正福寺。仏像長一尺二寸。堂の創建来不祥。享保十四巳酉年再営の棟札あり。堂の側に大杉樹あり。安政六巳未年の春暴風のため堂の屋端を仆し大幹折半せしも屋は小破だに無し。人以って霊仏の奇験となす。」という件があるが、現在、調査地の北東隣に田の神を祀った祠と杉の古木があり、側に石塔の他に古い墓石が残っている。

「泉林山正福寺院号無し　前向にあり。真言宗、本寺岩迫山歓喜寺。当山来歴不祥。本尊不動明王。寺田二石七斗　明暦貞享中二石七斗九合一勺泉邑の内。文政十一戊子年当寺を以って東光院に合す。」と記されている。

伝承（註2）

明暦年間（1655～1657）に、泉村前向に正福寺が建立され、貞享年間（1684～1687）に、正福寺が再興されたという。

安永7年（1778）に、木食上人が、相馬領内に来て不動尊像をつくったという。この像は、後に小高の岩迫から泉村前向の正福寺へ移され、文政11年（1828）に正福寺より泉村寺家前の東光院へ移したという。（写真1）

墨書建築部材

不動明王堂内に保存されている、正福寺の建物部材（長さ1m、幅20cmの角材）には、「享保四巳亥年（1719）」泉村不動尊京都より御下り以後年数六拾年、安永七戊戌年（1778）四月上旬より取行五月中旬堂建立出来申候　願主正福寺住義天精光　建立相〆　御手代佐藤長エ門　村目付高野文エ門　泉村肝入　高野安左エ門　渋佐肝入　高野松左エ門　北泉肝入　鈴木□兵衛」と記載されている。

現況

調査区の周囲は水田で、調査区は周囲を水路に囲まれた三角形の微高地であった。現地は竹林であったため、地元ではテラヤブとも呼ばれていた。つまり、現在では無縁仏ではあるが地域では墓地の存在は知られていた。調査範囲は東西約が22m南北約25mである。調査区の北端と南端は一部削平されていたが、中心部分と思われる区域は残されていた。調査区の周囲は低い土塁状を呈していた。土塁にはさらにいくつかの塚状の盛り上がりがあり、この一つ一つの塚が墳墓と推定れた。また、これらの塚の周囲には４ヶ所で墓石が地表から露出しているのが確認できた。(図１、写真２～12)

第３章　調査の方法

既にいくつかの墓石が地表に表出していることから、他の墓石及び墓坑検出面は非常に浅いと考えられた。

第１段階として、調査区を十字に切るように、東西に２ｍ×約15m、南北に２ｍ×約20mのトレンチ調査を行い、遺構検出面までの土層の堆積状況を確認した。

トレンチ試掘の結果、地表直下の厚さ30～40cmの表土層（暗褐色土、竹の地下茎が密生している）で大小の礫が出土した。この礫は墳墓の上にあった簡単な墓標や墳墓を覆った石と考えられた。また、土塁状の箇所では表土の下に30～40cmの暗褐色土の積土が観察された。表土及び土塁の積土の下は、暗黄褐色であった。

第２段階として、トレンチ調査の状況を受けて、表土を少しずつ除去し、礫を残し土層の違いに注意しながら遺構の検出に努めた。全体に竹の地下茎が密に入り込んでいて、礫が多く出るため、通常表土除去に使用するクサケズリでは刃がたたず、トンビ鍬で表土除去を行った。その結果、遺跡全体に大小の礫が散乱する中で、礫の集中する箇所がいくつかみられたことから、礫積みの墳墓の上面を検出した。

第３段階として、礫を除去し墓坑の検出に努めたが、表土中ではほとんど墓坑のプランを確認することは難しかった。しかし、表土を除去していく過程で火葬骨が出土し、その面的なまとまりから墳墓を確認した。

しかし、骨片のまとまって出土した箇所と塚あるいは墓石・台座・礫のまとまって出土した箇所は一致しないことが多かった。また、墓標を立てるための窪みのある台座に比して、対をなすべき基部に突起のある墓標が少ないこと、調査区及び周囲の水路に墓石と思われるが銘もない柱状の石や大小の礫が散乱していることなどから、墓石・台座は移動されているものもかなり多いと考えられた。したがって、明らかに墓と認定したのは塚と火葬骨の分布箇所のみとした。なお、各墓の遺構番号は略号でＳＸ１・ＳＸ２…と表記した。
(図２、写真13～18)

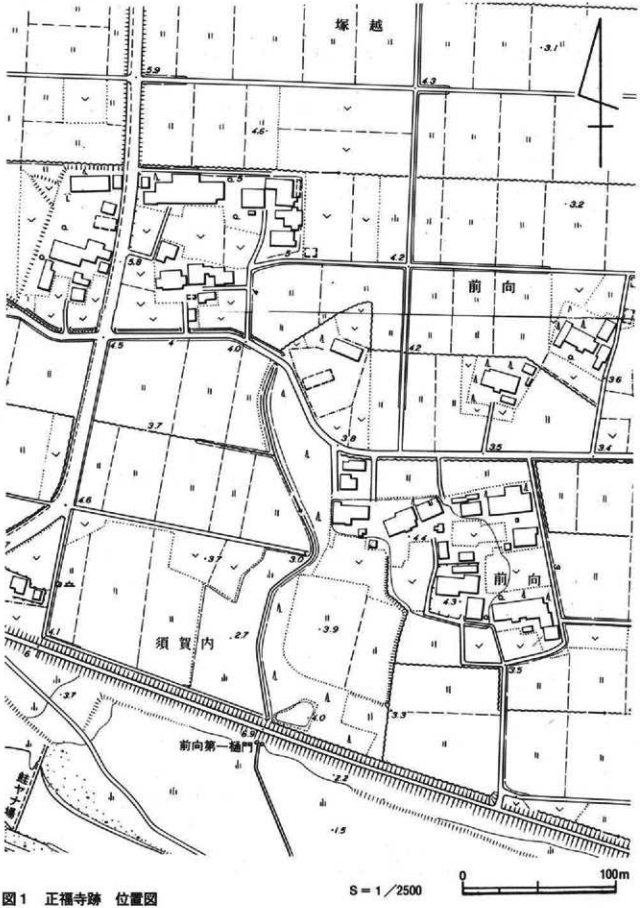
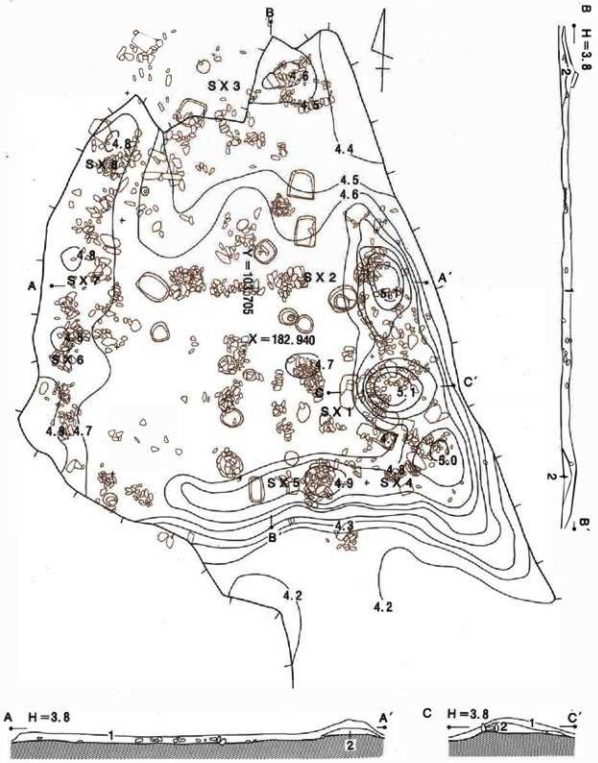


図1　正福寺跡　位置図



I　暗褐色土　竹の地下茎が密生している。表土層。
1　暗褐色土　しまり弱い。
2　暗黄褐色土

S＝1／150　0　5m

図2　正福寺跡　地形図・遺構配置図

第4章 調査成果

礫を積み重ねたり、塚の表面を礫で被った遺構のほか、それらを取り除くと、火葬骨と焼けた古銭を伴う浅い掘込みを多数検出した。しかし、この掘込みは焼けておらず、灰もないことから、火葬は別の場所で行われ、火葬骨と焼けた銭などがこの墓地に埋葬されたものと考えられる。焼けた古銭のなかには溶着して剥がれず銭種不明のものもあるが、各遺構出土の古銭の計測値は表1、拓本は図13～14、写真は写真54～57に、骨片は付章表1、付章図1～2にまとめて掲載した。

SX1

遺構（図6、写真7～8・19～21）

東側土墨中央に位置し、東西3m・南北2.5m・高さ0.5mを測るほぼ円形の塚。調査前から墓石が1基地表に露出していたが、表土除去の結果、塚の上面は長さ20～30cmを中心とする大小の礫で覆われていた。

遺物

台座（図7－1、写真20）

縦36cm・横57cm・厚さ10cm。摂理面を利用しながら打ち欠いてL字形に作り出している。石質は花崗岩。

火葬骨

SX2

遺構（図6、写真9・22）

東側土墨北端に位置し、東西2.2m・南北3.6m・高さ0.5mを測る楕円形の塚。塚の上面は長さ20～30cmを中心とする大小の礫で覆われていた。

SX3

遺構（図4、写真10・23～24）

調査区北端に位置する。西側の一部は削平されており、残存部分で東西2.6m・南北2.7m・高さ0.3mの塚。調査前から墓石が2基地表に露出していたが、表土除去の結果、塚の上面に直径30～40cmを中心とする大小の礫が8の字状の環状に並べられていた。塚状の地形から1基としたが、礫の配置から2基の可能性もある。

遺物

墓石（図7－2、写真23・58）

高さ56cm・幅27cm・厚さ12cm。きれいに整形した舟形。石質は礫岩。

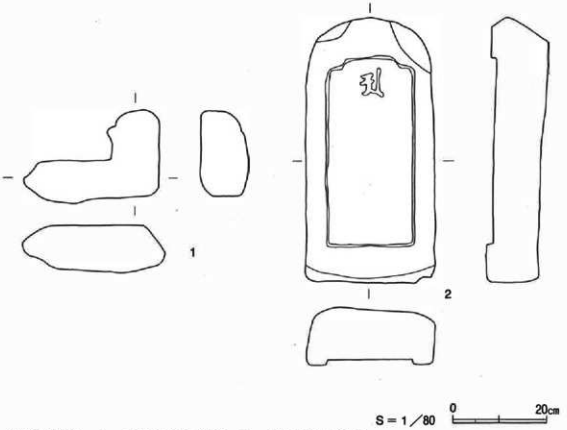


図3　遺物実測図　1．ＳＸ１出土台座　2．ＳＸ３出土墓石

墓誌は中央に「𑖀𑖽（ア、胎蔵界大日如来）」。その下に何文字かあるが、礫岩の表面が粗いうえに摩滅しているため判読できなかった。

火葬骨

ＳＸ４

遺構（図６、写真11・25）

東側土墨と南側土墨が接して折れ曲がる頂点に位置し、東西２ｍ・南北2.3m・高さ0.3mを測るほぼ円形の塚。塚の上面は長さ20～30㎝の礫群と直径８㎝前後の円礫群で覆われていた。

遺物

墓石１（図８－１、写真26・58）

高さ107㎝・幅49㎝・厚さ35㎝。自然石の形を利用した舟型。石質は安山岩。

墓誌は中央に「𑖀𑖽（ア、胎蔵界大日如来）　光明真言十五万遍　位」。右に「天明四申辰年(1784)楽(雫)道風信士　四月十一日」。左に「文化四卯年（1807）濃法妙圓信女四月廿五日」。

墓石２（図９－１、写真27・59）

高さ18.4㎝・幅11.8㎝・厚さ3.1㎝。ほぼ三角形で自然形状のままの小さな墓石。

墓誌は表裏に墨書されているがかなり薄くなっている。表面は、中央に「□𑖀𑖽𑖼𑖽𑖀

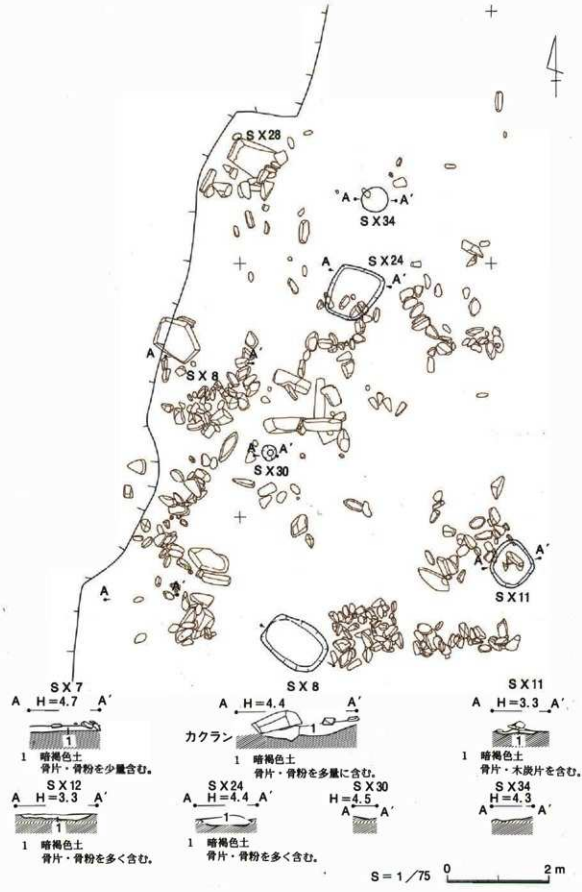


図4　遺構配置図・セクション図(1)

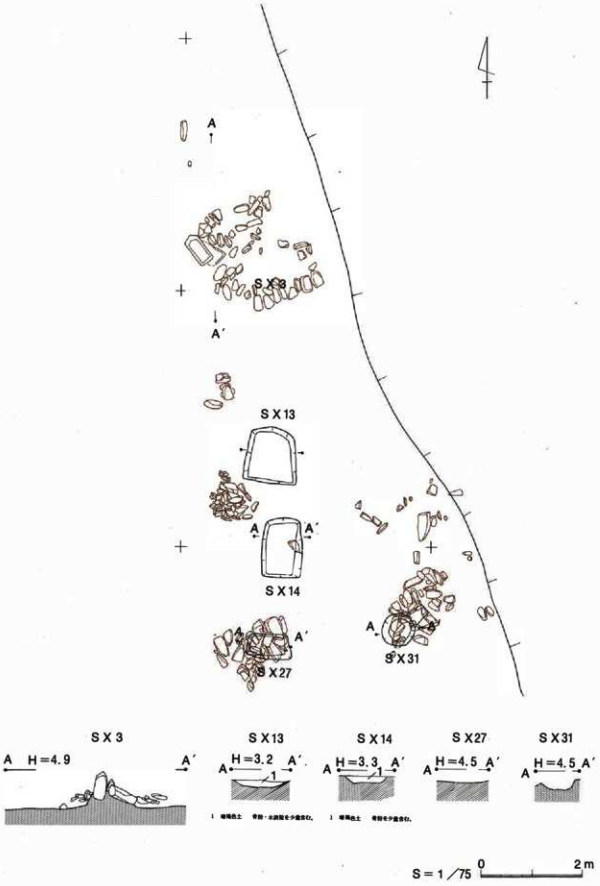


図5 遺構配置図・セクション図(2)

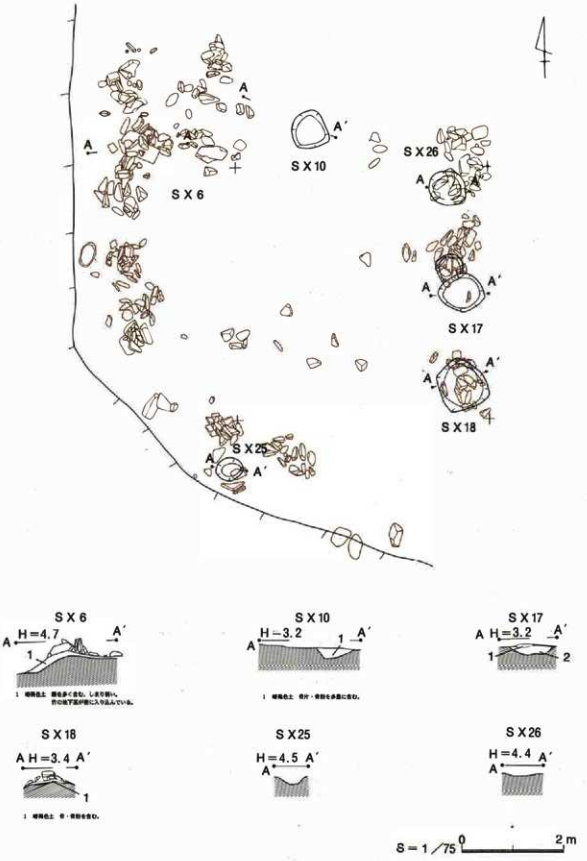


図6　遺構配置図・セクション図(3)

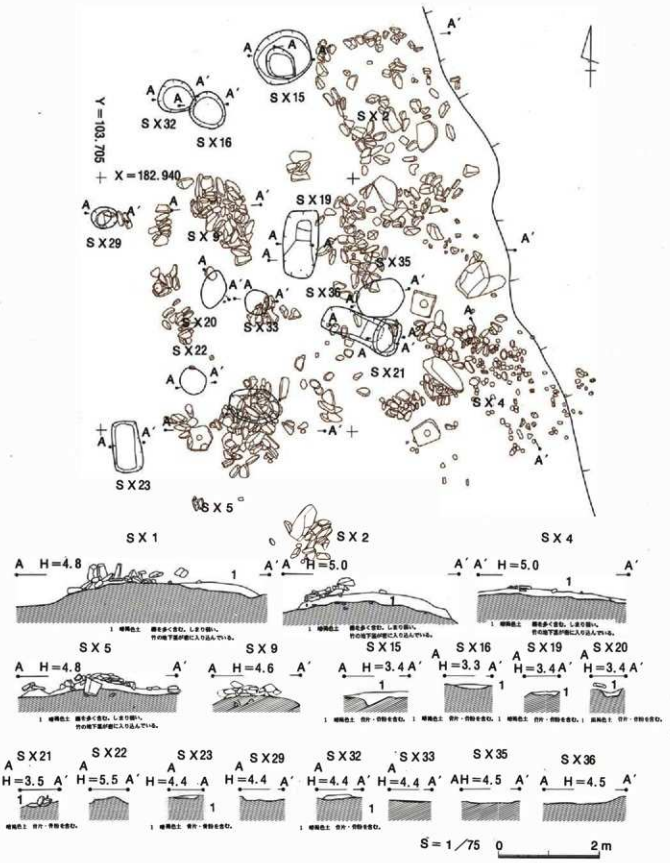


図7 遺構配置図・セクション図(4)

（キャカラバア、五輪塔四方の梵字の一）□」・右に「宝歴九巳卯年）（1759）□□」・左に「□□」。裏面は「ぎ（バン、金剛界大日如来）□□」。

台座1（図9－2、写真28）

縦43cm・横51cm・厚さ12cmの直方体。上面に上縁径15cm・下縁径11cm・深さ3cmの窪みを掘り、石塔の基部をはめ込むようになっている。底面には明瞭なノミ痕がある。石質は砂岩。付近にはこの台座と対になる石塔はなかった。

台座2（図9－3、写真29）

縦44cm・横44cm・厚さ12cmの直方体。上面に上縁径14cm・下縁径11cm・深さ3cmの窪みを掘り、石塔の基部をはめ込むようになっている。付近にはこの台座と対になる石塔はなかった。

古銭

寛永通宝4枚（うち文銭3枚）・不明2枚。

火葬骨

ＳＸ５

遺構（図6、写真11・30～32）

南側土墨の中央に位置し、東西1.6m・南北1.2m・高さ0.3mのほぼ円形の塚。塚の上面は長さ20～30cmの礫で覆われていた。

遺物

古銭

元宝通宝1枚・洪武通宝1枚・寛永通宝7枚・不明5枚。

カワラケ、磁器仏供具

台座（図10－1、写真32）

縦43cm・横51cm・厚さ20cmの直方体。上面に上縁径12cm・下縁径9cm・深さ3cmの窪みを掘り、墓石の基部をはめ込むようになっている。石質は砂岩。付近にはこの台座と対になる石塔はなかった。

火葬骨

ＳＸ６

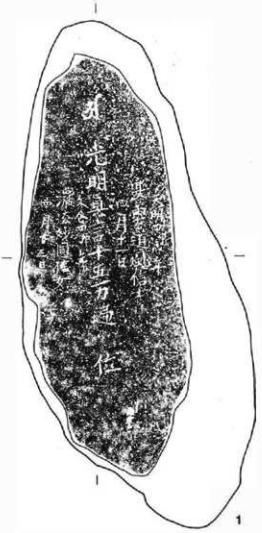
遺構（図5、写真12・33～34）

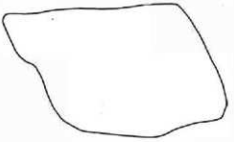
西側土墨の中央やや南に位置し、東西0.8m・南北1m・高さ0.1mのほぼ円形の塚。塚の上面は長さ20～40cmの礫で覆われていた。

遺物

地蔵1（図10－2、写真59）

胴部上半が欠損している。残存高14.6cm・幅14.9cm・厚さ11.9cm。石質は花崗岩。





S＝1／8　0　20cm

図8　遺物実測図　1．ＳＸ４出土墓石

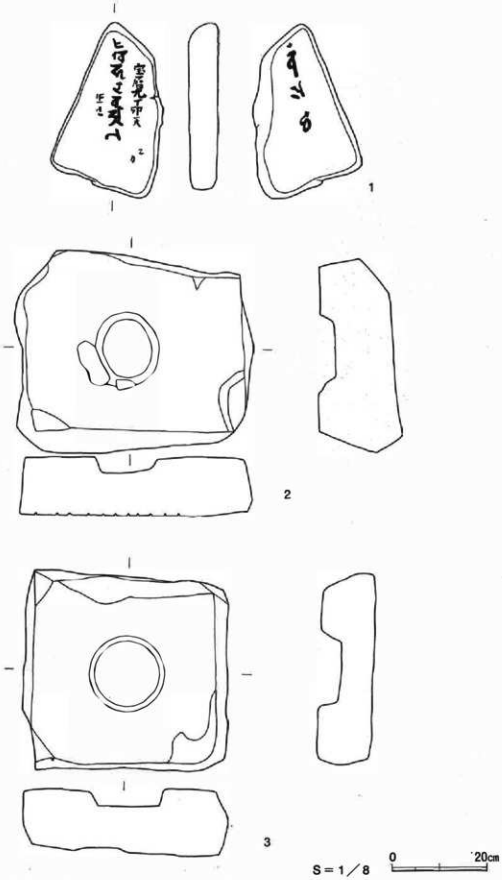


図9　遺物実測図　1. ＳＸ4出土墓石　2･3. ＳＸ4出土土台座

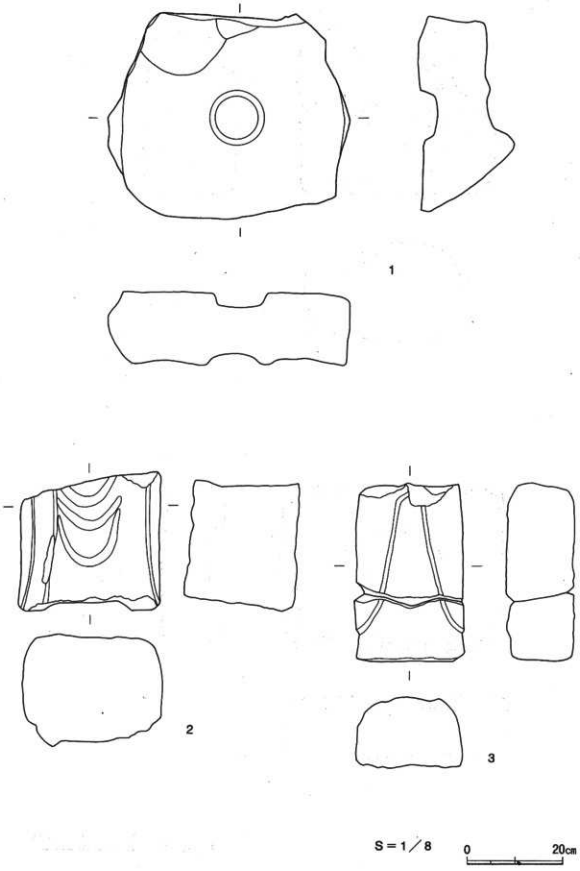


図10 遺物実測図 1. ＳＸ5出土台座 2･3. ＳＸ6出土地蔵

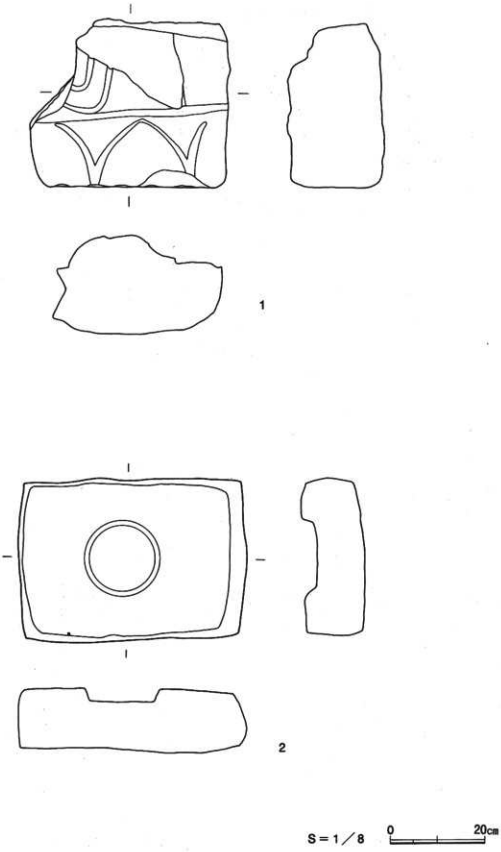


図11　遺物実測図　1. ＳＸ6出土地蔵　2. ＳＸ30出土台座

地蔵2（図10－3、写真59）

胴部上半が欠損している。残存高18.7cm・幅11.5cm・厚さ7cm。石質は花崗岩。

地蔵3（図11－1、写真59）

胴部上半が欠損している。残存高17.3cm・幅20.9cm・厚さ10.4cm。石質は花崗岩。

ＳＸ7

遺構（図3、写真12・35）

西側土墓の中央やや北に位置し、東西0.8m・南北1m・高さ0.1mのほぼ円形の塚。塚の上面は長さ20～40cmの礫で覆われていた。

遺物

磁器碗

火葬骨

ＳＸ8

遺構（図3、写真12・36～38）

西側土墓の北端に位置し、東西0.4m・南北0.9m・高さ0.4mの楕円形の塚。塚の上面は長さ20～40cmの礫で覆われていた。

遺物

古銭

寛永通宝5枚（うち文銭1枚）・不明3枚。

火葬骨

ＳＸ9

遺構（図6、写真39～40）

東側土墓内側の平坦面に位置し、東西1.3m・南北1m・高さ0.1mの楕円形の塚。塚の上面は長さ20～40cmの礫で覆われていた。

遺物

火葬骨

ＳＸ10

遺構（図5、写真41・42）

東西0.7m・南北0.8m・深さ0.2mの、ほぼ円形の浅い掘り込み。

遺物

火葬骨

ＳＸ11

遺構（図３、写真41）

東西0.9m・南北１ｍ・深さ0.05mの、隅丸菱形の浅い掘り込みの上に直径15cm前後の礫を積み重ねている。

遺物

火葬骨

ＳＸ12

遺構（図３、写真41）

東西1.3m・南北0.9m・深さ0.1mの、楕円形の浅い掘り込み。

遺物

古銭

寛永通宝１枚。

火葬骨

ＳＸ13

遺構（図４、写真41）

東西１ｍ・南北1.1m・深さ0.15mの、方形の浅い掘り込み。

遺物

骨粉・木炭粒

ＳＸ14

遺構（図４、写真41）

東西0.8m・南北1.2m・深さ0.1mの、長方形の浅い掘り込み。

遺物

骨粉

ＳＸ15

遺構（図６、写真41）

東西1.2m・南北1.1m・深さ0.25mの、ほぼ円形の２段の掘り込み。

遺物

古銭

咸平元宝１枚。

火葬骨

ＳＸ16

遺構（図６、写真41）

東西0.7m・南北0.7m・深さ0.08mの、円形の浅い掘り込み。

遺物

古銭

聖宋元宝１枚・寛永通宝３枚（うち文銭１枚）。

火葬骨

ＳＸ17

遺構（図５、写真41）

東西0.9m・南北0.75m・深さ0.2mの、ほぼ円形の浅い掘り込みと東西0.5m・南北0.6m・深さ0.09mの、ほぼ円形の浅い掘り込みが連続している。

遺物

古銭

寛永通宝７枚（うち文銭４枚）。

火葬骨

ＳＸ18

遺構（図５、写真41）

東西１m・南北1.1m・深さ0.05mの、やや角張った円形の浅い掘り込みの上に直径15～20㎝の礫を積み重ねている。

遺物

火葬骨

ＳＸ19

遺構（図６、写真41・43）

東西0.7m・南北1.3m・深さ0.07mの、長方形の浅い掘り込み。

遺物

古銭

不明１枚。

火葬骨

ＳＸ20

遺構（図６、写真41）

東西0.5m・南北0.75m・深さ0.1mの、楕円形の浅い掘り込みの上に礫を置いている。

遺物

火葬骨

ＳＸ21

遺構（図６、写真41）

東西0.46m・南北0.7m・深さ0.1mの、楕円形の浅い掘り込みの上に礫を置いている。

遺物

火葬骨

ＳＸ22

遺構（図６、写真41）

東西0.4m・南北0.4mの範囲に骨片・骨粉が少量分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

火葬骨

ＳＸ23

遺構（図６、写真41）

東西0.55m・南北１m・深さ0.05mの、長方形の浅い掘り込み。

遺物

火葬骨

ＳＸ24

遺構（図３、写真41）

東西0.95m・南北1.1m・深さ0.15mの、長方形の浅い掘り込み。

遺物

火葬骨

ＳＸ25

遺構（図５、写真41）

東西0.55m・南北0.45m・深さ0.15mの、楕円形の浅い掘り込み。

遺物

火葬骨

ＳＸ26

遺構（図５、写真41・44）

東西0.6m・南北0.55mの範囲に骨片が分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

火葬骨

ＳＸ27

遺構（図４、写真41）

東西0.9m・南北0.5mの範囲に骨粉が分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

骨粉

ＳＸ28

遺構（図３、写真41）

東西0.8m・南北0.6mの範囲に骨片が分布している。撹乱を受けているため、正確な規模は確認できなかった。

遺物

火葬骨

ＳＸ29

遺構（図６、写真41）

東西0.5m・南北0.42m・深さ約0.07mのほぼ円形の浅い掘り込み。

遺物

古銭

丰寧元宝１枚・寛永通宝６枚（うち文銭３枚）。

ＳＸ30

遺構（図３、写真45）

東西0.3m・南北0.28mの範囲に骨片が分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

石塔（図12－１、写真45～47）

上端から基部の下縁まで高さ98cm・幅27cm・厚さ19cmの、上部を丸くした角柱。基部は上縁で直径15cm・下縁で直径12cm・高さ2.2cmを測り、はめ込み式になっている。石質は砂岩。碑文はない。

台座（図11－2、写真45~47）

縦34.8cm・横48cm・厚さ13.5cmの直方体。上面に上縁径16cm・下縁径14cm・深さ4cmの窪みを掘り、石塔の基部をはめ込むようになっている。石質は砂岩。上記の石塔基部と接して出土しており、対になる。

陶器片口

火葬骨

SX31

遺構（図4、写真49）

東西0.6m・南北0.6m・深さ0.2mの円形の浅い掘り込み。

遺物

骨粉

SX32

遺構（図6、写真41）

東西0.7m・南北0.6m・深さ0.1mの、ほぼ円形の浅い掘り込みで、底部は2段に掘り込まれている。

遺物

火葬骨

SX33

遺構（図6、写真41）

東西0.45m・南北0.48mの範囲に骨片が分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

古銭：寛永通宝1枚（うち文銭1枚）・不明6枚。

火葬骨

SX34

遺構（図3、写真41）

東西0.5m・南北0.5mの範囲に骨片が分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

火葬骨

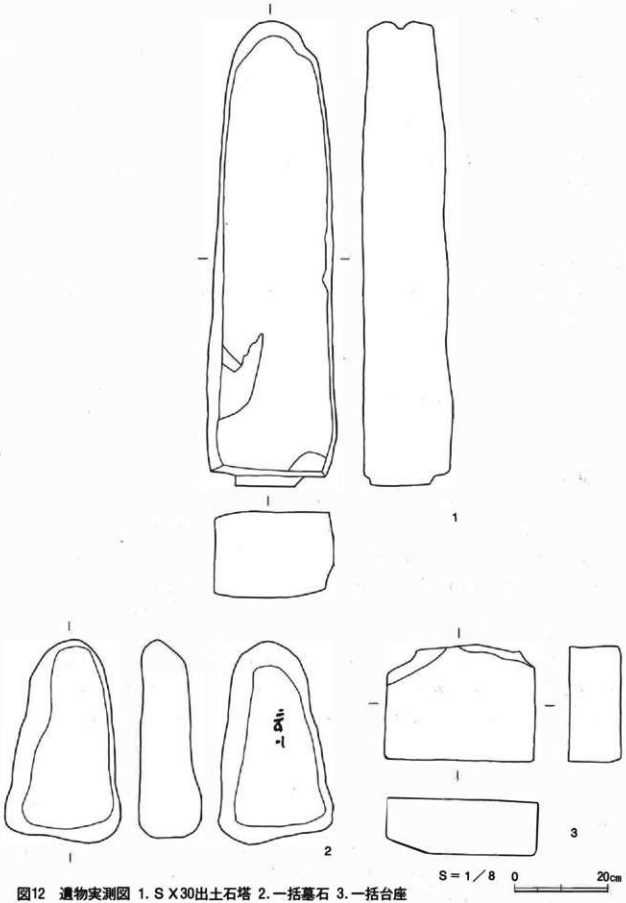


図12 遺物実測図 1. ＳＸ30出土石塔 2. 一括墓石 3. 一括台座

ＳＸ35

遺構（図６、写真41・50）

東西0.94m・南北0.74mの範囲に骨片が分布している。掘り込みは確認できなかった。

遺物

古銭

紹興元宝１枚・寛永通宝５枚。

火葬骨

ＳＸ36

遺構（図６）

ＳＸ21の底面から0.15m下で検出した。ＳＸ21より古い。東西1.46m・南北0.5mの範囲に骨片が分布している。

遺物

古銭

紹聖元宝１枚・天禧通宝１枚・寛永通宝７枚。

火葬骨

一括遺物

墓石（図11－２、写真59）

ＳＸ４で墨書のある平坦な礫を利用した墓石が出土したため、遺跡から出土した全ての礫を再点検して発見した。高さ21.5cm・幅12cm・厚さ6.5cm。自然石の形を利用した三角形。

墓誌は中央に墨書で「ぎ（バン、金剛界大日如来）□」の２文字は確認できるが、薄く判読しにくい。

台座（図12－３、写真59）

ＳＸ25付近から出土した。縦24.2cm・横31.6cm・厚さ11cmの直方体。石質は礫岩。ＳＸ３の礫岩製墓石から南に約15m離れているが、この遺跡では礫岩製石造物はこの２基のみで、大きさもつりあうことから対になると考えられ、墓石か台座のどちらかが移動していると想定される。

火葬骨

まとめ

記年銘の確認できた墓石はＳＸ４の宝暦９年（1759）、ＳＸ１の天明４年（1784）と文化４年(1807）である。渡来銭では咸平元宝（998年初鋳）から紹興元宝（1131初鋳）まであるが、幕府の公銭貨である寛永通宝が流通市場に普及するまでは、中世以来近世初期まで渡来銭が流

通していたため、年代決定の根拠とするには問題がある。ＳＸ29のように渡来銭と新寛永が供伴する遺構もあるように、寛文10年（1670）には寛永通宝以外の古銭と新銭（寛永通宝）の混用を禁止し、古銭を流通社会から締め出したはずだが、実際は市場に流通あるいは伝世し副葬品として実際に使用されていた。幕府は銭貨統一の第１段階として「古寛永」を鋳造し、第２段階として寛文８年（1668）に「新寛永」の量産体制に入り本格的な銭貨統一を可能にした。寛永通宝には寛文８年（1668初鋳）背面に「文」のある、いわゆる文銭が加わるが、以後、「文」のない新寛永も鋳造された。正福寺跡出土の寛永通宝には明らかな新寛永である文銭を出土する墓と文銭以外の寛永銭が出土する墓がある。寛永通宝には古寛永・新寛永ともに産地（銭座）ごとに多くの種類があり、字体等を詳細に検討して分類できれば産地あるいは流通範囲について言及可能であろうが、今後の検討課題としたい。

この墓地からは28基の火葬墓を検出した。江戸時代には一般的に浄土真宗以外は土葬であった。相馬中村藩領内では天明・天保の飢饉で農村が疲弊したため、移民政策をおこない文化７年（1810）頃から明治２年（1869）まで主に北陸地方の浄土真宗関係農民約1,800戸の移住を受け入れているが、正福寺は真言宗であり、出土した墓石の記年銘は宝暦９年（1759）、天明４年（1784）、文化４年（1807）で、移民以前のものである。この墓地は多くの餓死者がでた天明の飢饉前後の厳しい状況にあった泉村の人々が葬られた墓地であったことは明らかだが、伝染病予防のために火葬に付された可能性も考えられる。付章のとおり人骨の鑑定をおこなったが、著しい病変でなければ餓死・伝染病かどうかまでは解明できなかった。

表1 銭貨計測表

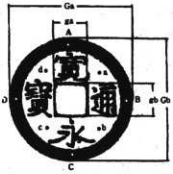
＊銭貨の各測点については、以下のとおりである。

$$外縁外経 G = \frac{Ga + Gb}{2}$$

$$内郭外長 g = \frac{ga + gb}{2}$$

$$外縁厚 T = \frac{A + B + C + D}{4}$$

$$文字面厚 t = \frac{a + b + c + d}{4}$$



＊＊数字に（ ）を付したものは、規定の測点を得られなかったもので、数式の分母が規定より少なかったものである。

＊＊＊表中の「－」は、遺存状況が悪かったために、測定不能の場合を示す。

番号	遺 構	銭 貨 名	初鋳年	G	g	T	t	重量	備考
1	SX4	寛永通宝		24.2	5.1	1.23	0.93	3.7	
2	SX4	寛永通宝・文銭	1668年	25	5.25	1.3	0.5	3.2	
3	SX4	寛永通宝・文銭	1668年	25.1	5.65	1.22	0.65	3.5	
4	SX4	寛永通宝・文銭	1668年	25.5	5.5	1.4	0.95	4	
5	SX4	不明		－	－	－	－	－	破片
6	SX4	不明		－	－	－	－	－	破片
7	SX5	元豊通宝(宋)	1078年	25.4	6.4	1.58	1.73	3.6	
8	SX5	洪武通宝(明)	1368年	22.75	5	1.3	1.1	3.5	
9	SX5	寛永通宝		25	5.6	1.55	－	－	3枚付着
10	SX5	不明		－	－	－	－	－	〃
11	SX5	不明		－	－	－	－	－	〃
12	SX5	不明		24.6	6.65	1.05	1.43	3.2	
13	SX5	不明		－	－	－	－	－	破片
14	SX5	寛永通宝		23.4	5.15	1.13	1.05	3	
15	SX5	寛永通宝		25	5.4	1.53	1.25	3.9	
16	SX5	寛永通宝		25.05	5.35	1.18	0.83	3.5	
17	SX5	寛永通宝		24.85	5.15	1.13	0.7	3.5	
18	SX5	寛永通宝		24.25	5.5	1.4	0.88	4.1	
19	SX5	寛永通宝		23.65	5.05	1.15	1.1	3.4	
20	SX5	不明		－	－	－	－	－	破片
21	SX8	寛永通宝		25	5.85	1.15	1.13	2.6	
22	SX8	寛永通宝		24.95	5.25	1.15	0.93	2.7	
23	SX8	寛永通宝		24.65	5.65	1.03	0.63	2.7	
24	SX8	寛永通宝		24.05	5.25	1.23	1.05	3.9	
25	SX8	寛永通宝・文銭	1668年	25.2	6.05	1.25	1.1	2.4	
26	SX8	不明		－	－	－	－	－	3枚付着
27	SX8	不明		－	－	－	－	－	〃
28	SX8	不明		－	－	－	－	－	〃

番号	番 号	銭 貨 名	初鋳年	G	g	T	t	重量	備考
29	SX12	寛永通宝		24.15	5.55	1.73	1.55	4.4	
30	SX15	咸平元宝(宋)	998年	24.75	5.5	1.58	0.58	2.7	
31	SX16	聖宋元宝(宋)	1101年	23.7	6.3	1.75	1.3	3.1	
32	SX16	寛永通宝・文銭	1668年	25	5.45	1.33	1.25	3.6	
33	SX16	寛永通宝		23.95	5.1	1.1	1.27	3.1	
34	SX16	寛永通宝		24.05	5.25	1.1	0.7	2.9	
35	SX17	寛永通宝		24.2	5.4	1.3	1.05	3.8	
36	SX17	寛永通宝		23.15	5.05	1.38	1.15	3	
37	SX17	寛永通宝・文銭	1668年	25.6	6.05	1.08	0.6	2.8	
38	SX17	寛永通宝・文銭	1668年	25.2	5.85	1.28	1.05	3.6	
39	SX17	寛永通宝・文銭	1668年	25.7	5.55	1.55	1.35	3.8	
40	SX17	寛永通宝・文銭	1668年	26.5	5.5	1.13	1	—	破片
41	SX17	寛永通宝		—	—	—	—	—	破片
42	SX19	不明		—	—	—	—	—	破片
43	SX29	熙寧元宝(宋)	1068年	23.25	6.1	1.13	0.9	2.6	
44	SX29	寛永通宝		24.05	5.95	1.15	0.83	3.6	
45	SX29	寛永通宝		24.75	5.95	1.05	0.75	2.8	
46	SX29	寛永通宝		23.95	5.95	1.05	0.68	2.6	
47	SX29	寛永通宝・文銭	1668年	25	5.7	1.25	0.6	3.5	
48	SX29	寛永通宝・文銭	1668年	25.1	5.5	1.28	0.78	3.4	
49	SX29	寛永通宝・文銭	1668年	25	5.65	1.18	0.78	3.7	
50	SX33	寛永通宝・文銭	1668年	25.5	5.9	1.1	0.73	2.8	
51	SX33	不明		—	—	—	—	—	3枚付着
52	SX33	不明		—	—	—	—	—	〃
53	SX33	不明		—	—	—	—	—	〃
54	SX33	不明		—	—	—	—	—	3枚付着
55	SX33	不明		—	—	—	—	—	〃
56	SX33	不明		—	—	—	—	—	〃
57	SX35	紹興元宝(南宋)	1131年	23.5	6.9	1.23	1.15	2.1	
58	SX35	寛永通宝		23.7	5.05	1.1	0.95	3.5	
59	SX35	寛永通宝		24.05	5.65	1.6	1.4	3.7	
60	SX35	寛永通宝		24.55	5.1	1.18	0.9	3.1	
61	SX35	寛永通宝		24.9	5.05	1.45	0.45	3.5	
62	SX35	寛永通宝		24.3	5.1	1.18	0.35	—	一部欠
63	SX36	紹聖元宝(宋)	1094年	24.1	6.3	1.05	1	2.3	
64	SX36	天禧通宝(宋)	1017年	23.15	6.85	1.08	1.5	2	
65	SX36	寛永通宝		24.95	5.35	1.13	0.98	3.3	
66	SX36	寛永通宝		23.75	5.75	2	0.5	2.7	
67	SX36	寛永通宝		24.95	4.8	1.8	0.43	3	
68	SX36	寛永通宝		24.35	5.1	1	0.93	2.1	
69	SX36	寛永通宝		24.85	5.55	1.23	0.98	3.7	
70	SX36	寛永通宝		24.95	5.45	1.18	1.05	3.8	
71	SX36	寛永通宝		23.95	5.2	1.18	0.9	3	
計			71枚						
	内 訳								
		宋 銭	6枚						
		南宋銭	1枚						
		明 銭	1枚						
		寛永銭	46枚						
		不 明	17枚						

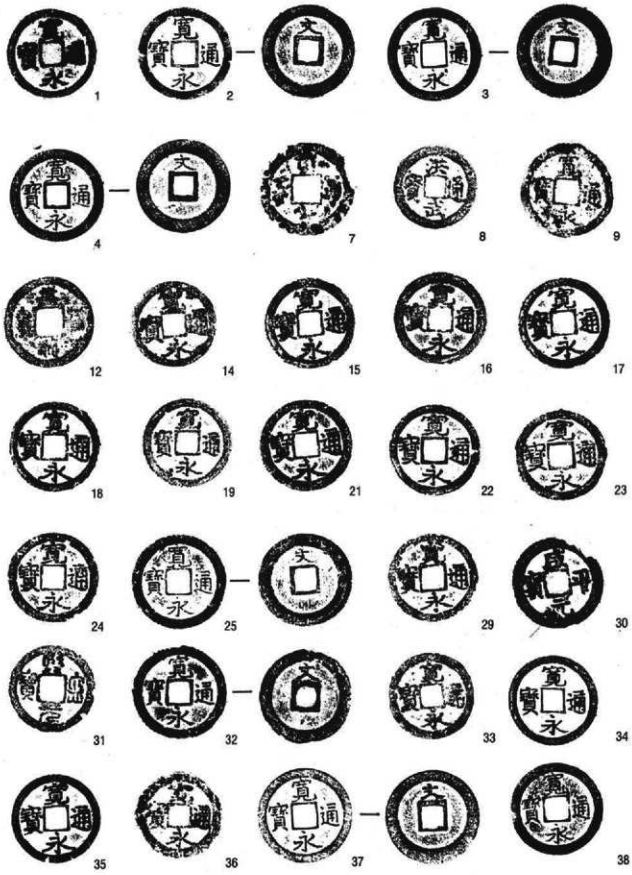
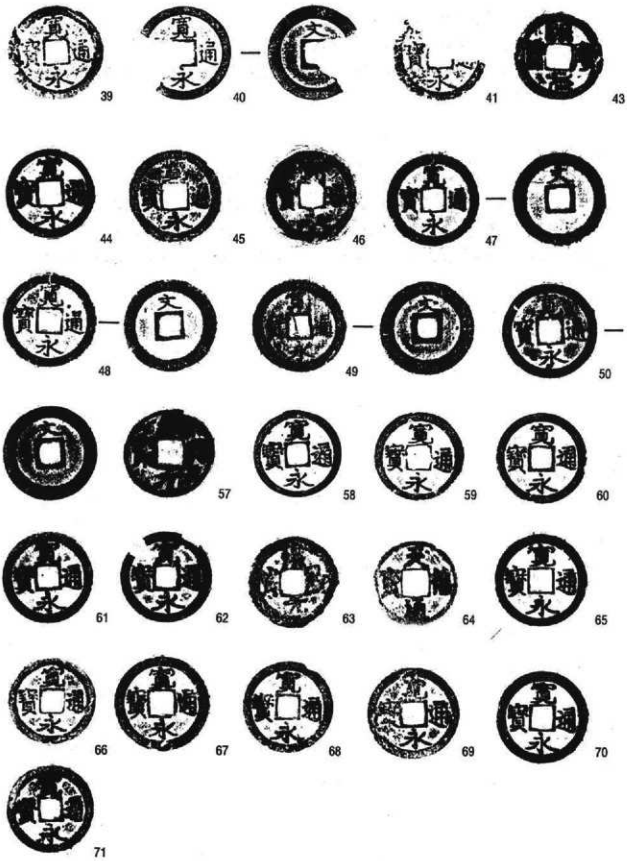


図13 古銭拓本(1)

0 3cm



0 3cm

図14 古銭拓本(2)

註1　『奥相志』斎藤完高　安政4年（1857）～明治4年（1871）
「相馬市史」資料編1　昭和44年（1969）所収

註2　『原町市の文化財　指定外文化財』　原町市文化財専門委員会　平成6年（1994）
原町市教育委員会

参考文献

『近藤正齋全集』第3巻　近藤正齋　明治39年（1906）　國書刊行會
『図録　日本の貨幣』1　日本銀行調査局　昭和47年（1972）　東洋経済新報社
『図録　日本の貨幣』2　日本銀行調査局　昭和48年（1973）　東洋経済新報社
『船橋市八木ヶ谷塚群(遠山塚群)』　今泉　潔　昭和59年（1984）　千葉県文化財センター

付章１　福島県原町市正福寺跡出土人骨について

東北大学医学部解剖学第１講座
埴原　恒彦・佐宗亜衣子・奈良　貴史・百々　幸雄

正福寺跡は近世江戸時代の遺跡であり、出土人骨はいずれも灰白色を呈しており、焼骨であることは明らかである。また、全てが小さな破片となっており、変形、亀裂が著しい。以下、個体ごとに記載する。また、各個体ごとの骨の重さは一括して表１に示した。

ＳＸ１

左上腕骨三角筋粗面を含む部分と推定される骨片、右尺骨骨幹近位部、その他長管骨と推定される破片骨数点が残存するが詳細は不明。

年齢　残存骨の大きさ、厚さから成人と推測される。

性別　不明。

ＳＸ３

脳頭蓋の破片骨１点のみである。部位は後頭骨人字縁と推定される。

年齢　残存縫合は外板、内板ともに閉鎖している所見はみられないことから青年もしくは壮年と考えられるが、詳細は不明である。

性別　不明。

ＳＸ４

頭蓋と思われる小さな破片骨数点が残存するが、部位は不明である。

長管骨と思われる骨片も数点残存するが、詳細は不明である。

年齢　詳細は不明であるが、残存骨の大きさから少なくとも乳幼児・小児ではないと考えられる。

性別　不明。

ＳＸ５　（図１に残存四肢骨の一部を示す）

脳頭蓋では後頭骨左側の人字縁を含む部分が確認できる。また、左側頭骨の一部も認められるが、その他の破片骨については詳細は不明である。顔面頭蓋では左上顎骨の口蓋突起の一部が認められ、犬歯から第２大臼歯の歯槽、梨状口の一部が残存する。右上顎骨の断片も残存する。また、左頬骨の前頭突起部が残存する。歯は、犬歯と小臼歯と思われる歯根が残存するが、詳細は不明である。

胴骨では椎骨の破片が数点認められるが詳細は不明である。

四肢骨では、左肩甲骨の肩甲棘基部から関節窩を一部含む断片、左上腕骨遠位部、左右は不明であるが、橈骨頭の一部、寛骨の大坐骨切痕の一部（おそらく右）、左大腿骨頭から大腿骨頭の部分、右腓骨遠位端、右腫骨の腫骨隆起部が確認される。その他多数の長管骨の破片が残存するが詳細は不明である。 なお、 この個体には数点の黒く炭化した小骨片が認められる。

年齢　残存する頭蓋縫合では、外板には閉鎖が認められないが、内板はほとんど閉鎖していること、上顎臼歯の歯槽に歯の脱落によると考えられる骨変化が認められることから、壮年から熟年と推定される。

性別　残存後頭骨の上項線の発達程度、頭蓋の厚さから女性の可能性が考えられる。

ＳＸ８　（図２に残存頭蓋の一部を示す）

脳頭蓋では後頭骨の外後頭隆起を含む一部が３点残存し、また、右後頭顆の断片も３点残存する。さらに少なくとも数点の後頭骨と思われる破片骨が残存する。側頭骨では頬骨突起基部から下顎窩を含む部分が左側２点、右側１点確認される。頬骨突起基部のみの断片も左右それぞれ１点ずつ残存する。また、右の頭頂切痕から乳突上稜を含む断片１点、左右錐体の断片も残存し、右３点、左４点が確認される。外耳道を含む断片は右１点、左２点が残存する。さらに、乳突部の断片が少なくとも左右２点ずつ確認される。頭頂骨と推定される骨片もかなり残存するが、左前頭角、矢状縁、前頭縁の一部を含む部分、鱗縁部を含む部分が確認される。また、左右の卵円孔を含む蝶形骨の破片が残存する。前頭骨では、左側眼窩上縁、頬骨突起を含む部分が２点確認され、さらに、眉間から鼻骨縁、鼻棘を含む断片が４点残存する。顔面頭蓋では、右上顎骨の第２小臼歯から第３大臼歯までの歯槽突起部、左上顎骨の前歯部から小臼歯部に至る歯槽突起と左梨状口を含む部分、及び前頭突起の基部あたりが２点確認される。また、頬骨の断片が右１点、左２点残存する。下顎骨では右下顎枝基部を含む断片が３点認められる。左では筋突起を含む断片が３点認められる。さらにおとがい隆起部を含む下顎体前部は４個体分確認される。以上の所見から、この残存骨は少なくとも４個体分を含んでいると考えられる。

胴骨では椎骨が数個含まれているが、詳細は不明である。ただ、軸椎（第２頸椎）の歯突起のみ確認できる。また、数点の肋骨の破片も含まれているが、詳細は不明である。

四肢骨では左右肩甲棘基部、上腕骨頭の一部と推定される断片、腓骨の断片（左右不明）が確認できるが、他の長管骨の骨片については詳細は不明である。また、中手骨、基節骨、中節骨の一部が残存するが、詳細は不明である。

年齢　残存頭蓋縫合の癒合程度は内板のみ閉鎖している断片が残存するが、同時に内板、外板ともに閉鎖していない個体も認められる。上下顎骨では歯槽が閉鎖している個体は下顎骨１個体（大臼歯部）に認められる。これらのことから、壮年から熟年の個体が

含まれていると推定される。

性別　後頭骨外後頭隆起の発達程度からこれが認められる個体については男性と推定される。また、眉間の残存個体についてはその発達程度から1個体は男性と推定される。下顎に関しては、少なくとも1個体はおとがい結節が発達しており男性と考えられ、また他の1個体はおとがい結節は不明瞭であり女性的と考えられるが、他の個体については不明である。

SX9

長管骨と推定される小さな骨片が数点残存するのみであり、詳細は不明である。

年齢　長管骨と推定される骨の厚さから成人と考えられる。

性別　不明。

SX10　(図1に残存四肢骨の一部を示す)

頭蓋では後頭骨の上項線の部分と考えられる破片骨、左側頭骨の乳突上稜を含む部分と推定される破片骨が認められ、また、小さな破片骨が数十点残存するが、いずれも詳細は不明である。

右上腕骨遠位部、左手根骨の三角骨及び豆状骨、数本の指骨、右寛骨の坐骨体の一部、左右大腿骨骨幹部、右膝蓋骨の膝蓋骨底、左右距骨の距骨滑車の一部が認められる。その他、部位は不明であるが、多数の長管骨破片が残存する。

年齢　残存頭蓋の断片の大きさ、厚さから成人と推定される。

性別　残存する上項線、乳突上稜の発達程度からは女性と推測される。

SX11

数十点の頭蓋の破片が残存するが、外後頭隆起を含む後頭骨の一部、左頭頂骨の断片、前頭骨の左頬骨突起の一部、右側頭骨錐体の一部のみ確認できる。また、部位は不明であるが、歯根が1本のみ残存する。

胴骨に関しては腰椎と思われる椎体が1片認められる。四肢骨については左右距骨の距骨滑車上面の一部が認められ、さらに多数の破片骨が残存するが詳細は不明である。また、指骨が2片確認される。

年齢　残存頭蓋縫合の癒合程度から壮年と考えられる。

性別　外後頭隆起はさほど発達せず、この点に関しては女性的である。

SX12

頭蓋では左側頭骨の乳突部後部の断片が認められる。その他十点程度の破片骨が残存する

が、詳細は不明である。

胴骨では数本の肋骨片が残存する。四肢骨については肩甲骨関節窩の一部、左腸骨の耳状面の一部と前関節傍溝が確認され、また、左大腿骨骨幹の一部と推定される骨片が残存する。

年齢　残存骨の大きさ、厚さから成人と推定される。

性別　腸骨の前耳状面溝が明瞭に認められることから、女性と考えられる。

S X15

脳頭蓋では、後頭骨の外後頭隆起、左右項平面の一部、後頭平面、左人字縁の部分が確認でき、頭頂骨鱗縁の一部、左側頭骨錐体の一部も認められる。その他の破片骨については詳細は不明である。また、下顎の左関節突起の一部が残存する。歯については明らかに歯根と考えられるものが1点残存する。

長管骨では、上腕骨骨幹部、脛骨骨幹部と思われる断片が認められるが、その他の断片骨については詳細は不明である。

年齢　残存する頭蓋縫合の癒合程度から、壮年と考えられる。

性別　残存する後頭骨の外後頭隆起の発達程度から男性と推定される。

S X16

脳頭蓋では前頭骨の眉間から前頭鱗にかけての部分、右側頭骨鱗部の一部、左右側頭骨錐体部断片、頭頂骨鱗縁の一部のみ確認される。また、下顎の歯槽と推定される断片、おとがい棘を含む下顎体の一部が残存する。歯では歯根1本と右下顎第1小臼歯の近心部が残存する。

四肢骨では肩甲骨の関節窩と推定される骨片、距骨の距骨滑車上面と思われる骨片（いずれも左右不明）が残存する。その他、四肢骨と思われる骨片数十点が残存するが、いずれも詳細は不明である。

年齢　残存する頭蓋縫合の癒合程度について、外板においては癒合していないが、内板では癒合が進んでおり、壮年から熟年と推定される。

性別　眉間の発達が弱いこと、大部分の残存頭蓋骨が薄いことから女性の可能性が考えられる。

S X17

脳頭蓋では後頭骨の破片数点、頭頂骨の鱗縁の一部、右側頭骨の錐体の一部、左側頭骨の頬骨突起基部の断片、前頭骨の左眼窩上縁の一部が確認される。顔面頭蓋では、左頬骨と右頬骨の前頭突起上部が認められる。また、右頬骨の前頭突起は2点認められ、このことより、2個体の混在が推定される。その他の破片骨については詳細は不明。下顎骨については右筋突起の断片が確認される。また、上顎の小臼歯、および大臼歯の一部と思われる歯が残存するが、エ

ナメル質は認められない。

胴骨では椎骨の椎体数点（部位不明）、肋骨数点が残存する。四肢骨では右肩甲骨の肩甲棘基部、左上腕骨遠位部、右尺骨近位部、大腿骨遠位端の一部と推定される断片（左右不明）、左膝蓋骨の断片、左右距骨の一部が認められる。その他、多数の長管骨と思われる破片骨が残存するが詳細は不明である。

年齢　残存する縫合の癒合程度から壮年と推定される。

性別　不明であるが、下顎筋突起の大きさは比較的大きく男性的。

SX19

脳頭蓋では内後頭隆起の一部と思われる部分を含む後頭骨の破片が残存する。左側頭骨の乳様突起、頭頂切痕から頬骨突起基部に至る部分、錐体の一部、左頭頂骨の乳突角の部分が確認できる。また、左右は不明であるが、頭頂骨鱗縁の一部が認められる。顔面頭蓋では左頬骨の前頭突起部が確認されるのみである。その他の破片骨については詳細は不明である。

四肢骨については、前腕骨と思われる骨片数点、左右不明であるが大腿骨遠位端の膝蓋面から顆間窩のごく一部を含む部分、脛骨の上関節面の断片（左右不明）、左膝蓋骨の一部が確認される。

年齢　残存する縫合の癒合程度から、壮年と推定される。

性別　残存する乳様突起の大きさから女性と推定される。

SX20

頭蓋と思われる小さな破片骨数十点が残存するが詳細は不明である。

四肢骨では上腕骨頭の断片と推定される骨片(左右不明)、左上腕骨遠位部と思われる骨片、大腿骨膝蓋面と思われる骨片、左右距骨の距骨滑車上面の一部が認められる。その他、数十点の長管骨の破片が残存するが詳細は不明である。

年齢　残存骨の大きさ、厚さから成人と推定される。

性別　不明。

SX21

頭蓋と考えられる骨片は2点のみであり、詳細は不明である。

四肢骨では上腕骨骨幹部、橈骨骨幹部と推定される骨片が残存し、また部位不明の長管骨の破片が数点残存する。

年齢　残存骨片の大きさ、厚さから成人と推定される。

性別　不明。

SX22

四肢骨の断片と推定される骨片1点のみ残存するが、詳細は不明である。

年齢　残存骨の厚さから、少なくとも乳幼児・小児ではないと考えられる。

性別　不明。

SX23

頭頂骨の矢状縫合を含む部分が残存するが左右は不明である。その他小さな頭蓋破片があるが、詳細は不明である。また、歯根のごく一部が残存するが、歯種の同定は困難である。

胴骨では、頚椎の左上関節面と思われる破片骨が残存する。四肢骨では右肩甲骨の肩甲棘基部、左肩甲骨烏口突起の一部が確認できるが、その他の破片骨については詳細は不明である。なお、黒く炭化した骨片数点が含まれている。

年齢　残存する頭蓋縫合について、外板、内板ともに癒合の形跡は認められないことから青年期から壮年期の個体と考えられる。

性別　不明。

SX24

頭蓋の小さな破片骨数十点を含み、左側頭骨錐体の断片、頭頂骨と推測される破片骨が残存するが、詳細は不明である。

四肢骨についても破片骨のみで詳細は不明だが、大腿骨遠位端の関節面の一部と推定される破片が1点認められる。

年齢　残存頭蓋縫合の外板は閉鎖していないが、内板は閉鎖していることから、壮年から熟年と考えられる。

性別　不明

SX25

脳頭蓋については左頭頂骨乳突角部、前頭骨左眼窩上縁から頬骨突起に至る部分、眉弓をふくむ前頭骨右眼窩上縁の部分が確認される。顔面頭蓋では右頬骨の一部と右上顎骨の口蓋突起の一部のみ確認される。その他数十点の頭蓋破片骨が残存するが、詳細は不明。歯は8本確認されるが、うち5本は歯根のみであり、残り3本についてもエナメル質は失われている。確認される歯種は上顎左第1あるいは第2大臼歯、及び第3大臼歯である。

大腿骨の破片の他、詳細は不明であるが長管骨と推定される破片骨数十点を含む。また、指骨と思われる破片が4点含まれている。

年齢　残存する頭蓋縫合の癒合程度については外板、内板共に閉鎖していること、残存上顎骨歯槽突起に歯槽閉鎖がみられることから熟年程度と推定される。

性別　残存する眉弓の発達程度は男性的であると思われる。

ＳＸ26　（図１に残存四肢骨の一部を示す）

脳頭蓋では、後頭骨、頭頂骨の一部、左右側頭骨錐体の断片、左乳突部、前頭骨の眉間の部分、左右眼窩上縁から頬骨突起、さらに、側頭線の起部を含む部分が認められる。顔面頭蓋では、右頬骨の断片、左頬骨の前頭突起、上顎骨の口蓋突起右前部から前頭突起に至る部分が確認されるが、他の破片骨については脳頭蓋も含め詳細は不明である。また、歯根が２本見い出されたが、歯種については不明である。

胴骨では軸椎の歯突起、部位は不明であるが椎体数点、四肢骨では左上腕骨遠位部、右舟状骨、有頭骨、十数本の指骨、大腿骨骨幹部（左右不明）、大腿骨頭の一部（左右不明）が認められる。その他、長管骨の破片多数が残存する。

年齢　残存頭蓋縫合の癒合程度は外板は癒合していないが、内板は癒合が進んでいることから壮年から熟年と推定される。

性別　残存する眉間、眼窩上縁はあまり発達せず、女性的である。

ＳＸ28

右側頭骨外耳道を含む小さな破片骨1点と長管骨と推定される骨片1点を含む。

年齢　外耳道の大きさから成人と推定される。

性別　不明。

ＳＸ29　（図２に残存頭蓋の一部を示す）

脳頭蓋では後頭骨の外後頭隆起、上項線を含む部分、後頭平面から人字縁にかけての部分、頭頂骨破片、左側頭骨の乳様突起から頬骨突起基部および乳突上稜を含む乳突部の一部、左右側頭骨錐体の断片が確認できるが、左側頭骨頬骨突起基部の断片と右錐体断片は２点残存するので、少なくとも２個体の存在が推定される。また、前頭骨右側の頬骨突起を含む断片が残存する。顔面頭蓋では左右上顎骨の一部で梨状口から歯槽突起にかけての一部分、左頬骨、および右鼻骨１点（左右不明）が確認できる。下顎骨に関しては、左右の筋突起の断片、下顎体前部のおとがい隆起、おとがい結節を含む断片が残存する。歯については歯根部が１点残存するが、詳細は不明である。

四肢骨については、尺骨または橈骨骨幹部の断片、大腿骨骨幹部の断片、左腓骨遠位端の外果関節面の一部、その他小さな破片骨が残存するが、その詳細は不明である。

年齢　縫合の癒合程度は特に内板で癒合が進んでいること、残存する前歯部の歯槽が閉鎖していることから熟年と考えられる。

性別　残存する外後頭隆起と乳突上稜の発達程度、さらに下顎骨のおとがい結節の発達程度

は男性的と思われるが、乳様突起の大きさ、下顎の筋突起の大きさからは女性と推定される。

SX30

頭蓋と推定される骨片は4点残存し、1つは眼窩縁を構成する破片骨と推定されるが、詳細は不明である。

長管骨と思われる骨片が数点残存するが、これについても詳細は不明である。

年齢　残存頭蓋の厚さから、成人と推定される。

性別　不明。

SX32

数十点の頭蓋破片骨を含み、後頭骨の外後頭隆起を含む部分、舌下神経管、後頭顆の前部を含む右外側部、左の人字縁を含む後頭平面の断片が確認され、また、右側頭骨錐体の断片、乳様突起から乳突部にいたる破片が認められる。後頭骨の一部は炭化して黒くなっている。

上肢骨では肩甲骨の肩甲棘基部の断片、橈骨の骨幹部が認められる。下肢骨では、大腿骨、腓骨の一部が認められるが、変形が激しく左右は不明。その他多数の破片骨が残存するが、詳細は不明である。

年齢　残存する縫合の癒合程度から壮年と考えられる。

性別　外後頭隆起と乳様突起の発達程度、および、大腿骨粗線の発達程度から男性と推定される。

SX33

頭蓋の破片骨を多数含む。確認できる部位としては脳頭蓋では頭頂骨鱗縁、それに続く側頭骨鱗部の一部、側頭骨左乳突上稜の一部、左右頭頂骨の矢状縫合を含む一部分、蝶形骨の左卵円孔から翼状突起基部の一部分のみである。また、顔面頭蓋では、右頬骨の一部のみ確認される。下顎骨では、左側下顎底の一部が残存しており、おとがい孔が認められる。

胴骨では、頸椎と思われる椎骨の断片1点、四肢骨については左肩甲骨の肩甲切痕から関節窩の一部を含む部分、左上腕骨骨幹部と思われる断片及び外側上顆、肘頭窩の部分の断片、右尺骨骨端部の橈骨切痕、鈎状突起を含む断片、左月状骨、舟状骨、有頭骨及び指骨数十点、腸骨の断片と思われる骨片、右脛骨の断片、右距骨の距骨滑車を含む断片、その他の破片骨が残存する。

年齢　残存する縫合の癒合程度と残存下顎骨（少なくとも小臼歯部から大臼歯部）の歯槽がすべて閉鎖していることから、熟年と考えられる。

性別　残存する乳突上稜はよく発達しており、男性的であるが、詳細は不明である。

ＳＸ34

長管骨と思われる骨片が十数点残存するが、詳細は不明である。

年齢　残存する長管骨の厚さから、成人と考えられる。

性別　不明。

ＳＸ35

後頭骨左側人字縁、上項線の一部が認められる。また、左頭頂骨の鱗縁部、頭頂切痕部、左側頭骨錐体の一部も残存する。また左右は不明であるが、側頭骨の頬骨突起と推定される断片が残存する。顔面頭蓋では上顎骨と推定される断片が残存する。その他、数十点の小さな破片骨が残存するが、詳細は不明である。さらに、数点の黒く炭化した骨片が残存する。

胴骨では、椎骨の椎体が数点認められるが、詳細は不明である。ただ、１点は胸椎左横突起基部を含む断片と推定される。

四肢骨については左肩甲骨の肩甲棘基部の断片、右大腿骨近位部(大腿骨頭は含まれない)が認められる。また、数点の指骨が残存する。その他、多数の長管骨の破片も残存するが、詳細は不明である。

年齢　残存する頭蓋縫合の癒合程度から壮年と考えられる。

性別　大腿骨の筋付着部の発達程度は男性的である。

ＳＸ36　(図２に残存頭蓋の一部を示す)

脳頭蓋では、後頭骨の外後頭隆起を含む部分、矢状縫合を含む左右頭頂骨の一部、右頭頂骨前頭縁部、左側頭骨錐体の断片が確認される。顔面頭蓋では上顎骨歯槽部の断片（右第２小臼歯から第１大臼歯の部分）のみ確認される。下顎骨では左右の関節突起の一部、左小臼歯の歯槽、右関節突起の断片が認められる。また、歯根十数本と、エナメル質を欠いた上顎大臼歯（詳細は不明）が認められる。

四肢骨では、左右上腕骨頭の一部、右手根骨の舟状骨、小菱形骨、十数本の指骨、耳状面、腸骨窩の一部を含む右寛骨断片、左大腿骨頸から大腿骨頭に至る断片、右膝蓋骨の膝蓋骨底の断片、左距骨の距骨頭から距骨頸、さらに後脛骨関節面の一部を含む断片、右第１楔状骨が確認される。その他、多数の長管骨片を含むが、詳細は不明である。

年齢　残存する縫合の癒合程度から、壮年と推定される。

性別　外後頭隆起の発達程度から女性と推定される。

一括

右大腿骨骨幹の一部である。この骨のみ焼かれた跡はなく、また、他の部位の骨を伴っていない。

年齢　大腿骨骨幹部の太さから成人と思われる。

性別　不明。

考察

本人骨群は焼骨であるため、そのほとんどが変形、破壊されており、接合による再構築はほどんど不可能であった。そのため、計測、非計測的な人類学的データ収集はできなかった。したがって人類学的特徴の記載、分析は不可能である。

上記の理由で、年齢、性別判定が可能であった個体もわずかであったが、残存骨から見る限り、小児、あるいは乳幼児と考えられる個体は認められなかった。さらに、病理学的所見の確認される個体も存在しなかった。

前述のように本遺跡出土人骨は灰白色を呈するほど焼かれており、また、変形、亀裂が顕著である。歯については、エナメル質の残存している歯が皆無である。馬場ら (1986)によれば、600度以下では骨自体の変化はほとんど起こらず、800度前後で最も著しく変化するという。具体的には、色が灰白色になり、骨自体は硬くなり、数パーセントから20パーセント程度の収縮が起こり、さらにエナメル質が崩壊し、歯冠が失われる。また、軟部組織の付着した状態で骨が焼かれると、変形、亀裂が生じるが、さらした骨は焼かれてもほとんど変形はせず、大きく割れるだけであると記載されている(馬場ら、1986) 。これらのことから、本遺跡出土人骨は、軟部組織が付着したまま、かなり高温で焼かれた可能性が高いと考えられる。

参考文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治(1986)根古屋遺跡出土の人骨・動物骨. 霊山根古屋遺跡の研究、霊山根古屋遺跡調査団. PP. 93-120.

表1　骨計量値（g）

遺構名	全　体	長　骨	頭　蓋	その他
SX 1	28.9	28.9	0.0	0.0
SX 3	5.2	0.0	5.2	0.0
SX 4	5.8	3.5	2.3	0.0
SX 5	715.8	629.2	79.1	7.5
SX 8	1696.5	1031.0	614.7	50.8
SX 9	5.0	5.0	0.0	0.0
SX10	560.8	520.2	38.9	1.7
SX11	308.8	175.0	133.6	0.2
SX12	97.7	89.1	8.6	0.0
SX15	187.5	139.1	47.7	0.7
SX16	95.0	41.1	53.9	0.0
SX17	1055.3	831.3	195.3	28.7
SX19	423.4	235.3	118.9	65.7
SX20	118.2	108.2	10.0	0.0
SX21	27.8	25.2	2.6	0.0
SX22	2.7	2.7	0.0	0.0
SX23	88.5	46.2	42.3	0.0
SX24	158.8	127.6	31.2	0.0
SX25	283.9	157.6	125.2	1.1
SX26	997.5	45.3	235.2	16.6
SX28	3.0	1.0	2.0	0.0
SX29	647.4	410.7	230.7	6.0
SX30	6.8	3.9	2.9	0.0
SX32	468.9	377.7	88.8	5.4
SX33	379.6	199.0	80.5	0.1
SX34	10.4	10.4	0.0	0.0
SX35	609.9	490.1	112.6	7.2
SX36	1004.8	735.7	243.0	26.1
一括	38.4	38.4	0.0	0.0

付章２　正福寺跡出土銭貨の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館　赤沼英男、咲山まどか

１　はじめに

正福寺跡は福島県原町市に立地する高平ほ場整備事業に伴い発掘調査された遺跡である。調査の結果、火葬骨と焼けた銭貨を伴う浅い掘込みが多数検出された。銭貨は副葬品と推定され、溶着したものもみられるという。銭貨の肉眼観察によって、咸平元宝（998初鋳）、紹興元宝（1131初鋳）等が確認され、幕府による銭貨統一後も寛永通宝以外の銭貨が市場に流通していた可能性のあることが指摘されている[1)]。

寛永通宝が鋳造される以前に列島内で流通する銭貨については、大陸で鋳造された公鋳銭、私鋳銭、および列島内の模鋳銭の３つに分類できる。近年、これらの銭貨について型式学的研究結果に組成や製作技法に関する調査結果をも加味し、その分類と流通を総合的に検討しようとする研究が進められるようになった[2)]。正福寺跡出土の銭貨についてその化学組成を調べたところ、いずれも銅（Ｃｕ）、錫（Ｓｎ）、鉛（Ｐｂ）の三元系合金で、明代の公鋳銭とほぼ同じ組成であることがわかった。以下では、銭貨の金属考古学的調査結果について述べる。

２　調査資料ならびに調査方法

調査資料は図１に示す銭貨17点である(表１)。銭貨をアルコールで超音波洗浄し自然乾燥した後、蛍光Ｘ銭分析装置を使って含有成分を調べた。つぎに、錆化がそれほど進んでおらず健全なメタルが残存していると判断された９点について、微量試料片を摘出し化学組成を求めた。

資料の化学成分分析は以下のようにして実施した。まず、資料の肉眼観察に支障をきたすことのないよう細心の注意を払いながら、口縁部よりダイヤモンドカッターを使って微小試料片を摘出し、表面に付着する錆を除去しほぼ健全なメタル片とした後、エチルアルコールとアセトンを使って洗浄、乾燥したものを調査試料片とした。このようにして準備した試料片を秤量し、内田らの方法[3)]に従い硝酸で溶解し、塩酸を加え試料濃度約1000ｐｐｍ、塩酸１モル溶液となるよう蒸留水で希釈し、含有されるＣｕ、Ｐｂ、Ｓｎ、鉄(Ｆｅ)、砒素（Ａｓ）、アンチモン(Ｓｂ)、亜鉛(Ｚｎ)の７成分を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ＩＣＰ－ＡＥＳ法）により定量した。

３　金属考古学的調査結果ならびに考察

資料№８の蛍光Ｘ線による定性結果を図２に示す。図にはＣｕ、Ｓｎ、Ｐｂのピークが明瞭に認められ、Ｃｕ、Ｓｎ、Ｐｂ三元系合金と推定される。表１の右欄は同様にして実施した銭貨の蛍光Ｘ線による定性分析結果をまとめたものであるが、それによると他の16点も№８同様Ｃｕ-Ｓｎ-Ｐｂ系であることがわかった。

表1の中で、№1、№2、№8、№21、№25、№31、№32、№47、№58の9点は残存状況が比較的良好で、もとの健全なメタルが残存していると判断されたため、試料片を摘出し、ＩＣＰ－ＩＣＰ－ＡＥＳ法により化学組成を求めた。その結果は表2に示すとおりである。№21、№31を除きいずれもＣｕが67～73%、Ｓｎが５～９%、Ｐｂが17～22%にあり、ほぼ一定の組成比をとる。Ｆｅ、Ａｓ、Ｓｂ、Ｚｎの四成分はいずれも0.5%未満にあり、銭貨の鋳造に清純なＣｕ、Ｓｎ、Ｐｂ三元系合金が使用されたとみることができる。

銭貨については、型式学的研究結果に組成や製作技法に関する調査結果をも加味し、資料の分類と流通について総合的に検討しようとする研究が進められている。近年、地金の製造法を考慮のうえ、佐野、馬淵ら、および咲山らによる輸入明銭、国内模鋳銭に関する分析結果[4)-6)]に、富沢による中性子放射化分析値[7)]を加えたものを総合的に検討し、それらを三角ダイヤグラムにプロットし整理する方法が提案された[8)]。

佐々木はあらかじめ時代を銭貨の国内模鋳が盛んになる室町中期から戦国末までに限定したうえで、ア）明代の公鋳銭の鋳造には、銅・錫・鉛の各地金を適正な組成範囲に調整のうえ、溶製して合金化されたものが使用された、イ）公鋳銭に比べ銅あるいは鉛の含有量が著しく高い銭貨は、私鋳銭もしくは模鋳銭とする、ウ）硫化銅鉱を始発原料に製錬した精銅（精製された銅）に残る銀の回収が明代には広く行われていた、という３つの仮定を設定し、銭貨地金の原材料を推定し分類しているが[2)]、その分類結果に基づけば、領域Ｉにある銭貨は公鋳銭、領域Ｉ$_{Pb}$、領域Ｉ$_{Cu}$は領域Ｉのものよりもそれぞれ鉛の量を増やした私鋳銭もしくは模鋳銭、銅を加えた模鋳銭であり、精鉛（精製された鉛）・精銅の両方を添加した場合には領域Ｉよりも下方の領域Ｉ´に、精鉛と精銅のみの場合には領域Ⅱに、精銅のみの場合には領域Ⅲに帰属されることになる（図３）。

図３には前述の咲山らによる銭貨の分析結果が黒丸（●）でプロットされているが、銭貨の材質による分類結果は、桜木による肉眼での形態分類結果ともほぼ合致することが確認されている[9)]。この図に、正福寺跡から出土し化学成分分析を行った９点の中で７成分の合計が91%を越え錆化による合金成分の酸化と溶損の影響が乏しいと判断された７点について、Ｃｕ、Ｓｎ、Ｐｂの３成分を100%に規格化し白丸（○）でプロットしたところ、№32、№47を除く５点はいずれも領域Ｉに分布した。これらは明代の公鋳銭とほぼ同じ組成の合金によって鋳造されたとみることができる。これに対しNo.32は領域Ｉのやや下方、№47は領域Ｉのやや右方にプロットされ、それぞれ公鋳銭に精銅、精鉛が添加された可能性を考えることができる。

幕府によって寛永通宝が製造され、その後背面に「文」のある新寛永が流通するが、それらの地金にはそれまで列島内で使用されていた明代の公鋳銭とほぼ同じ組成の合金が使用されていることが明らかになった。幕府が銭貨鋳造のためそのような組成の合金をどのようにして調達したか興味が持たれるところであるが、この点については出土銭貨の型式分類とその組成分析の蓄積を待って検討したいと考える。

註

1）資料提供は原町市教育委員会。

2）銅および銅合金を素材とする遺物に関する最近の学際的研究動向については、『季刊考古学第62号』（雄山閣出版、1998）に解説されている。

3）内田哲男・平尾良光「ＩＣＰ分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」保存科学、29、1990、pp.43-49。

4）馬淵久夫・野津健治・西松重義・不破敬一郎・井山弘幸・富永　健「古代貨幣の化学組成」日本化学会誌、1979、p.586。

5）佐野有司・野津健治・富永健「多変量解析法を用いる古銭の化学組成の研究」古文化財の科学、28、1983、p.4。

6）咲山まどか・赤沼英男・佐々木稔「出土銭貨の極少量試料摘出による化学成分分析とその修復法」出土銭貨、７、1997、p.106。

7）富沢　威・横山哲也・米沢仲四郎・薬袋佳孝・富永　健・嶋谷和彦「中世銭貨の化学分析」『堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告－ＳＫＴ78地点・銭鋳型出土地点の調査－』1997。

8）佐々木稔「出土銭貨の自然科学的解析法について」出土銭貨、７、1995、p.93。

9）咲山まどか・赤沼英男・櫻木晋一・佐々木稔「中世出土銭の形態的特徴と材質の比較研究」出土銭貨研究会第４回大会報告要旨集、1997、p.50。

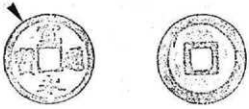
表1　調査資料

資料No.	資料名	XFA	ICP-AES
No.1	寛永通宝	Cu-Sn-Pb系	○
No.2	寛永通宝・文銭	Cu-Sn-Pb系	○
No.7	元豊通宝（宋）	Cu-Sn-Pb系	−
No.8	洪武通宝（明）	Cu-Sn-Pb系	○
No.21	寛永通宝	Cu-Sn-Pb系	○
No.25	寛永通宝・文銭	Cu-Sn-Pb系	○
No.30	咸平元宝（宋）	Cu-Sn-Pb系	−
No.31	聖宋元宝（宋）	Cu-Sn-Pb系	○
No.32	寛永通宝・文銭	Cu-Sn-Pb系	○
No.37	寛永通宝・文銭	Cu-Sn-Pb系	−
No.43	熙寧元宝　（宋）	Cu-Sn-Pb系	−
No.44	寛永通宝	Cu-Sn-Pb系	−
No.47	寛永通宝・文銭	Cu-Sn-Pb系	○
No.57	紹興元宝（南宋）	Cu-Sn-Pb系	−
No.58	寛永通宝	Cu-Sn-Pb系	○
No.63	紹聖元宝（宋）	Cu-Sn-Pb系	−
No.64	天禧通宝（宋）	Cu-Sn-Pb系	−

表2　銭貨の化学組成（%）

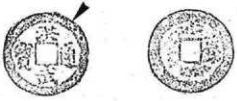
		化学成分（%）						
No.	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Sb	Fe	Zn
1	寛永通宝	66.4	7.29	19.9	0.027	0.034	0.183	0.010
2	寛永通宝・文銭	69.8	6.56	20.5	0.025	0.032	0.006	0.020
8	洪武通宝	70.2	7.76	21.5	0.308	0.155	0.024	0.016
21	寛永通宝	54.3	2.46	25.8	0.326	0.063	0.268	0.012
25	寛永通宝・文銭	67.5	6.87	17.1	0.115	0.042	0.060	0.011
31	聖宋元宝	48.8	4.27	24.7	0.160	0.039	0.027	0.008
32	寛永通宝・文銭	69.8	5.52	18.9	0.035	0.100	0.075	0.017
47	寛永通宝・文銭	67.2	7.73	24.3	0.005	0.043	0.073	0.013
58	寛永通宝	73.0	8.88	17.8	0.473	0.115	0.018	0.011

分析はＩＣＰ－ＡＥＳ法による。

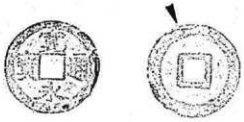


No. 1 寛永通宝

No. 2 寛永通宝・文銭



No. 8 洪武通宝



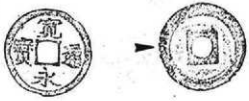
No.21寛永通宝

No.25寛永通宝・文銭

No.31 聖宋元宝

No.32寛永通宝・文銭

No.47寛永通宝・文銭



No.58寛永通宝

図1　分析した資料の拓本　　矢印は試料片摘出位置

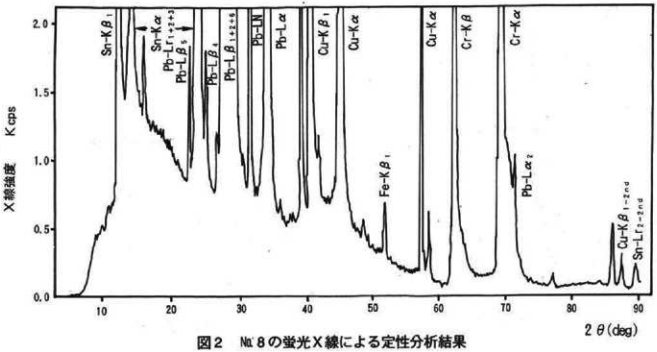


図2 №8の蛍光X線による定性分析結果

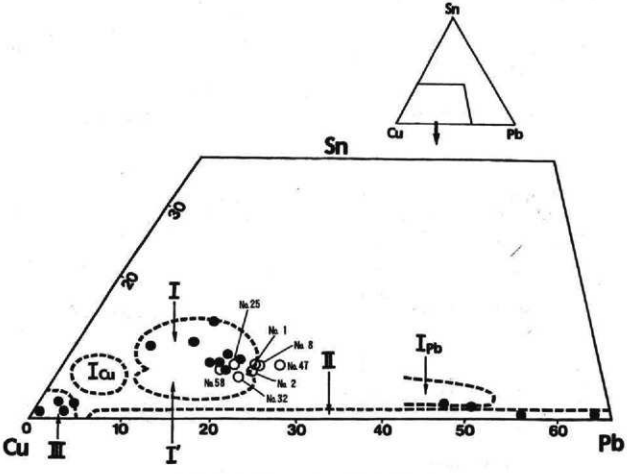


図3 銭貨のCu、Sn、Pbの三成分比

№は表1に対応する。

第5編　広　　畑　　遺　　跡

第５編　広畑遺跡（遺跡番号　20600098）

第１章　調査に至る経過

現在の原町市では、県営ほ場整備事業に伴い大規模な開発が行われている。ほ場整備事業では多くの遺跡が発掘の対象になり、消滅してしまう遺跡について発掘調査を実施し遺跡の記録保存を行っている。

ほ場整備事業が行われている地域は、原町市を東流する新田川北岸の高平地区・泉地区であり、周知の遺跡として登録されている遺跡については、文化庁国庫補助金による遺跡の内容・範囲の確認を行い、本調査の必要性を判断している。

広畑遺跡については、これまで２回の発掘調査が実施されている。第１次調査は平成７年度に泉平舘跡の一部として実施された。２次調査は平成10年度に範囲確認のための試掘調査として実施された。今回の調査区はこれらの調査により把握されたものである。ほ場整備事業の面整備においては、試掘調査結果をもって保存協議を行い工法対応による遺構の保存が決定している。本調査は、ほ場整備事業に伴う河川改修事業の施行範囲内において、掘削を受け消滅してしまう範囲において実施した。

第２章　調査要項

1　遺　跡　名　広畑遺跡

2　所　在　地　福島県原町市泉字塚越

3　遺跡の性格　奈良・平安時代の集落跡

4　調査期間　発掘調査（３次調査）　平成10年８月25日～平成10年12月15日

5　調査面積　2,150㎡

6　調査体制

調　査　主　体　原町市教育委員会

調　査　担　当　生涯学習部文化課発掘調査係

発掘調査担当者　１次調査　主任文化財主事　堀　耕平

２次調査　主任文化財主事　堀　耕平

３次調査　文化財主事　荒　淑人

事務局体制

平成10年度	平成11年度
教　育　長　鈴木　清身	教　育　長　鈴木　清身

生涯学習部長	佐藤 一男	生涯学習部長	佐藤 一男
生涯学習部次長	渡部紀佐男	生涯学習部次長	阿部 敏夫
文化課長	阿部 敏夫	文化課長	阿部 敏夫
主幹	高倉 一夫	主幹	高倉 一夫
文化振興係長	小田 幸夫	文化振興係長	小田 幸夫
発掘調査係長	山家 正勝	発掘調査係長	堀 耕平
主査	木幡 雅巳	主査	山内 茂樹
副主査	鈴木 文雄	主査	鈴木 文雄
主任文化財主事	堀 耕平	文化財主事	荒 淑人
文化財主事	荒 淑人	臨時職員	綱川 裕子
臨時職員	綱川 裕子		

7 発掘作業員

青田光収・青田翠・稲村丑治・岩井幸男・岩井百合子・遠藤紀子・押野己ノ助・大内スミ子・小川美紀子・大竹裕一・大石房子・大石順二郎・加賀田勇一・北山八重子・北山睦・草野ヤイ子・今野一子・紺野弘子・今野アヤコ・木幡一征・木幡春江・佐藤紀美子・佐藤セイ・佐藤フクイ・佐藤昭子・佐藤整・佐藤文江・佐藤順厚・佐久間三雄・志賀セツ子・新開光子・鈴木康雄・鈴木伸子・杉浦桂子・諏佐忠男・高野賢喜智・高玉親・高橋キイ子・高野勝子・高井孝子・但野十九・舘内ミヨ子・武志正信・寺島日出雄・寺島博喜・中田幸一・新妻孝子・新妻順子・星アキヨ・宮林イエ子・山田英子・山口千恵子・横山賢・渡辺トシ子・渡辺トヨ

8 広畑遺跡の発掘調査に際しては東北学院大学考古学研究部が参加した。

阿部隆弘・伊藤秀司・猪股秀友・伊藤朋美・飯島克彦・内海修・鍛原貴子
大石寿之・小田桐拓郎・大河原基典・神子田純・小林朋子・斎藤咲子・斎藤真希
神冨有美・鈴木邦彦・相馬真奈美・高橋聖絵・塚本憲児・永澤亜紀子・中村崇之
南雲久範・二階堂敏充・林田容子・半澤光希・久井秀文・飛田尚子・広瀬瑞恵
深田利恵・松本友美・溝井恵美子・八重樫和孝・吉田陽一・渡辺彰(以上東北学院大学)
吉野久美子（以上宮城学院女子大学）

第3章 調査の方法

第1節 試掘調査

試掘調査は調査対象地に101か所のトレンチを設定し、遺跡の内容及び範囲の確認を行った。トレンチは2×10mの大きさを基本にし、必要に応じて拡張や新たな設定を行った。掘り下げる深さは遺構を検出するまで、もしくは表土・盛土を取り除いて古い地層を確認するところま

図1　広畑遺跡トレンチ配置図

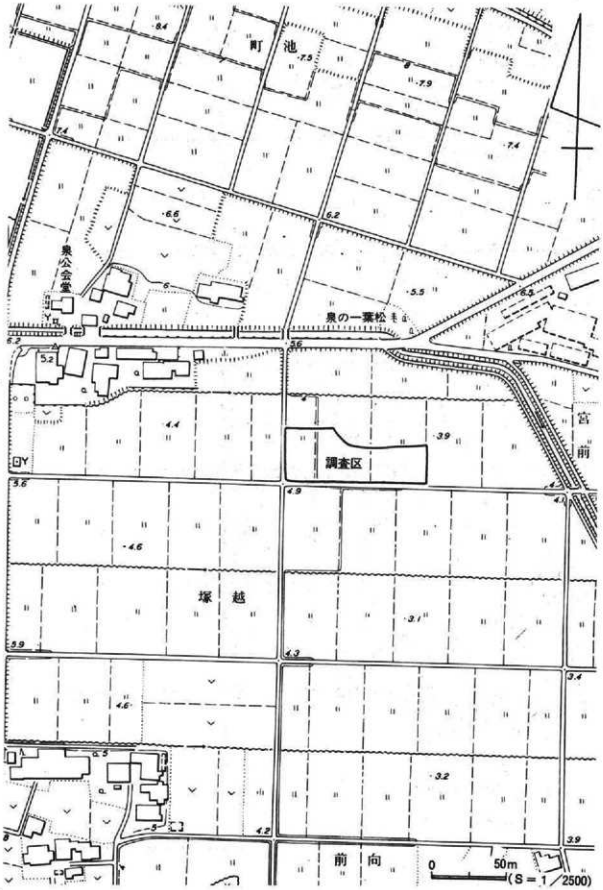


図2　3次調査位置図

でとした。表土の除去は主に重機を用いて行い、それ以下については人力で検出を行った。

試掘調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡が確認されたことから、古墳時代から平安時代の集落跡として判断されている。

また、遺構は遺跡範囲の北側と南側に顕著なまとまりが見られ、A地区、B地区とした。

第2節 発掘調査

発掘調査に先立ち、遺跡範囲全体に5m四方のグリットを設定した。グリットはX軸が真北を表し50m毎にA・B・C・D…と移行する。更にX軸の50mグリットは5m毎に細分されA・B・C・D…と表示される。つまりグリットの北西角はAと表示され南に5m移る毎にAB・AC・AD…と表示されることとなる。Y軸は東西方向を示し5m毎に1・2・3…と移行する。よってグリットの北西角はAA－0と表示され、東に移る毎にAA－1・AA－2・AA－3…と移行する。

X軸とY軸の交点は公共座標に対応するものであり、遺構の測量図作成については、これらのグリット杭を基準にして平板で作成した。

調査範囲の表土剥ぎは、前年度に実施された試堀調査成果をもって重機によって行った。重機はバックホー07m^3を使用した。重機による作業は表土除去を基本とし、それ以外の遺構検出並びに遺構の掘り下げなどは人力で行った。遺構は検出された順から遺構番号を付し、出土遺物はグリット、遺構名、層位の記録をとって取上げた。

掘立柱建物跡の平面図並び土層断面図および溝跡の土層断面図はS＝1／20で作成し、全体測量図並びに溝跡の全体図はS＝1／50で作成した。

遺構の記録写真は35㎜カメラで撮影した。使用したフィルムはフジクロームSENSIAⅡ・フジフィルムPRESTO100・フジカラーSUPERIA100を使用した。

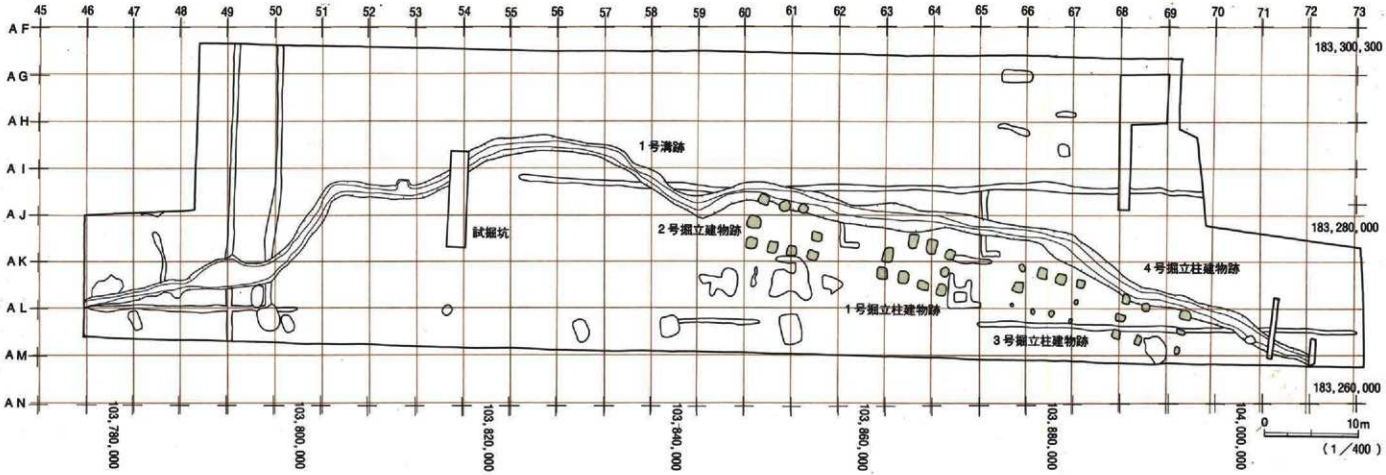

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
AF
AG
AH
AI
AJ
AK
AL
AM
AN
183,300,300
183,280,000
183,260,000
1号溝跡
試掘坑
2号掘立建物跡
1号掘立柱建物跡
3号掘立柱建物跡
4号掘立柱建物跡
103,780,000
103,800,000
103,820,000
103,840,000
103,860,000
103,880,000
104,000,000
0
10m
(1／400)

図3　調査全体図

第4章　調査成果

第1節　遺構について

調査区域では掘立柱建物跡4棟、溝跡1条を確認した。掘立柱建物跡は溝跡に切られており、溝跡が新しいことか確認されている。溝状遺構の深さは深いところでも30㎝程で非常に浅いものであったため、遺構の上面は既に削平されていたと考えられ、本来の遺構掘り込み面とは考えにくい。

1　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計4棟を検出した。いずれの掘立柱建物跡も2間×3間の中抜きの建物であり、東西棟である。

1号掘立柱建物跡（ＳＢ－1）

1号掘立柱建物跡は、ＡＪ－62グリットからＡＫ－64グリットで検出された中抜の掘立柱建物跡である。桁行2間×梁間3間の東西棟の建物であり、建物の規模は桁行400㎝、梁間650㎝である。柱間寸法は、梁間が北側柱列で西から250㎝、190㎝、210㎝、桁行は東側柱列で北から210㎝、190㎝を測る。隣接して西側には2号掘立柱建物跡、東側には3号掘立柱建物跡が位置する。ほかの遺構との重複関係はなく、遺物は出土しなかった。

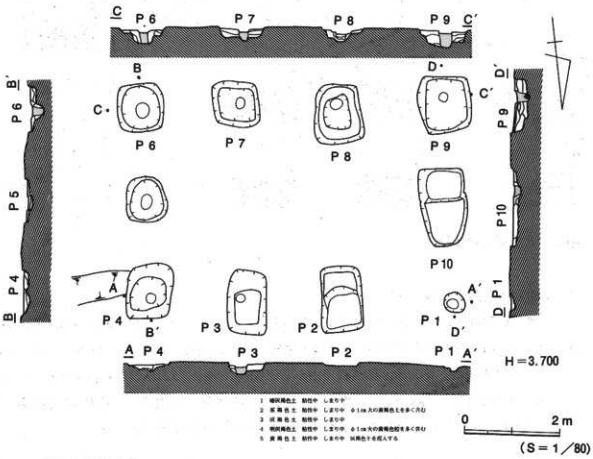


図4　1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡（ＳＢ－２）

２号掘立柱建物跡は、ＡＬ－60グリットからＡＪ－61グリットで検出された中抜の掘立柱建物跡である。桁行２間×梁間３間の東西棟の建物であり、建物の規模は桁行430㎝、梁間670㎝である。柱間寸法は、梁間が北側柱列で西から210㎝、210㎝、250㎝、桁行は東側柱列で北から250㎝、220㎝である。東側には３号掘立柱建物跡が位置している。他遺構との重複関係としては、１号溝跡と重複が確認され、溝跡が新しいことが確認されている。柱穴からの出土遺物は無い。

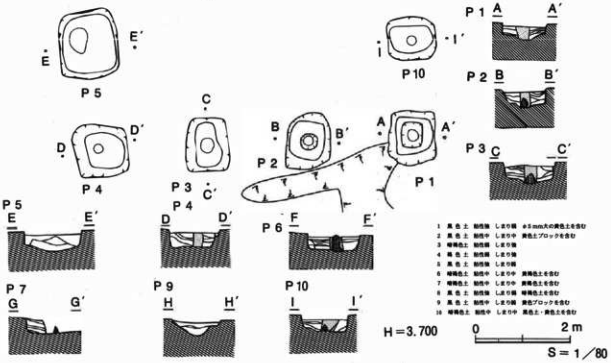


図５　２号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（ＳＢ－３）

３号掘立柱建物跡は、ＡＫ－65グリットからＡＬ－66グリットで検出された中抜の掘立柱建物跡である。桁行２間×梁間３間の東西棟の建物であり、建物の規模は桁行410㎝、梁間640㎝である。柱間寸法は、梁間が北側柱列で西から210㎝、210㎝、220㎝、桁行は東側柱列で北から210㎝、220㎝を測る。隣接して西側には１号掘立柱建物跡、東側には４号掘立柱建物跡が位置する。ほかの遺構との重複関係はなく、また柱穴からの出土遺物は無い。

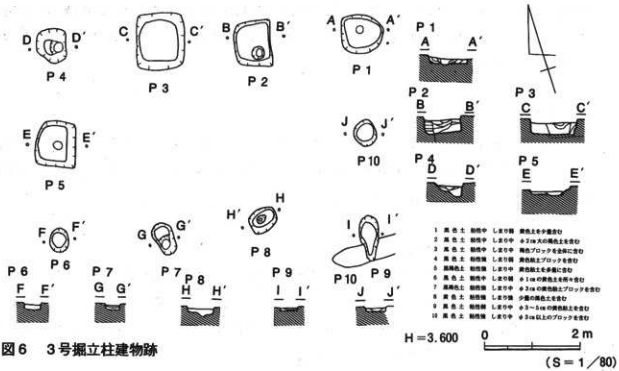


図6　3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡（SB－4）

1号掘立柱建物跡は、AK－68グリットからAL－69グリットで検出された中抜の掘立柱建物跡である。桁行2間×梁間3間の東西棟の建物であり、建物の規模は桁行390cm、梁間650cmである。柱間寸法は、梁間が北側柱列で西から210cm、－cm、－cm、桁行は東側柱列で北から

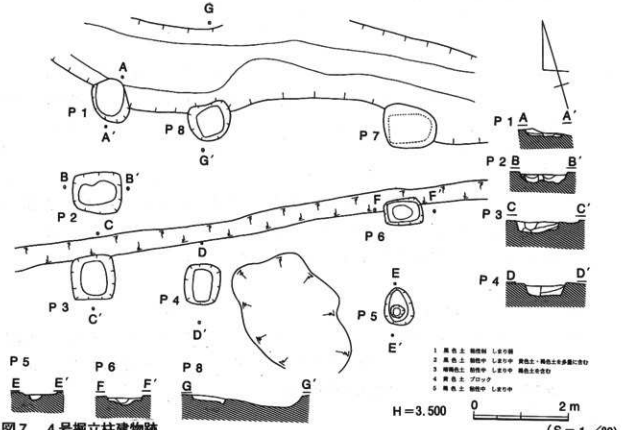


図7　4号掘立柱建物跡

210cm、180cmを測る。隣接して西側には2号掘立柱建物跡が位置する。ほかの遺構との重複関係としては、1号溝跡との重複が確認されており1号溝跡が新しいことが確認されている。柱穴からの出土遺物は無い。

2　溝跡

1号溝跡は調査区を東西に蛇行しながら検出された。最も幅が広いところでは5m、最も狭いところでは100cmを測る。遺構の検出面からの深さは約40cmである。本調査で出土した遺物のほとんどはこの溝跡から出土している。

第2節　遺物について

出土した遺物の大半は土器類である。土器類は土師器、須恵器、施釉陶器などがある。量的には土師器が最も多く、次いで須恵器の出土が目立つ。瓦および施釉陶器は1点ずつである。これらの遺物はすべて1号溝跡からの出土である。層位的には溝跡の最下層である初期堆積土からの出土であり、一括資料として考えられる。

1　土師器

土師器は、杯、甕、鉢、高台付杯、高台付皿、甑が出土した。杯が最も多い。杯に次いで甕の出土が目立つが全体の器形が判断できるものは少なく、口縁部資料を中心に図示した。高台付杯および高台付皿の出土は少ない。

杯

出土した杯のほとんどがロクロ土師器である。底部の切離し技法は回転糸切りによるものがほとんどであり、内面調整は横方向のヘラミガキと黒色処理が施される。外面の再調整の有無で3類に分類が可能である。

A類（図8－1～32）

外面にはロクロの使用痕を残し、回転糸切りによって底部を切り離すものである。底部の再調整は施されない。内面には摩滅のためにヘラミガキがはっきりとしないものがあるが、ヘラミガキによる調整および黒色処理を施すと考えられる。

B類（図9－1～25・図10－1～5）

外面にはロクロの使用痕を残し、底部は回転糸切りによって切り離される。底部には再調整として手持ちヘラケズリを行うが、再調整は底面端部に限られ底部全体を施すまでには至らない。内面調整はヘラミガキ後に黒色処理が施される。

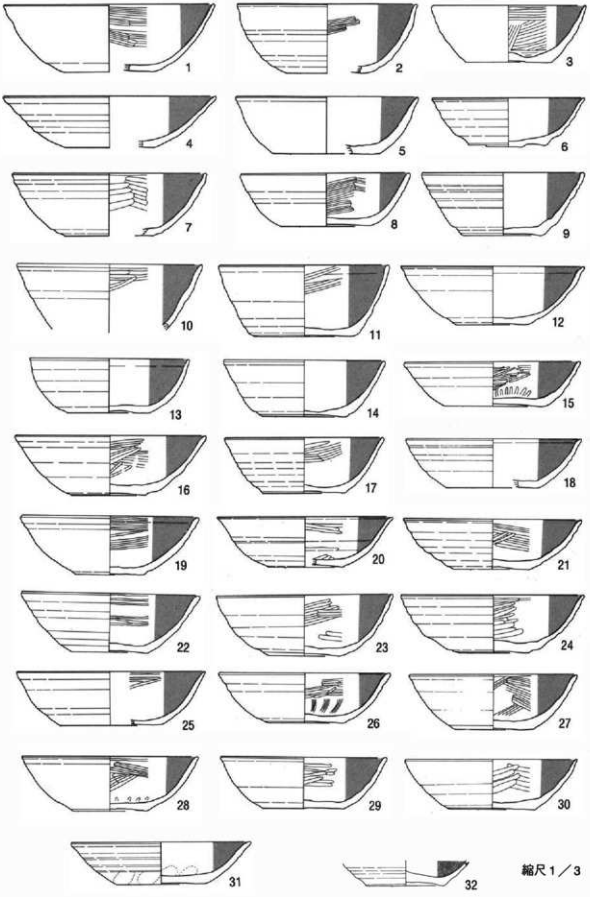

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
縮尺1／3

図8 土師器杯（1）

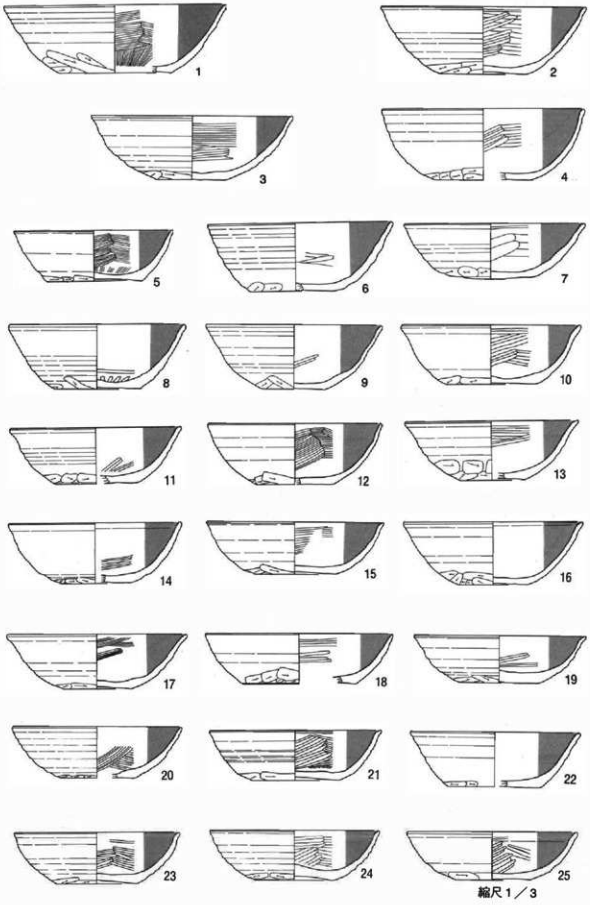


図9　土師器杯（2）

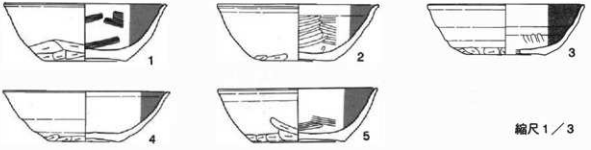


図10 土師器杯（3）

図11 土師器杯（4）

C類（図11－1～3）

外面にはロクロの使用痕が残り、底部は回転糸切りによって切り離される。底部には再調整として回転ヘラケズリを施す。再調整は底面端部に限られる。内面にはヘラミガキと黒色処理が施される。

墨書土器（図12・13・14）

墨書が確認された資料は125点を数える。このうち墨書を判読できた資料は46点である。判読できた資料についてはできる限り図示した。墨書は杯の体部もしくは底部に書かれており、外面の底部付近には手持ちヘラケズリによる再調整と内面にはヘラミガキの後に黒色処理が施される。杯以外の器種には墨書は見られない。

判読できた墨書は「厨」「寺」「主」「定」「南」「浄」「田」「褐(福？)」「吉」「河」「見」「子井」「木」「万毛□」である。このうち最も多く出土したのは「厨」であり、8点を数える。厨についで多く出土したのは「主」であり4点を数える。

甕

甕は1号溝跡から出土したが、全体の器形が判断できるものが少ないため、口縁部資料を中心に図示した。図示した資料は49点である。甕はロクロ整形のものが主体であり、非ロクロ整形のものは3点である。

A類（図15－1～16）

ロクロを使用する甕である。外面調整には体部上半にはロクロの使用痕を残し、体部下半にはヘラケズリを施す。内面調整にはヘラナデが施され、口縁部はヨコナデが施される。A類の

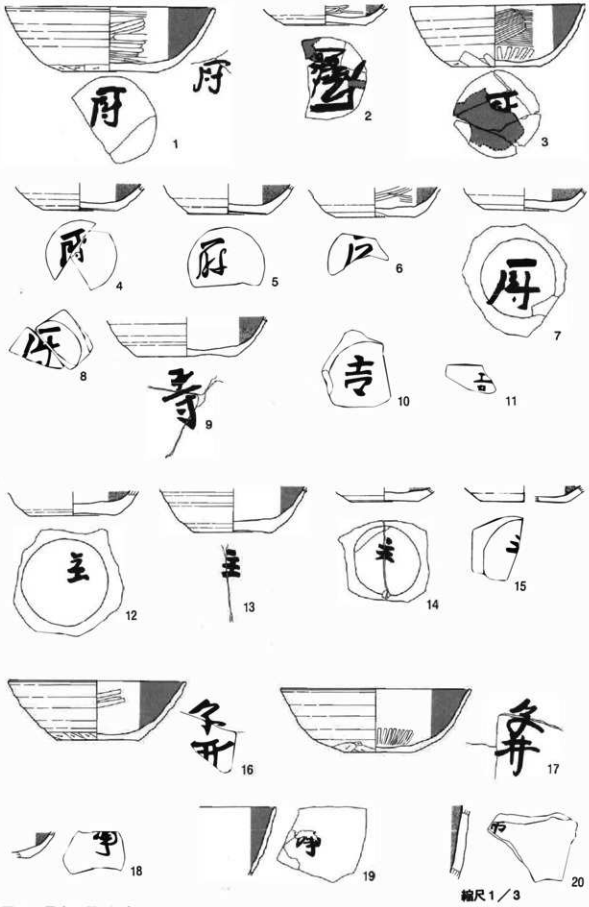
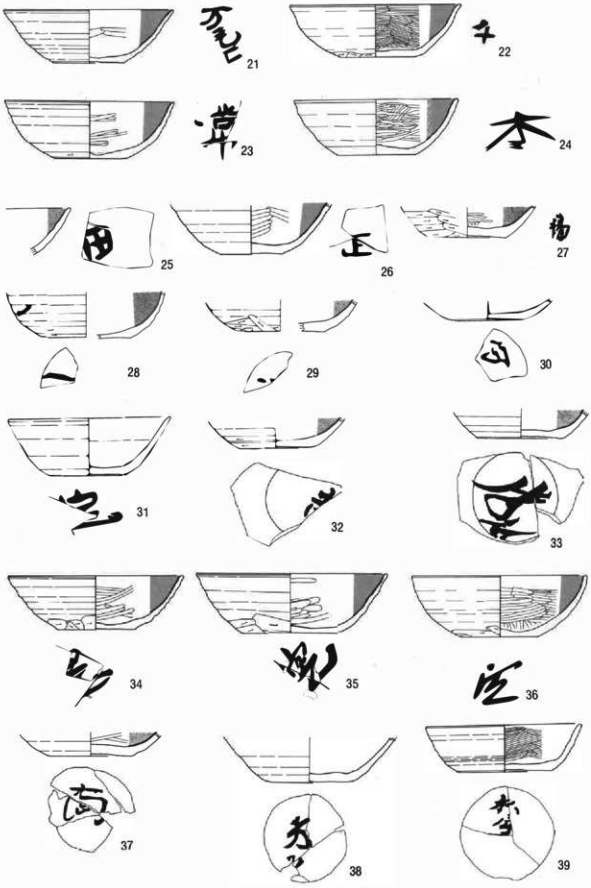


図12 墨書土器（1）



縮尺1／3

図13 墨書土器（2）

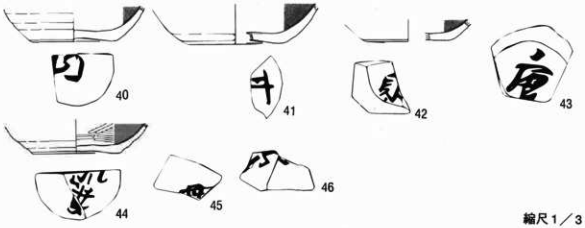


図14 墨書土器（3）

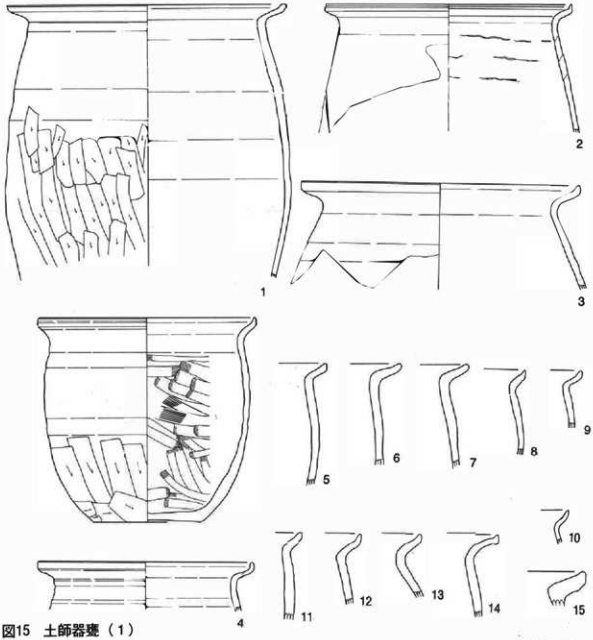


図15 土師器甕（1）

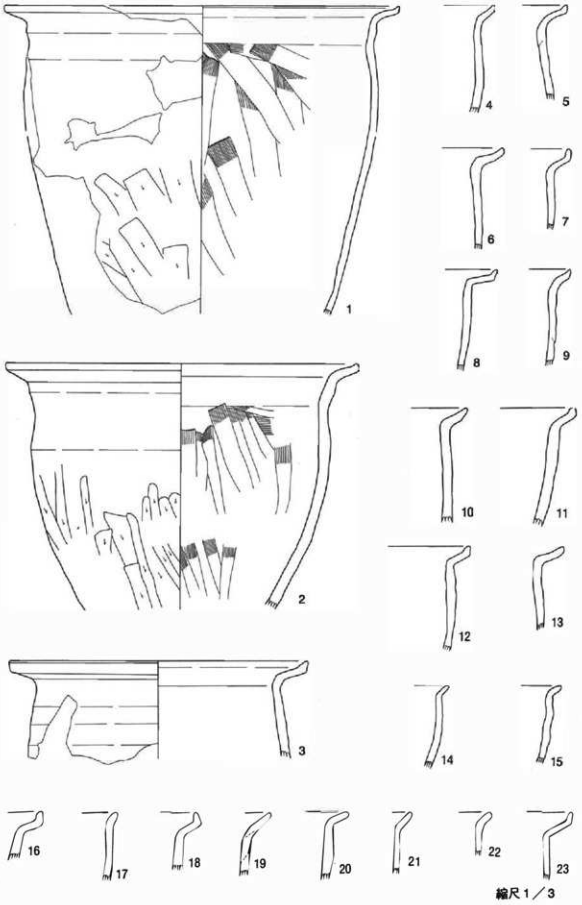


図16 土師器甕（2）

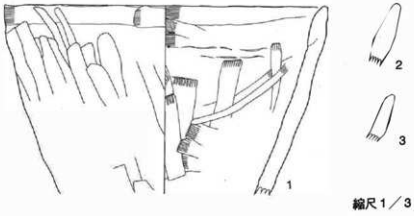


図17 土師器甕（3）

特徴としては最大径が胴部中段にあるもので、口縁部の形態にバラエテェーが見られる。底部の形状は不明である。

B類（図16－1～23）

体部の最大径が頸部付近にあるものである。底部の形状は不明であるが、口縁部の形態にはバラエテェーが見られる。23点の出土を確認している。

C類（図18－1）

器形は底部からほぼ垂直に口縁部に至る。底部の形状は不明である。外面及び内面にはロクロの使用痕を残す。1点の出土を確認している。

D類（図17－1～3）

非ロクロ整形の甕である。器形はハの字に外傾しながら直線的に口縁部に至る。底部の形状は不明である。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデを施す。口縁部はヨコナデが施される。1は口縁部から体部にかけた資料である。2・3は口縁部資料である。

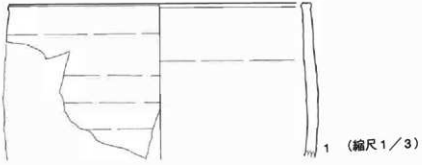


図18 土師器甕4

高台杯（図19－１～７）

高台付杯は７点について図示した。１から４は外反する１㎝ほどの高台が付くものである。杯部の形状、外面調整は不明である。内面調整では、１はヘラミガキと黒色処理が施されることから、２・３・４についても同様の調整が施されると判断される。５・６は2.5～３㎝の外反する高台が付くものであるが杯部の形状は不明である。６は内面には黒色処理が施される。
７は５㎜前後の非常に短い高台が付き、高台の断面形は三角形を呈する。内面には黒色処理が確認される。上記の資料はすべてロクロ整形による。

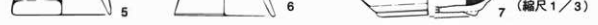


図19　高台坏

鉢（図20－１～２）

鉢と判断した資料は２点ある。２は底部から口縁部下端にかけた資料と思われる。器形は平底の底部から緩やかに内湾しながら体部上半にいたる。口縁部は欠損しており判然としない。明瞭なロクロの使用痕は観察できない。外面は底部付近にヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキおよび黒色処理が施される。１は緩やかに内湾しながら立ち上がる体部から、微妙に外反して口縁部を形成する。外面調整および内面調整は不明であるが、黒色処理が施される。

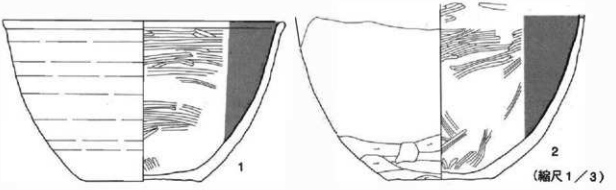


図20　鉢

高台皿（図21－８）

１点の出土を確認している。微妙に外反する１㎝ほどの高台が付し、強く外傾しながら開いて口縁部に至る。杯部の深さは1.2㎝と非常に浅いことから皿として判断した。外面にはロクロ使用痕を残し、内面には黒色処理が施される。

小型甕（図21－1～4）

4点を確認しているが全体を判断できる資料はない。1は口縁部から体部下半にかけた資料である。緩やかに内湾する体部に、短く外傾する口縁部がつく。2は底部から体部上半にかけた資料である。底部は平底で緩やかに立ちあがる。4は底部から体部にかけた資料である。2と同様に平底の底部から緩やかに外傾しながら体部に至る。底部外面にはケズリが施され、内面には黒色処理が施される。いずれの資料も、器面はロクロによって整形されている。3は、残存率が小さいため詳細は判然としないが、通常の甕かもしれない。

甑（図21－9）

甑として判断した資料は1点ある。非常に細片であり詳細は判然としない。

赤焼土器（図21－5～7）

3点の資料を確認している。1の器高は1.7cmを非常に低い。ロクロによって整形され器面にはロクロナデを残す。

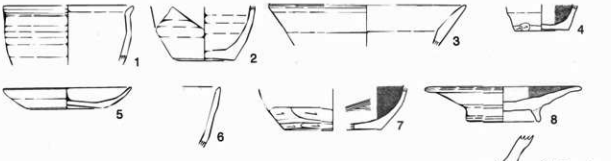


図21 その他の遺物

2 須恵器

須恵器は土師器についで出土量が多い。器種としては杯が最も多く、長頸瓶、壺、甕、蓋などを確認している。

杯

杯は23点について図示した。いずれの資料も底部は糸切り技法によるものである。外面、内面にはロクロの使用痕を残し、底部の再調整の有無で2種類に分類される。

A類（図22－1～18）

底部は回転糸切りによって底部の切離しを行い、底部には再調際を行わない。内面はロクロ

の使用痕を残す。

B類（図22－19～23）

底部は回転糸切りによって底部を切り離し、底部の周縁および底面に手持ヘラケズリによる再調整を行う。

甕（図23－1～14）

甕は14点について図示した。1・3は口縁部から体部上半にかけた資料である。強く張る肩部から直立気味に口縁部に至る。口縁部付近では外反し、更に口唇部は強く外反する。2は体

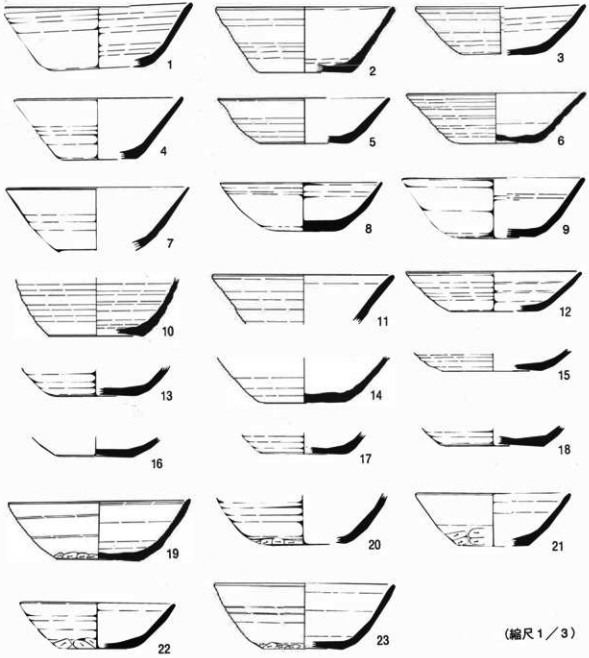


図22 須恵器杯

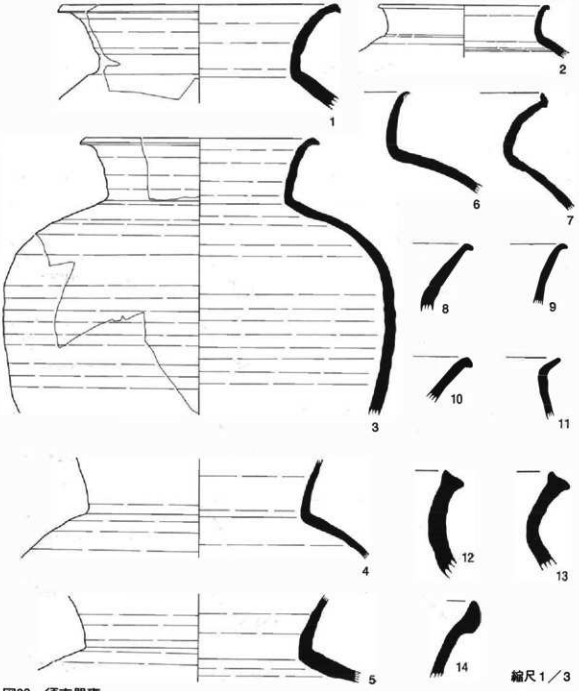
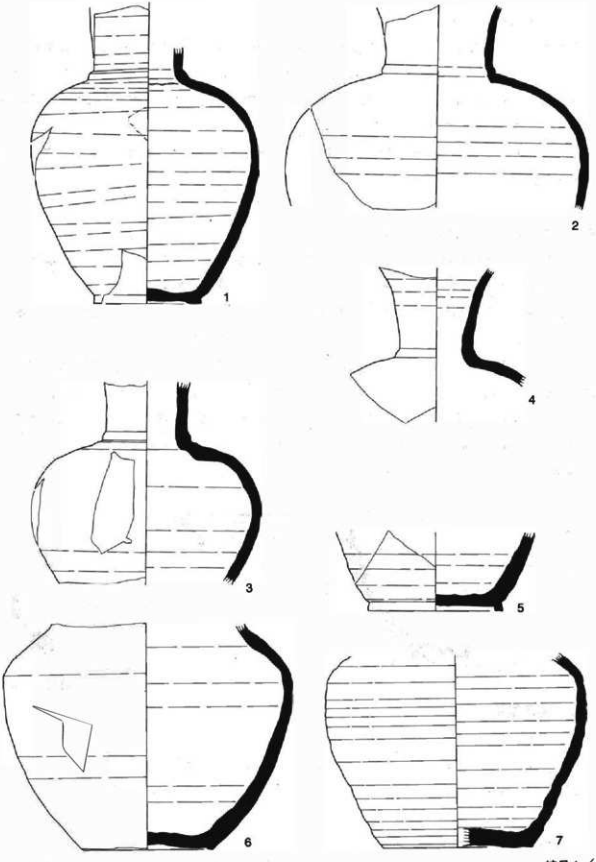


図23 須恵器甕

部の形態は不明であるが、口縁部は1・3よりも明瞭に直立する、4・5は体部上半から頸部にかけた資料である。口縁部の形状は不明であるが、おそらく1・3と同様の器形であるとおもわれる。体部からやや外傾しながら口縁部に至る。6から14は口縁部資料である。6は口縁部が欠損しており判然としない。7は強く外反する頸部に強く内湾する口唇部がつく。8～10は外傾する口縁部に強く外半する口信部が見られる。11の口縁部は非常に短い。12・13は接合関係にはないが同一個体であると判断される。緩やかに外反する頸部に断面形が微妙に窪む口唇部が付する。14は緩やかに外反する頸部に断面形が凸型の口唇部がつく。



縮尺1／3

図24 須恵器長頸瓶（1～4）・須恵器壺（5～7）

長頸瓶（図24－1～4）

長頸瓶は4点を確認している。器形全体が判断できるものはなく、特に口縁部欠損が著しい。

1は頸部から底部にかけての資料である。器面にはロクロナデが残る。底部には短い高台がつき体部に至る。体部は最大頸が体部上半に位置し、頸部下端にリング状の突帯がめぐる。口縁部の形状は、欠損のため判然としない。

2・3・4は頸部から体部上半にかけての資料である。1と同様に頸部下端にリング状の突帯が巡る。

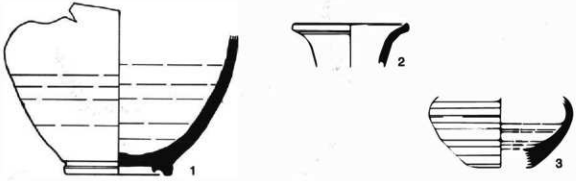
壺（図24－5～7・図25－1～3）

壺と判断した資料は6点ある。いずれの資料も頸部付近が欠損していることから長頸瓶との区別が困難であり、頸部の3段構成が確認できないものを壺と分類した。

図24－5・6・7・図25－1は体部から底部にかけた資料である。図24－5・図25－1は底部に短い高台が見られる。体部にはロクロの使用痕が残り、最大径は体部上半に位置すると思われる。

図24－6・7には上記資料のような高台は見られず平底である。体部の最大径は残存する範囲では確認できないことから、上記資料と同様に体部上半に位置するものと思われる。

図25－3は小型の壺である。口縁部および頸部は欠損しており判断できない。底部は平底で体部中段やや上方に最大径を持つ。図25－2は口縁部資料である。頸部から緩やかに立上がり口縁部に至り、口唇部は強く外反する。



縮尺1／3

図25　須恵器壺

蓋（図26－1～3）

蓋と判断した資料は3点ある。1は小型の蓋である。つまみは欠損のため明瞭でない。口縁部にはかえりが確認される。2・3はつまみや口縁部は欠損のため不明である。

3　灰釉陶器（第27図1・2）

灰釉陶器は口縁部から体部資料1点、底部資料1点、破片資料2点を確認し、体部資料と底部資料の2点について図示した。4点は接合しないが同一固体と判断される。器種としては椀

縮尺1／3

図26 須恵器蓋

皿と判断され、高台は1㎝弱でさほど高いものではない。胎土は灰白色である。ロクロによって整形されており口縁部から体部にかけては施釉されているが、底部には施釉が施されない。施釉方法は刷毛掛けと思われる。

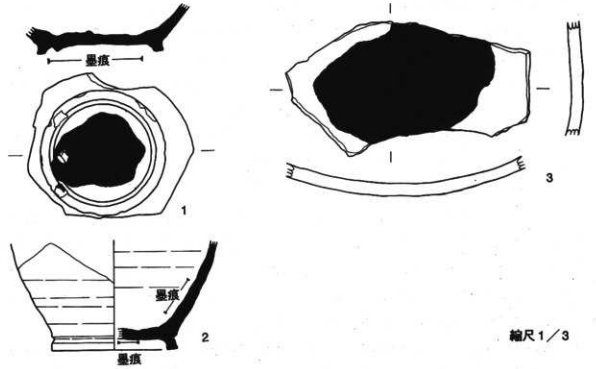
縮尺1／3

図27 施釉陶器

4 その他の遺物

転用硯（図28－1～3）

転用硯は3点を確認している。1は須恵器壺の底部であり、硯としては底部高台内部を硯として利用している。2は須恵器壺の底部である。硯としての転用は高台内部および体部下半内部を利用している。3は甕と思われる須恵器片である。硯としては破片内部を利用している。



縮尺1／3

図28 転用硯

第3節 ま と め

今回の発掘調査では、4棟の掘立柱建物跡と溝跡1条を確認した。検出した掘立柱建物跡は4棟とも規模、構造が類似しており、また4棟が軒をそろえて並んでいることから非常に強い規格性がうかがえる。残念ながら柱穴や柱痕からの遺物の出土は無く、実年代の決定は困難であるため、他遺跡との比較をして広畑遺跡の性格や年代を推定してみたい。

広畑遺跡の北方約200mには県指定史跡である泉廃寺跡が所在している。泉廃寺跡は、近年の発掘調査の結果、行方郡衙跡であることが確実となった。郡衙の成立時期や廃絶時期、各遺構の変遷時期などの年代に関しては不明な点が多いものの、遺構の変遷については徐々に判明しつつある。泉廃寺跡で検出される建物跡には、非常に強い規格を有した配置が確認されており、建物群の配置から大きく3つの時期が想定される。最も古い時期には建物跡の軸が真北方向から西に偏する建物群が主体となり、次に建物群の軸が真北方向に揃うようになる。その後建物群の軸は真北方向から東に偏するようになる。残念ながら、これらの建物跡の変遷時期を決定できる土器資料の出土は乏しいことから、各時期に関しての実年代については不明とせざるを得ないものの、広畑遺跡で検出された建物群は泉廃寺跡のもっとも新しい時期の建物群と同じような建物配置をしていること、建物配置に強い規格性がうかがえることから、広畑遺跡で検出した掘立柱建物跡は行方郡衙である泉廃寺跡に関係する建物群の一部であると推定される。

前述した広畑遺跡の建物群は、調査区を横断する溝跡と重複関係にあり、溝跡より古い建物群であることが確認されている。つまり、溝跡から出土した遺物をもって建物群が存在していた年代の上限をある程度想定することが可能である。

近年、原町周辺では金沢製鉄遺跡群における原町火力発電所建設に伴う大規模な発掘調査により、7世紀後半から10世紀の資料が出土し7群の土器が確認されている。

これらの検討によると、金沢地区出土Ⅶ土器群の特徴が広畑遺跡出土土器群との特徴と類似していることから両者の比較を行い広畑遺跡出土の土器群について検討したい。

金沢地区出土Ⅶ土器群の土師器杯は、底部に手持ちヘラケズリを施し、全体的に内湾傾向が見られ、なかには椀を意識した要素を有するものも見られる。甕はロクロ使用が普遍化し、タタキや二次調整は減少傾向にあるとされている。

須恵器杯には糸切り痕が確認され、再調整は施されない。長頸瓶は頸部にリング状突帯が見られる。原町市周辺において底部に糸切りを有するは須恵器杯は上北高平所在の入道迫瓦窯跡や馬場所在の滝の原遺跡が確認されており、9世紀前半段階には底部の切離し技法として糸切りを有する製品が普及すると考えられ、底部ヘラ切りを行う前段の土器群の年代を考慮して、9世紀第2四半期から第3四半期の年代が与えられている。

広畑遺跡から出土した土器を概観すると、土師器杯では内面にヘラミガキと黒色処理が明瞭に施されるものが主体であり、黒色処理が施されない資料は極めて稀である。底部の調整は回

転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ、無調整の三種類が確認できるが、手持ちヘラケズリの出土が最も多く、次いで無調整のものが多く回転ヘラケズリの出土量は非常に少ない状況にある。

甕は、ロクロが使用され、胴部下半にはヘラケズリが施されるが、タタキは確認できない。ロクロの使用痕は胴部上半に残り、胴部下半はヘラケズリによる調整で消されてしまう。器形としては全体的に長胴化したものが主体をなし、口唇部の形状にいくつかのバリエーションを見ることができる。

須恵器杯は回転糸切り後無調整のものが主体であり、ごく稀に手持ちヘラケズリによる再調整が施される。8世紀後半から9世紀の須恵器杯は、前半段階は底部の再調整が施されるものと、施されないものが共存するが、後半段階には無調整のものが主体をしめるようになる。当遺跡では再調整を施すものと施さないものの両者が確認されるが、出土量では無調整が圧倒的に多い状況にある。

長頸瓶においては器形の全体が判断できるものは出土しなかったが、頸部にリング状の突帯がめぐる資料が出土している。

このように、広畑遺跡から出土した土器群は金沢地区Ⅶ土器群の特徴と非常に類似していることから、Ⅶ土器群と同様に9世紀第2四半期から第3四半期の年代が妥当である考えられる。

更に、広畑遺跡から出土した土器をもって年代観の補足をおこなうと、広畑遺跡からは施釉陶器が出土している。出土した施釉陶器は灰釉によって施された椀皿の類である。この灰釉陶器は黒笹90号窯式に比定できるものであり、年代としては9世紀末後葉が考えられる。東北地方において、9世紀代になると官衙遺跡や周辺遺跡から施釉陶器の出土が確認されるようになる。この時期に確認される施釉陶器としては井ヶ谷78様式（9世紀前葉）・黒笹14窯式（9世紀中葉）・黒笹90号窯式（9世紀後葉）があり、時代が降るごとに出土量は増加する傾向にある。

以上の検討では、土師器、須恵器、施釉陶器の各年代観において大きな矛盾はなく、広畑遺跡から出土した土器群は9世紀後半（9世紀第3四半期）の年代が妥当であると考えられる。

つまり、これらの土器群を出土した1号溝跡の年代についても、9世紀後半の年代が与えられ、1号溝跡と重複関係にある4棟の掘立柱建物跡は1号溝跡の9世紀後半以前の年代が与えられる。掘立柱建物跡の上限については決定することはできるものの、下限については決定する根拠は希薄であり、今後の泉廃寺跡における遺構の重複関係や出土遺物から、遺構の存続時期や年代の決定が必要であると考えられる。

1号溝跡からは9世紀後半の土師器、須恵器、施釉陶器とともに多量の墨書土器が出土した。墨書土器は、手持ちヘラケズリを行う土師器杯にみられ、甕などには見ることはできない。

判読できた墨所は前述したように「厨」「寺」「主」「定」「田」「木」「浄」「吉」「南」「河」「見」「褐(福？)」「子井」「□毛」「万毛□」などがある。

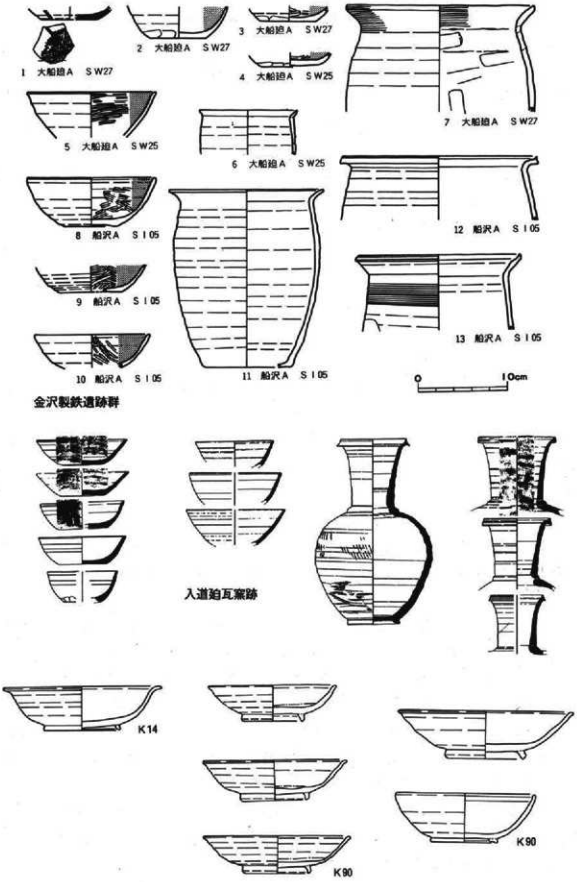


図29 入道迫瓦窯跡出土遺物・黒笹窯跡出土遺物

通常、墨書土器には地名や施設、人名、職名を表す文字や吉祥句と考えられる文字がかかれることが多い。

広畑遺跡から出土した墨書土器には施設やを表すものとして「厨」「寺」が確認されている。このうち「厨」の出土が最も多く、書体から複数の人物によって書かれた文字であることが確認されている。また「寺」は1点の出土を確認している。前述したが、広畑遺跡で確認された掘立柱建物群は泉廃寺跡に関係する建物群である可能性が強く、行方郡衙の範囲は当遺跡まで拡大する可能性を秘めている。掘立柱建物跡は墨書土器を出土した1号溝跡と重複関係にあり、1号溝跡がどのような性格を有する溝跡かは不明であるものの、墨書土器の中には、官衙施設を示す「厨」や郡衙に附属する附属寺院を示すと考えられる「寺」が出土したことは、今後行方郡衙のような地方官衙遺跡の構造や施設、機能を考える上で非常に重要な情報である。

「参考文献・引用文献」

1997 宇佐美雅夫『赤粉遺跡』楢葉町教育委員会

1980 伊東信雄他「政庁　本文編」『多賀城跡』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

1981 伊東信雄他「政庁跡　図録編」『多賀城跡』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

1987 武田耕平「五十辺遺跡」福島市教育委員会・ムネカタ興産株式会社

1985 伊東信雄他「関和久遺跡」福島県教育委員会

長谷川厚「東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向の成果と課題」『東国土器研究』東国土器研究会

伊藤博幸「陸奥国における黒色土師器」『東国土器研究』

木本元治「福島県内の黒色土師器（平安時代）」『東国土器研究』

1996 大川清他「日本土器辞典」雄山閣

1995 安田稔他『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県教育委員会・福島県文化センター・東北電力株式会社

1995 安田稔他『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅵ』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・東北電力株式会社

写　真　図　版

写真１　遺跡遠景（北から）

写真２　遺跡近景（南から）

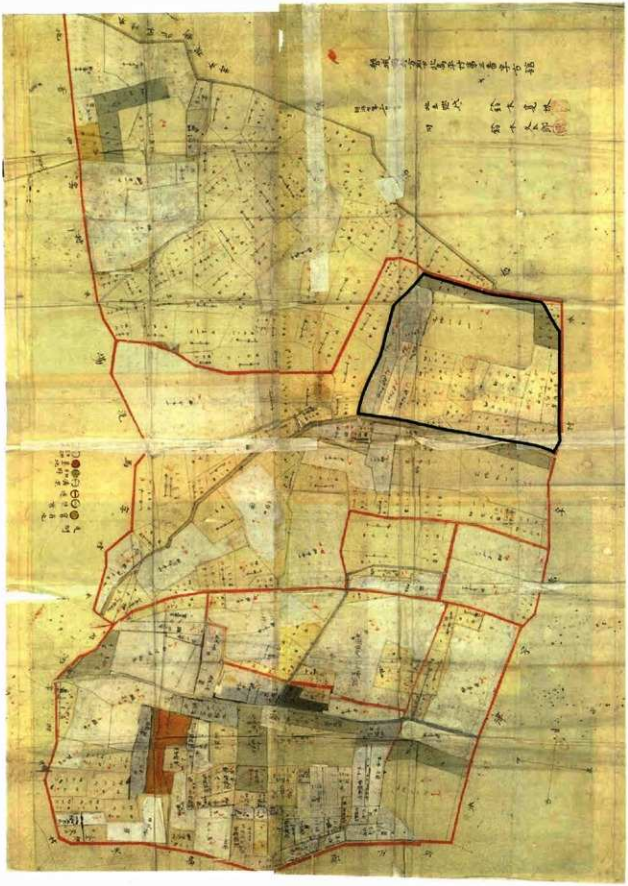


写真3　磐城国行方部下北高平村第三番字古館　明治廿年十一月廿日　地籍図

写真4　北側土塁(北から)

写真5　北側土塁(北から)

写真6　西側調査区(南から)

写真7　セクションA－A'(南から)

写真8　北側調査区(西から)

写真9　セクションB－B'(南西から)

写真10　北側調査区(北東から)

写真11　北側調査区(西から)

写真12　シガラミ検出状況(西から)

写真13　セクションC－C'(西から)

写真14　セクションD－D'(西から)

写真15　北側調査区・シガラミ検出状況(東から)

写真16　遺跡近景(東から)

写真17　文化財標柱(北東から)

写真18　南側調査区(東から)

写真19　南側調査区(西から)

写真20　西側土塁断面(南から)

写真21　1　土師質土器

写真22　2　土師質土器

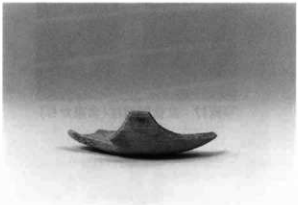


写真23　3　土師質土器

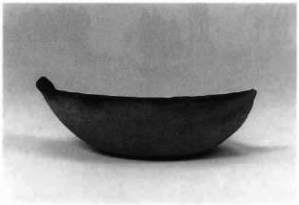


写真24　4　土師器

写真25　5　土師器

写真26　鐔口　「奉　城明見大明神　高平村半谷次衛門」銘面（S＝1／1）

写真27　鐔口　「元禄十五壬午年八月十五日　大工泉田志賀光重」銘面（S＝1／1）

写真１　正福寺本尊　不動明王座像

写真２　遺跡遠景　伐採前(南から)

写真３　遺跡近景　伐採後(南東から)

写真４　遺跡近景　伐採後(東から)

写真５　遺跡近景(西から)

写真６　遺跡近景(西から)

写真７　Ｓ×１(右)・Ｓ×２(左)(西から)

写真８　Ｓ×１(北から)

写真９　Ｓ×２(西から)

写真10　Ｓ×３(東から)

写真11　S×4（奥）・S×5（前）（西から）

写真12　S×6（前）・S×7（中央）・S×8（奥）

写真13　表土除去後（東から）

写真14　表土除去後（南から）

写真15　表土除去後（西から）

写真16　表土除去後（北から）

写真17　表土除去後全景(北から)

写真18　表土除去後全景(南東から)

写真19　S×1（奥）（西から）

写真20　S×1　セクション（南から）

写真21　S×1（北から）

写真22　S×2　セクション（南から）

写真23　S×3（南から）

写真24　S×3　セクション（西から）

写真25　S×4（北西から）

写真26　S×4　墓石1（北東から）

写真27　S×4　墓石2（西から）

写真28　S×4　台座1（西から）

写真29　S×4　台座2（南西から）

写真30　S×5（南から）

写真31　S×5　セクション（南から）

写真32　S×5　台座（南から）

写真33　S×6（東から）

写真34　S×6　セクション（南から）

写真35　S×7　セクション（南から）

写真36　S×8（東から）

写真37　S×8　セクション（南から）

写真38　S×8　古銭出土状況（南から）

写真39　S×9（西から）

写真40　S×9　セクション（南から）

写真41　火葬墓群（南から）

写真42　S×10　骨片出土状況(南から)
セクション

写真43　S×19　骨片出土状況(南から)

写真44　S×26　骨片出土状況(南から)

写真45　S×30

写真46　S×30　石塔・台座出土状況(南から)

写真47　S×30　石塔・台座組合せ状況(南東から)

写真48　S×30　陶器片口出土状況(南から)

写真49　S×31(西から)

写真50　S×35　骨片・古銭出土状況(南から)

写真51　墓石塔建設作業
中央に骨壺を置き、礫は根石に使用

写真52　墓石塔建設作業
墓石を積み上げる

写真53　墓石塔完成
線香台・花立を置き、植栽する

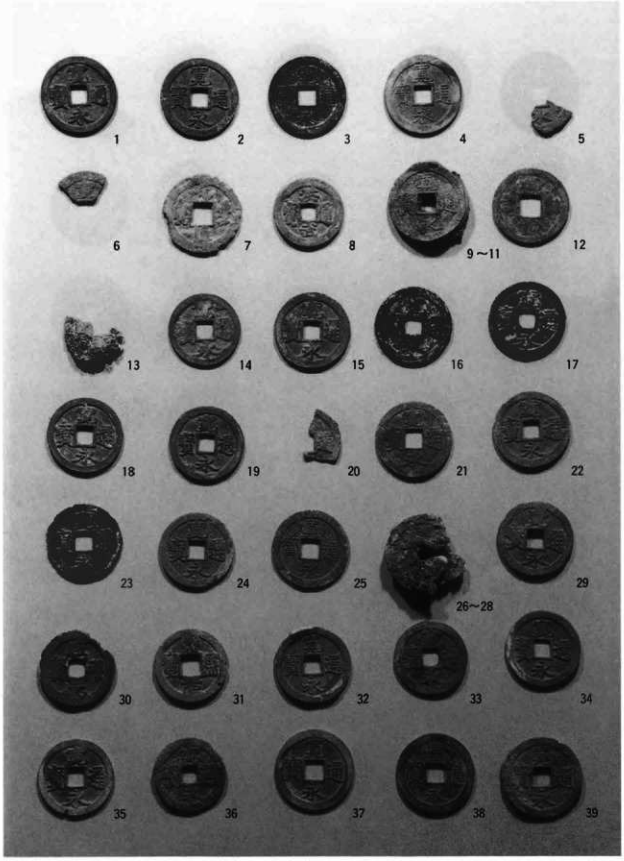

1
2
3
4
5
6
7
8
9～11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26～28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

写真54　古銭1～39(表)

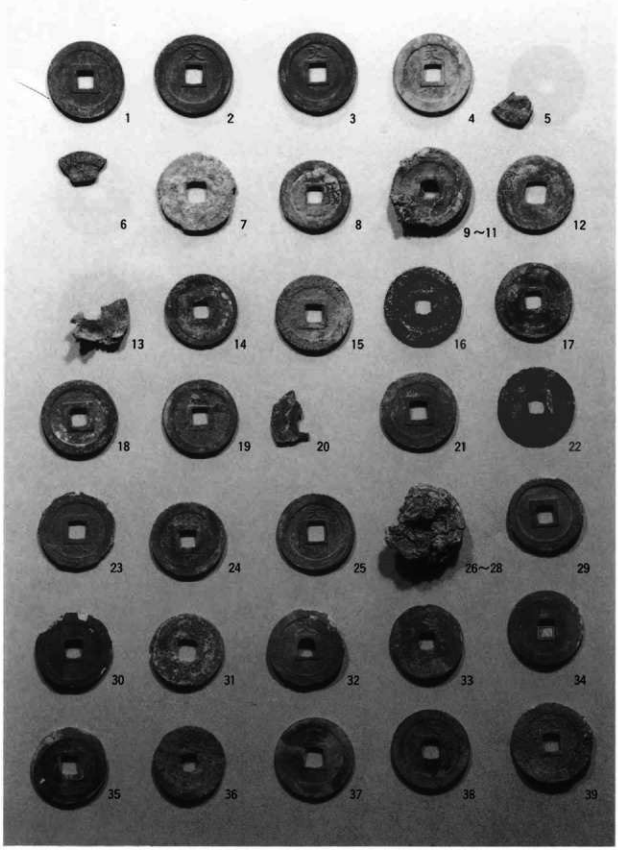

1
2
3
4
5
6
7
8
9～11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26～28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

写真55　古銭' 1～39(裏)

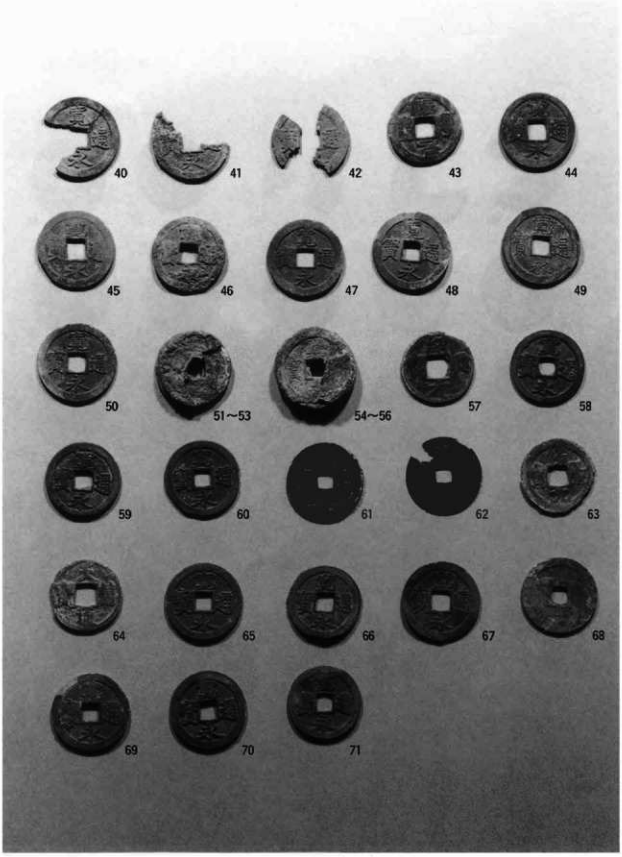


写真56　古銭40～71(表)

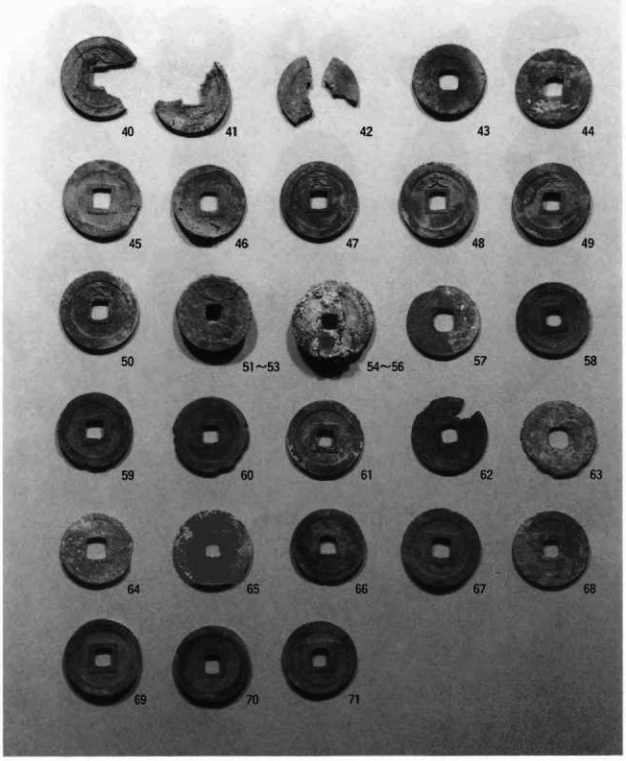


写真57　古銭'40～71(裏)

S×1　台座

S×3　墓石

S×4　墓石1

写真58　墓石・台座

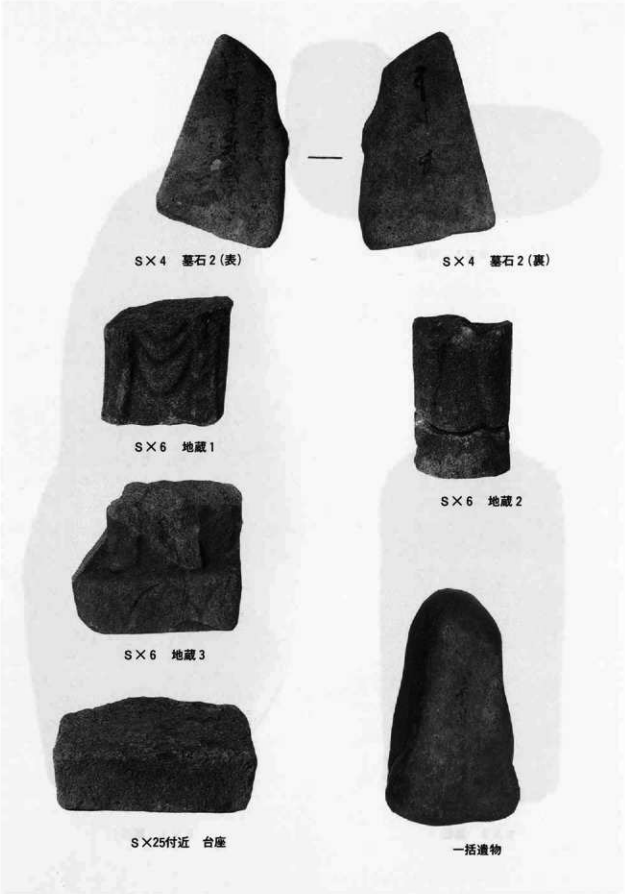


写真59　墓石・地蔵・台座

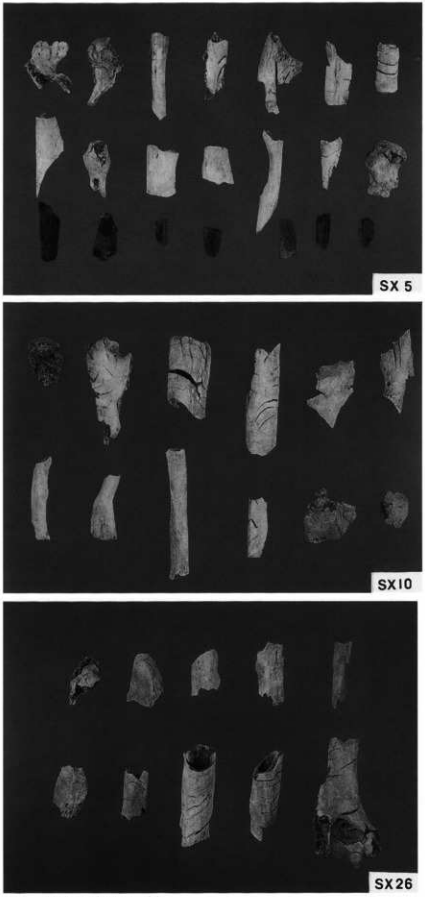


図1　残存四肢骨の一部

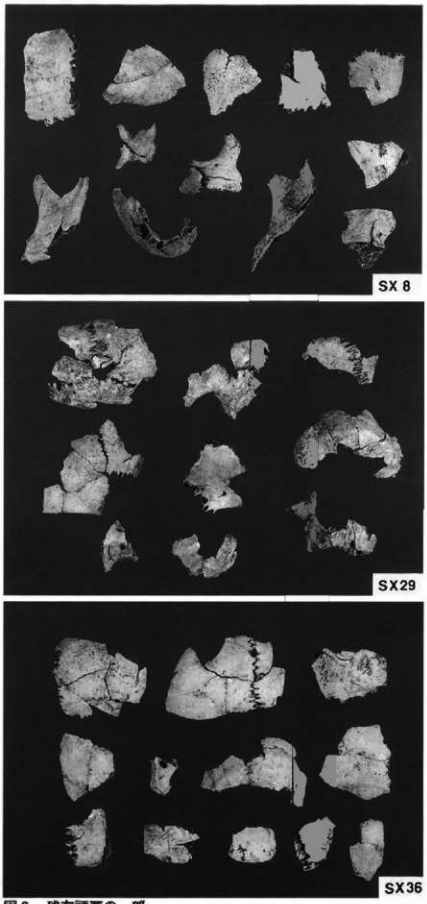


図2　残存頭蓋の一部

写真1　調査区全景(東から)

写真2　1号溝跡

写真3　1号掘立柱建物跡・2号掘立柱建物跡

写真4　掘立柱建物群(西から)

写真5　1号掘立柱建物跡(西から)

写真6　1号掘立柱建物跡(東から)

写真7　2号掘立柱建物跡(西から)

写真8　2号掘立柱建物跡(北東から)

写真9　3号掘立柱建物跡(西から)

写真10　3号掘立柱建物跡(東から)

写真11　4号掘立柱建物跡(東から)

写真12　4号掘立柱建物跡(北から)

写真13　土器出土状況

写真14　土器出土状況

写真15　「厨」出土状況

写真16　「厨」出土状況

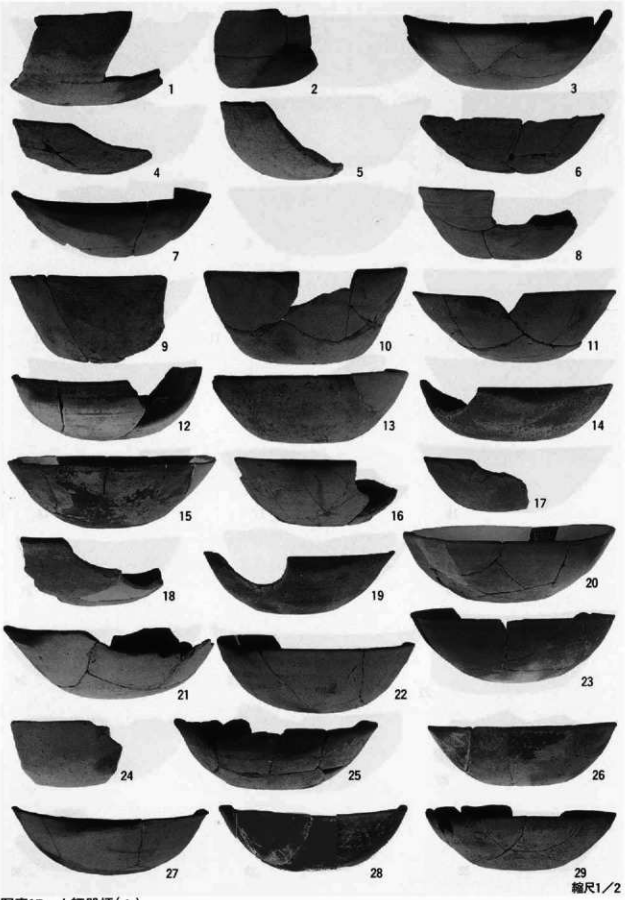

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
縮尺1／2

写真17　土師器杯（１）

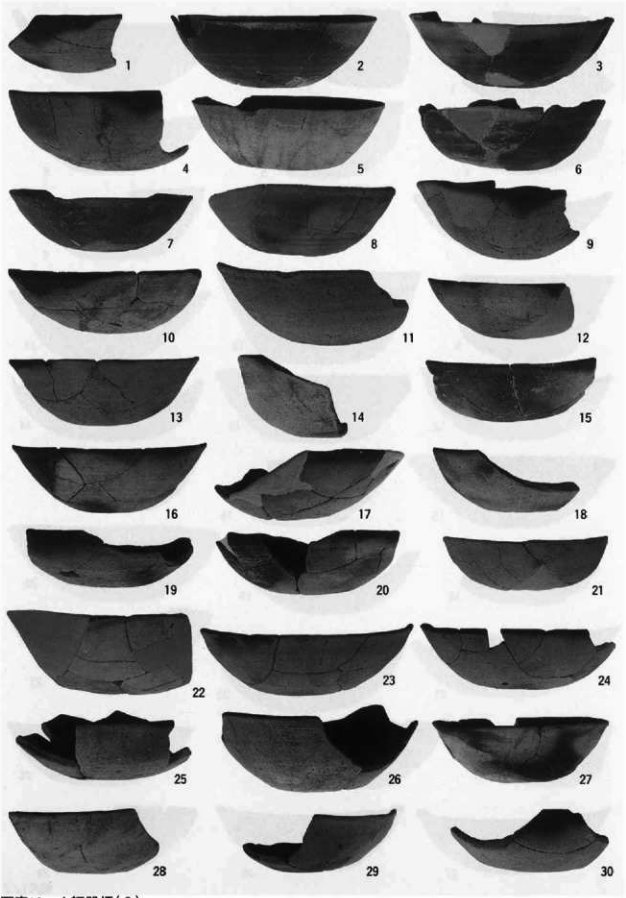

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

写真18　土師器杯(2)

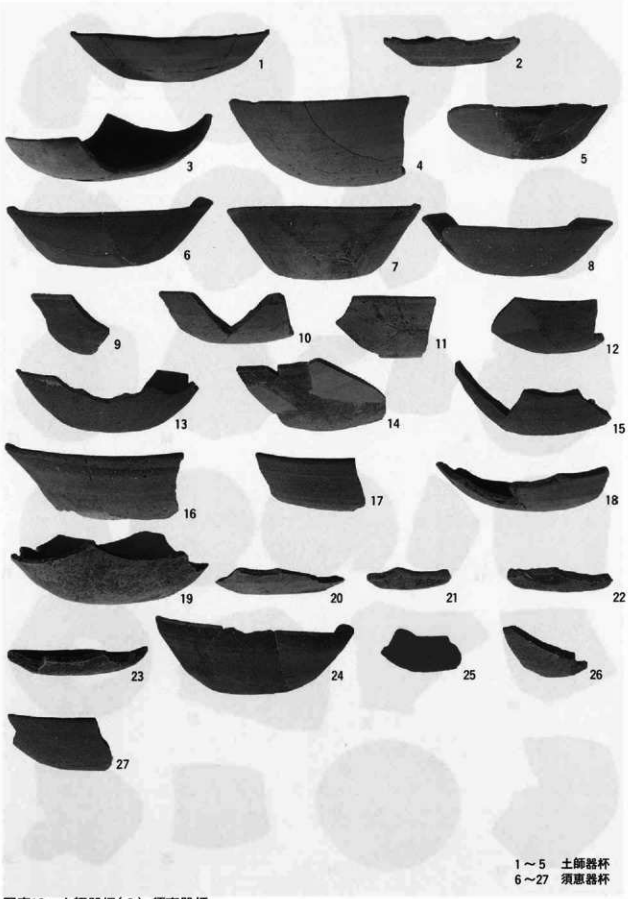


写真19　土師器杯(3)・須恵器杯

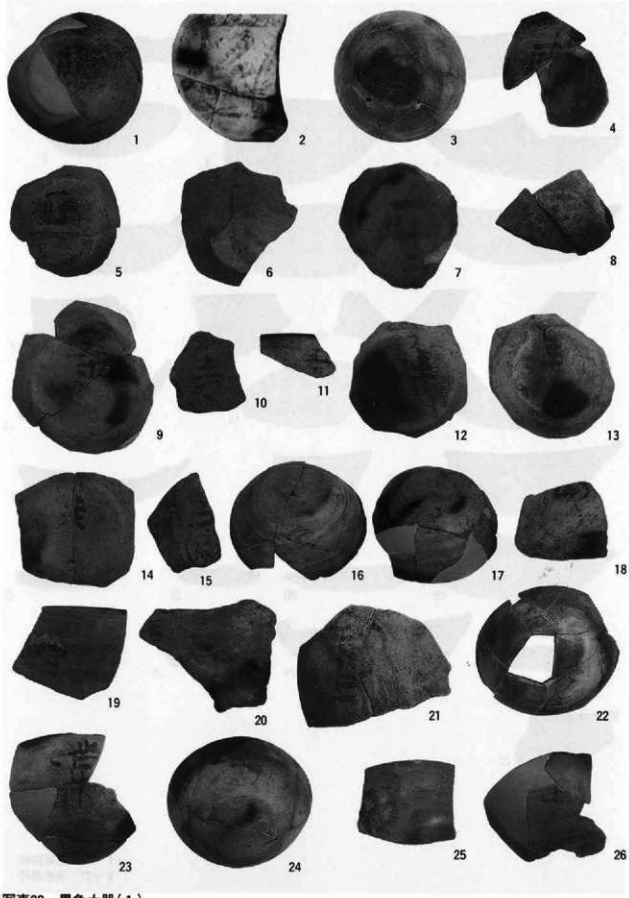


写真20　墨色土器(1)

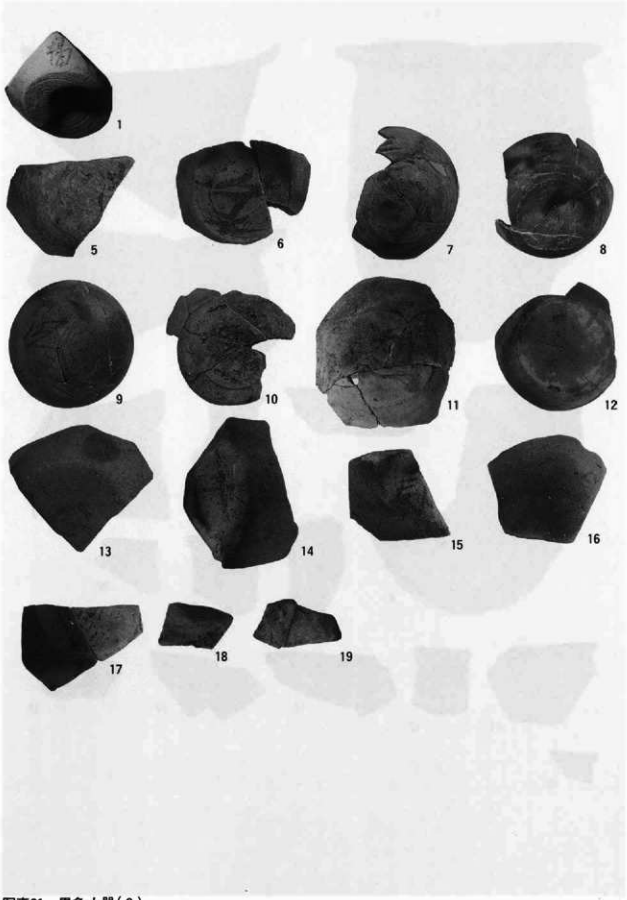


写真21　墨色土器（２）

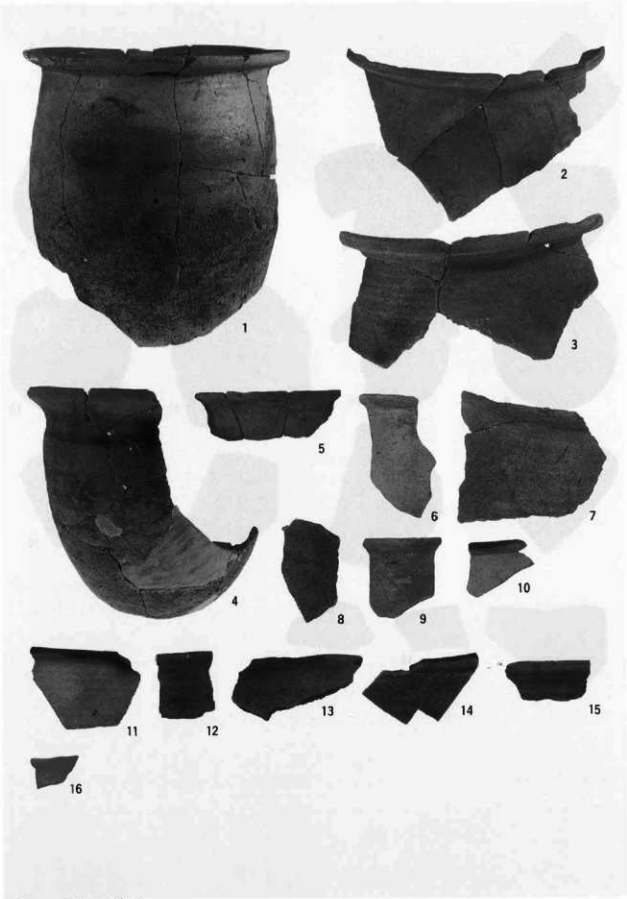


写真22　土師器甕(1)

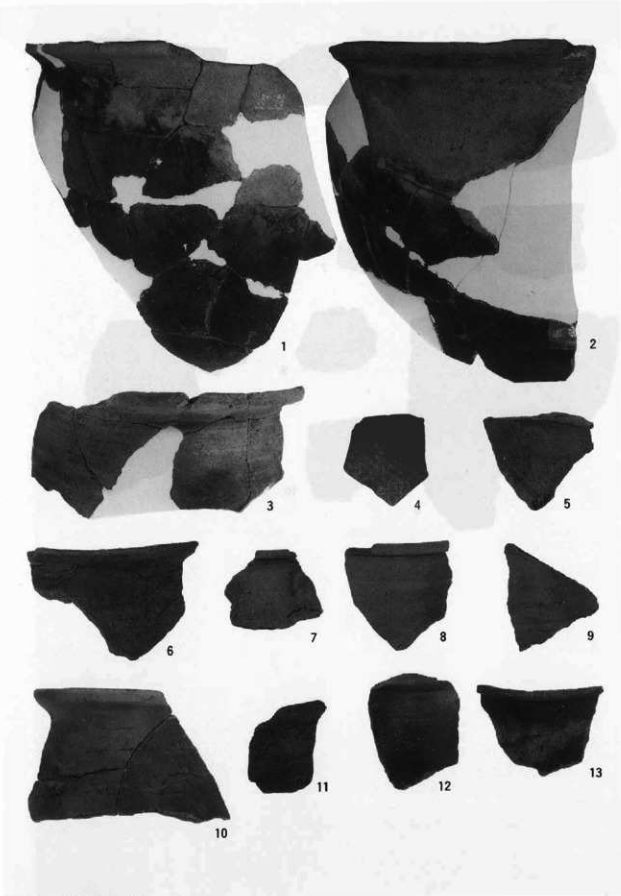
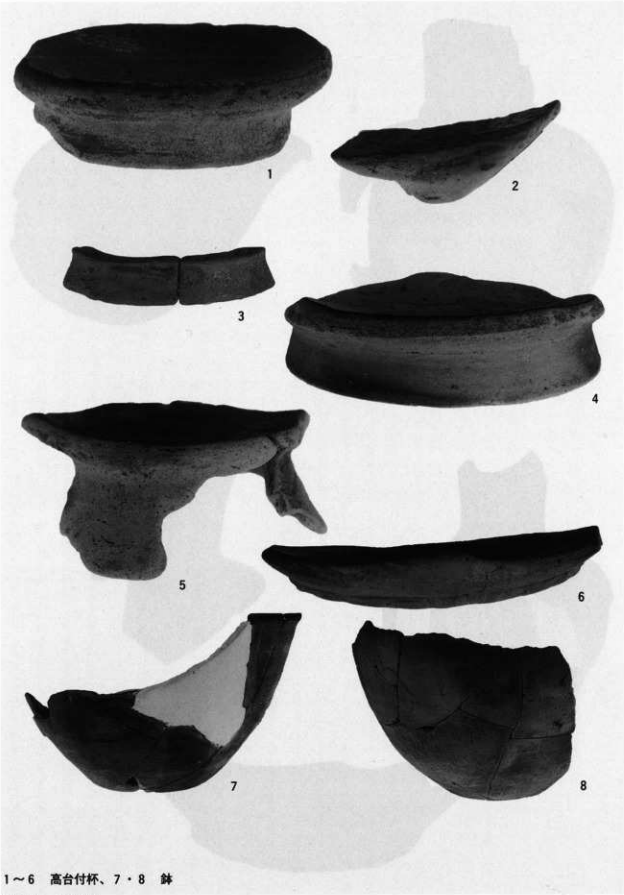


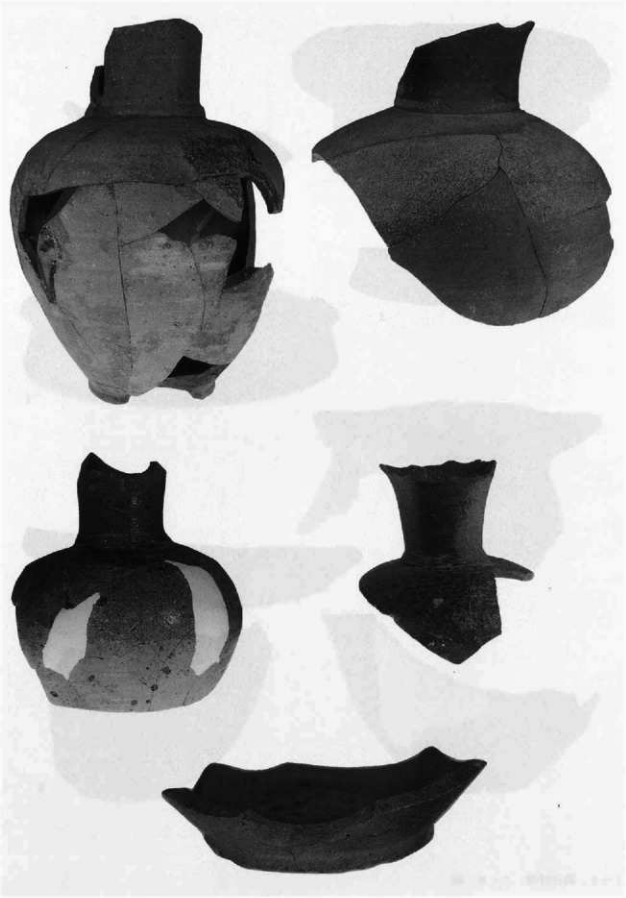
写真23　土師器甕（２）

写真24　土師器甕



1～6　高台付杯、7・8　鉢

写真25　土師器



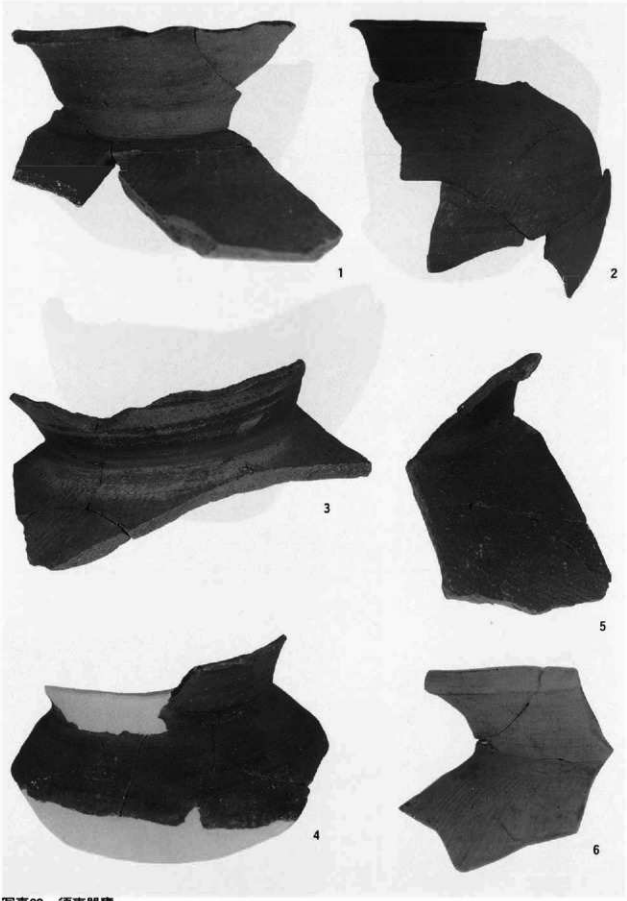
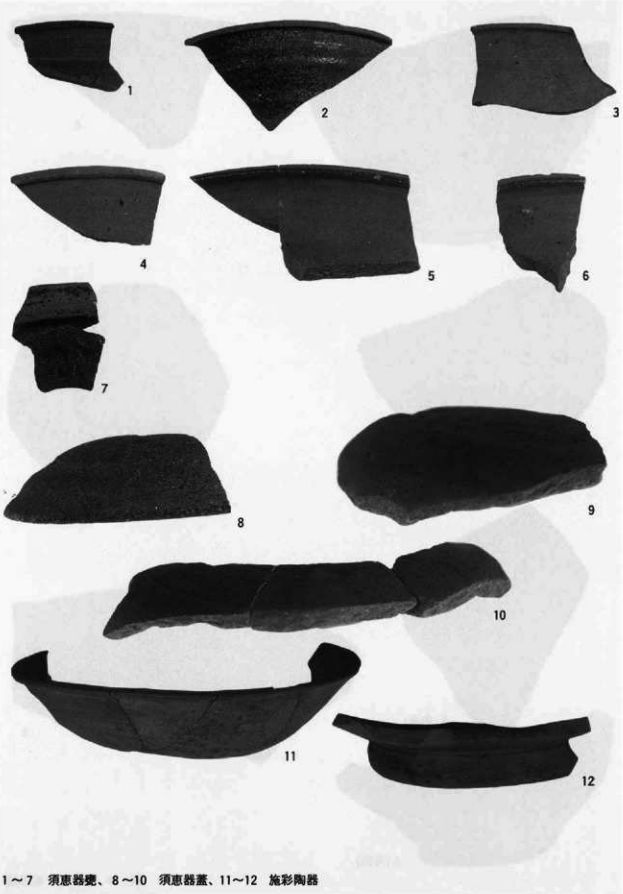


写真28　須恵器甕



1～7　須恵器甕、8～10　須恵器蓋、11～12　施彩陶器

写真29　須恵器・施彩陶器

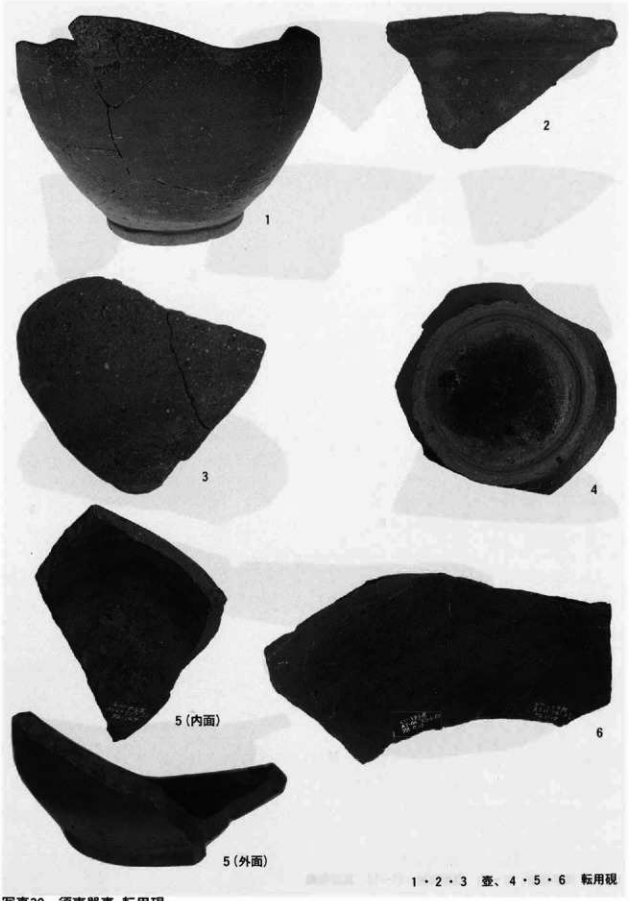


写真30　須恵器壺・転用硯

報 告 書 抄 録

ふりがな	けんえいたかひらちくほじょうせいびじぎょうかんれんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書
副書名	下北高平館跡・正福寺跡・広畑遺跡
巻次	I
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	堀　耕平・鈴木文雄・荒　淑人
編集機関	福島県原町市教育委員会
所在地	〒975-0012　福島県原町市三島町二丁目45番地　Tel　0244－24－5284
発行年月日	西暦2000年（平成12年）3月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
下北高平館跡（しもきたたかひらたてあと）	福島県原町市下北高平字古館	206	00033	37°39′00″	140°49′35″	1995年10月～1995年12月	500㎡	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査
正福寺跡（しょうふくじあと）	福島県原町市泉字町畑	206	00275	37°38′35″	141°00′30″	1996年1月～1996年3月	660㎡	
広畑遺跡（ひろはたいせき）	福島県原町市泉字塚越	206	00098	37°38′40″	141°00′30″	1998年8月～1998年12月	2,150㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下北高平館跡	城館跡	中世	土墨・堀	土師質土器・土師器	金沢氏居館跡
正福寺跡	寺院跡	近世	近世墓	墓石・台座・古銭・人骨・陶磁器	礫積墳墓群と火葬
広畑遺跡	官衙関連	奈良・平安時代	掘立柱建物跡 溝跡	土師器・須恵器・施釉陶器	行方郡衙関連遺跡

原町市埋蔵文化財調査報告書第21集
県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

平成12年3月31日発行

発行　福島県原町市教育委員会
〒975-0012　福島県原町市本町二丁目27番地

印刷　株式会社鹿島印刷所
〒979-2335　福島県相馬郡鹿島町鹿島字町159番地